

契約せしことの虚偽なるなり

- そらごと
- まごごなき
- たのめてぬ
- かばる心
- 契むなしく
- 待夜むなしき

萬
いつはりも似つきてぞする打たへもまことわざもこわれに戀めや
家持

古
いつはりのなき世なりせばいかばか 人のことの葉うれしからまし
よみ人

後
いふことのたがはぬものにあらませば後うき事もきこえざらまし
同

未かけしことよき人のいつはりはさすがにたのむふしもありけり
春門

ことよきはまことすくなき心とおもひかへさでたのみしもうし
千

○憑偽戀

いつはりとは知ながら猶たのむこゝろあるなり

- 今更に
- こりぬ心
- 鶴さへもうれし
- うきにまされる
- つれなきよりは
- そのそらごも
- そらごなき

古
いつはりとおもふ物から今更にたがまことをかわれはたのまむ
よみ人

同
たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ
躬恒

金
戀わふる君にあふてふことの葉はいつはりさへぞうれしかりける
千

○變戀

かばる 人のこゝろのかはりはてたるなり

- つれもなく
- うつし心
- うつるふは
- かばる契
- うき人心
- ここの葉かばる
- いろかばる
- うつるふ
- 秋風のふく
- 淵瀬をしらぬ
- 末の松山
- あかす川
- 月草
- はかなき契
- 風かばる
- 引かへて
- かばりゆく
- あらぬ方にも
- 浅はかに
- わすらるゝ
- つれなき心
- うつるふ

古
今はとてわが身しぐれとふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり
小町

後
身を分て霜やおくらんあだ人のことの葉さへにかれもゆく哉
よみ人

拾
うつろふは下葉ばかりとみしほどにやがても秋になりけるかな
内侍

續
かねてよりおもひしことのたがはぬはほどなく人のつらき也けり
小式部

あひみしも本のつらさにかへりてはふたゝびかはる袖のいろかな
内遠

ことならばおもかげさへにかはらなん有しにも似ぬ人のこゝろか
廣足

ありしにもあらずいかにのうたがひにかつわれからやはかり初けん
景樹

○俄變戀

漸變戀 とみにかはる やゝかはる

俄變戀はかはる事の速かなる也漸變戀はかはるうちにもどやかなる也

- 目の前に
- 安くかばる
- やゝかはりゆく
- うつろひがたに
- ころもへずして
- ほごもへなくに
- 秋やはかなくなる
- かばり行けしき
- わすれ行
- うさくなる

後
いづかたに立かくれつゝ見よとてかおもひぐまなく人のなりゆく
俊隆

金
目の前にかはる心をなみだ川ながれてやとも思ひけるかな
江侍

千
かはりゆけしきをみてもいける身の命をあだにおもひけるかな
大輔

新

出ていにしあとだにまだかはらぬにたが通路といまはなるらん
末の松まつらんとのみたのみつゝ夜がれせしまに浪こえぬとか

業平
千 隆

○忘戀 わする

先の人の我をわすれたるなりわが方よりわするゝよしにはあらず

- わすられて ○わすらるゝ身 ○忘れはつらん ○あまたえて ○なごりなく ○あさもなく
- さほぬこし頃 ○思ひも出し ○何たのみけん ○さりともさらそ ○みしをかぎり ○わればかり
- おもひ出も ○わすれがたみ ○わすれとこいひし中 ○わすれ水 ○わすれ草
- わすれ貝 ○うつればかばる ○ふるさるゝ

拾

さもこそはあひみむ事のかたからめわすれずとだにいふ人のなき

伊勢

新

今ぞしるおもひ出んとちざりしはわすれんとての命なりけり

西行

勅

ながゝらぬ命のほどにわするゝはいかにみじかき心なるらむ
いつしかと人は雲になりはてゝ月のみなるゝ袖のうへかな
今はまたたが住の江の岸なればわれをわすれぬ草は生けん

久胤
宣長

○歎忘戀 わすれんとす

わりなく深きによりてせめてわすれなばおもひなぐさむやとおもふ也

- 戀わすれ貝 ○わびぬれば ○忘れなんこ ○心さへつれなき ○有しにまさる思ひ
- 中々に ○おもひも出ず

よみ人
しらざ

萬

いとまあらば旅ひにもかむ住の江のきしによるとふ戀わすれ貝

後拾

勅

わすれなんとおもふにぬるゝ袂かな心ながきはなみだなりけり
わすれなんとおもふ心のかなしきはうきまうからぬ物にぞ有ける
今はよしおもひ出るを契にてわれだに人をわすれはてしを

眞成
磁春
宣長

○難忘戀 わすれがたし

ひたすらにおもひわびてもわすられがたき也

- わすられぬ ○わすれかれ ○よそにしも ○なごか心に ○おもかけ ○身にそふかけ
- わすれなむ ○かへすくゝや ○おもひ出とこ ○いつかわすれん ○つらけれど ○おもひすつれど

古

わすれなんとおもふ心のつくからにありしよりけにまつぞかなしき

よみ人
しらず

後

今更におもひ出じとしのぶるを戀しきこそわすれ侘ぬれ

左大臣

新

つらしとはおもふものからふし柴のしばしもこりぬ心なりけり
おもはじとおもへばなどてあやにくにわすられがたく戀しかるらん
わすれんとしひておもはじわすられぬ思のみこそ形見也けれ

利和
千 隆

○不忘戀 わすられず

人はつらくとも我はわすれずおもふと也

- よしや人こそ ○われ忘れぬや ○つかの間も ○色深くおもひし心 ○わすれしもせど
- いつかわすれん ○うきをわすれぬ ○わすれむものか ○つらくとも ○つらきにつけて
- うきにつけても

萬

わが命またけむかぎりわすれぬやいや日にけには思ひますとも

笠原女

わすらるゝ時しなればあしたづのおもひみだれてねをのみぞなく
住吉のきしに生たるわすれ草みづやあらまし戀はしぬとも
あひみしをおなじ世としもおもほえずわすれながらたつ月日哉
よそごとにおもひなすべき心さへなかくうきにまけてけるかな
かゝらずはいかにかせましようき人の心をさへにわすれざりけり

よみ人
しらす
同
東喜子
勝繼
由之

○被忘戀

わすらる

我はおもへどつれなくてわすられたる也

○つれもなき人のこゝろ ○人のいのち ○ひたふるに ○わすれゆく人の心 ○わすられて
○わするゝ人に ○さもにわするゝ ○人わすれ草 ○よそくしくも ○つらくのみ
○さばれの身 ○身はこゝわりさ ○おもひあへぬは涙 ○さりさては ○さへごもいばト
○うつればかばる歌 ○さふべき人に ○我身こそあらぬかそのみ ○君にならば ○わすれまじかば
忘れ草何をか程とおもひしはつれなき人のこゝろなりけり
わすらるゝ身をば思はず誓てし人のいのちのをしくも有哉
人はいざ有もやすらんわすられてとはれぬ身こそなき心ちすれ
袖の露もあらぬ方にぞ消かへるうつればかはる歎せし間に
風の音むしのねをだにきかじやはなどみし秋をわすれはてぬる
わするゝかさらばわすれもはてすしてなになか／＼にのこるおもかげ
素性
右近
よみ人
しらす
太上天皇
眞淵
蘆庵

○悔戀

後悔戀

くも のちにくも

人のうけひかぬにも逢みるにもうとくなり行にもたゆるにもさま／＼あるべし
○かたらへぞ ○よしもなく ○いさゞおもひの○くやし ○くいのやちたび○なげくかひなく
○かへらトを ○今のこゝろ ○後もたごらて ○おもひかへせご○淺はかに ○人のくやしさ
○かばるもしらで○かれ行中は ○今ぞおもふ ○何みそめけむ ○何しらせけむ ○ほのめかせしも
○うき人に ○心うつるふ

かくばかり戀むものとししらませばよそにくるべく有けるものを
何せむにいのちをかけてちぎりけんいかはやとおもふをりもありけり
逢までの命も哉とおもひしはくやしかりけるわがこゝろかな
心にもかなはぬものは身なりけりしらでも人にちぎりける哉
ふみふよふ戀の山路よそゝみゆく心のこまになどまかせけん
くやしきもうらみつる哉なごりなくたえてのうさも思ひかへさで
よみ人
しらす
實方
西行
道濟
源子
蘆庵

○恨戀

怨戀

うらみ うらむ

戀のはじめには人のつれなきを恨み契ても志の深からぬを恨みかきりなくたのみし
人の心のかはりゆくを恨み又こと人に心かよはすも中たゆるもともにうらみ也
怨戀はうらみねたむことなり

○こふれども ○おもへども ○ちぎりてる ○うつり行心 ○よそにうつるは○つらしさて
○うち出て ○つもしそふ ○ばるけずよ ○うらみばや ○うらめしく ○我うらみ
○つもるうらみ ○つゝみあまる ○うらみによわる○せごつ ○中のうらみ ○うらみても猶

○うらめしき ○下のうらみ ○眞葛原 ○くずの葉風 ○むが身をうら ○さばぬうらみ ○つれもなき

古 後 拾

秋風の吹うらかへすくすの葉のうらみても猶うらめしき哉
世の中のうきはなべてもなかりけりたのむかぎりぞうらみられける
かくれぬの底のこゝろぞうらめしきいかにせよとてつれなかるらん
わびつゝもあひみんとのおもふこそ人にくからぬうらみ也けれ
およびなき身をぞうむることわりの人のつらさを思ひかへして
人をのみつれなき物とおもひけりあまりに身をもわすれたるかな

貞 文
よみ人
しらす
重 老
景 樹

○恨身戀 みをうらむ

人のつらきにつきてはかへりみてわが身をうらみ世をもはかなむ也

○ながらへにける ○われぞわが身の ○時過にける身 ○いやしき身 ○うき身
○身のさが ○敷ならぬ身 ○われからこ ○藻にすむ虫 ○あまのかるもに住虫
○わすらるゝ身 ○我になしつゝ ○昔にもあらずなる身 ○うき身のさがこ ○君にまさりて
○今はわが身ぞ

後 拾 代 詞

かれはつる人の心もつらからで時過にける身をぞうらむる
身のうきを人のつらさとおもふこそ我ともいはすわりなかりけれ
いかばかり人のつちさを恨みましようき身のとがと思ひなさは
身のとがに人のつらさを思ふこそわすらるまじき心なりけれ

よみ人
しらす
同
成 助
頼 氏

○恨人戀 ひとをうらむ

こがれてもかひなきむねのはしりびはわが身をおきてたれを恨みん
人をのみつれなきものとおもひけり鏡のかけをよはぬ昔は

信 道
節 子

わがおもふばかりは人のおもはぬをうらむなり

○つれなき人を ○人のつらさを ○さもあらぬ人ぞ ○我よそならば ○身をすれば
○人のさがさと思はぬ ○見ずきかずありせば

後 拾 新 千

わすれなむとおもふ心のやすからばつれなき人をうらみましやは
かすならぬ身は心だになからなむおもひしらすば恨ざるべく
戀ゆゑはさもあらぬ人ぞうらめしきわれこそならばとはまし物を
身をすれば人のとがとおもはぬに恨がほにもぬるゝ袖かな
ふかよりし昔にかはるつれなきをおもふ心のやるかたぞなき
身ひとつのうきになしてはかこてどもさすがに人のつれなかりけり

よみ人
しらす
同
是 忠
西 行
譽 正
滿 蓮

○絶戀たもる

ちぎり置し中のたえはてたるなり

○たえぬるを ○申たえて ○たえはつる ○たえでけり ○かきたゆる
○あさもたぬにき ○こトさだにいばで ○かへりて後の歎 ○うきながらさすがに ○いかにせむ
○かれにけり ○むかしがたり ○逢夜たえぬる ○さだえがちより ○なごりなく
○ながれてまこそ ○かげなかりけり ○いかになればか ○さばれざるらん ○わか玉のを

○わすらるゝ ○かたいさの ○玉の緒の ○わびはつる

古 あふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しき事もしりけれ
同 わびはつる時さへものゝかなしきはいつこそをしのぶなみだなるらん
後拾 こじとだにいはでたえなばうかりけり人のまことをいかでしらし
六 人心いまはかぎりとなりぬれば見しこそみぬにおとらざりけれ
ことならばいけるかぎりのおもひ出も絶てわするゝよしも有なん
しぐれのみ袖にのこしてまつ風のたよりもよそになりける哉
冬草のかれにしものと思ふらんさてこそ下にもゆるおもひを
大 大 春 相 同 よみ人
樹 茂 門 模 模 さらず

○欲絶戀 たえむとす

やううゝとましくなりて今たえんとする也
○浅ましや ○かれくみ ○うさくのみ ○中ぞらに ○人の秋 ○こゝろほそくも
○おもひながらに ○たえぬべくのみ ○浅川の ○岩間をくゞる水 ○しかすがに ○忘られぬべく
後 さゝがにの空にすがける糸よりも心ぼそしやたえぬとおもへば
千 うたがひし命ばかりは有ながらちざりし中のたえぬべきかな
續 たえなむとおもふ心はたれなれや人やりならず戀しかるらむ
あともなくたえしはてすはそのかみにおもひかふべき事もあらまし
ともすればわりなく人をうらむるや絶はてぬべきかごとならまし
千 茂 親 大 よみ人
蔭 樹 重 貳 さらず

○絶後戀 たえてのち

契はたえて後になほ見もししのびもしなどさまぐなる也

○たえぬる後 ○年月たえて ○あかさし契 ○そのおもかけ ○むかしへに ○そのかみに
○なごりしもこそ ○わすれがたみ ○なれにし袖を ○又もかへらむ ○かきたえて ○ほごもへぬるを
○おもひたえても ○戀は昔に

古 みなせ川ありて行水なくばこそつひにわが身をたえぬとおもはめ
金 かきたえてほどもへぬるをさゝがにの糸は心にかゝらすもかな
千 うき人をしのぶべしとおもひきやわが心さへなどかはるらん
續 あひみてし人ともさらにおもはねば今いひそむる心ちこそすれ
同 ことのはもたえはてぬればつらかりしそらたのめさへ戀しかりけり
さかなさをこらさむとぞそむきしにおもへばつひのよすがなりしを
戀しさはおなじ昔の心かはわれのみしりて年そへにける
あはれてふことこそ今はかけざらめかへりみもせで過る君かな
うらみさへまけじ心のならはしにとはずとはれぬ中となりなき
よみ人 美 堀 教 演 山 尊 伴
さらず 濃 川 耶 臣 比 孫 鹿

○絶久戀 絶經年戀 たえて久し たえてとしふる

中たえて後とし月をあまたにへたる也

○夜がれし ○床のちり ○たえにし中は ○まくらのちり ○いひ出て ○昔がたりも
○その世がたりも ○さしのくぬれば ○わすられがたき ○いにしへの心 ○今はくやしき ○おもひかへせご
○くる事たえて ○かたみ ○わすれがたみ

形見こそ今はあだなれこれなくばわするゝ時もあらましもものを
夢にだにみるこそぞなきとしをへて心のどかにぬる夜なければ
一夜とて夜がれし床のさむしろにやがてもちりのつもりぬる哉
ちりのゐるものとまぐらはなりにけり何のためにか打もはらはむ
おなじ世になほありながらあふ事の昔がたりになりけるかな
大かたの夜がれとてこそ過しつれかくながらやは絶んと思ひし
年浪の立へだたよりし中ながらうとき人とはおもほへぬかな
中たえておのがさまぐ世をふればかけしちかひもかひなかりげり

よみ人
しらす
同
讚 岐
和泉式部
季 保
依 平
久 胤
枝 直

○馴戀

なるゝにつけてこゝろもおかすなりゆく也

- なづさへば ○語るになれて ○むつろゝ ○へだてなく ○なれてそふ ○をりくゝの心みえば
- こゝろみかてら ○よそながら ○いつさなく ○いつしかさ ○なれゆくを ○なるゝにつけて
- なるさしもなく ○朝夕なれて ○年月に ○心安くも ○心さけても ○こゝろもなく
- ほごもなく ○うさからぬ ○なれて物思ふ ○うしやなづさふ ○なるゝかひなく ○よそになれゆく
- 心もおかず

し賀のあまの鹽やき衣なるれども戀ちふものはわすれかねつも
見ても又またも見まくのほしければなるゝを人はいとふべらなり
おもひつゝへにけるとしをしるべにてなれぬるものは心なりけり

よみ人
しらす
同
同

おもふとていとこそ人になれざらめしか習ひてぞねば戀しき
うらもなくなれぬる中の戀衣つまといふとも人はとがめし
わぎもこが家にかふなるから猫の見知がほにもなるゝころかな

同
依 平
敏 則

○疑戀

人の心をこなたよりうたがふなり

- ひさの心も ○こごったに ○かはるやこ ○なびくやこ ○いかならん ○はかなしや
- 秋風いかに ○そのこごよきも ○しばらくは ○はかられやせむ ○たのむたき ○行末の
- かはらトの ○たのまれず ○あだ人 ○いつはり ○いつはりのある世 ○心をしらぬ
- 我ならぬ人に ○はかなくたのむ ○いかゞさぞ ○たがまこご ○まこごならねば ○又たのまれず
- うたがはれぬる ○たのむにかたき

ちやの色にうつろふらめどしらなくに心し秋の紅葉ならねば
いたづらにたびくしぬといふめればあふには何をかへむとすらん
つらかりし心ならひにあひみてもなほ夢かとぞ疑がはれける
わするなといふにつけてぞたのまれぬさはさることの有りと思へば
大舟のおもひたのめといひはいへどいせをのあまのうけがたの世や
うれしさもうき身におはぬかねごとくきけばいらへもやすらはれけり

よみ人
しらす
中 務
行 宗
よみ人
しらす
大 平
宣 長

○立門戀

かどにたつ 門の外に立てうかやふ也

○たまこそたてれ ○よひのまに ○櫛の板戸 ○櫛の戸口 ○我はさながら
○むぐらにさせる ○むぐらにささす ○草の月さし

後 宵のまに早なぐさめよ石の上ふりにし床も打はらふべく
新 秋の夜の有明の月のいるまでにやすらひかねてかへりにし哉
六 山のはに入なんとする月みつゝ我はとながらあらんとやする
おせど猶あけぬつまどは我ならぬたれに心をさしかたむらん

○過門戀 かどをすぐる

我過行をも人のとはで過るをもよめり

○よぎり行 ○過ゆく ○さながら ○宿をすぐ ○雲ぬにはわたる ○わが門過て
○戀しき時は ○はつかりの鳴てわたる

古 おもひ出て戀しき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや
拾 人しれずおもふ心をとめつゝいく度君が宿をすぐらむ
同 くもゐにて相かたらはぬ月だにも我門過てゆく時はなし
勅 三笠山きてもとはれぬ道のべにつらきもくての影ぞつれなき
かりそめの小柴ばかりにもふかどをむくらになしてとはれざりけり

○催戀 もよをす

物にふれていと戀しさのもよほしまさる心なり

○あけみれば ○はかなく人の ○うちつけに ○もよほしがほの○かこさがましき○そのことまなく

古 秋風のみ寒ければつれもなき人をそおもふ暮る夜ごとに
同 秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の戀しかるらん
同 ほとゞぎす人まつ山になくなればわれうちつけに戀まさりけり
わすれても過にしものをとはれたる夕に似たる庭のまつ風

○驚戀 おどろかす

とはぬ人をおどろかしました人よりもおどろかさねなどする也

○やさいふにこそ○山彦の ○心やゆきて ○わするゝ人を ○つれなき人を ○こたへにこりぬ
○何今さらに ○たがふれこそ ○跡の山風

拾 夢とのみおもひなりぬる世中を伺いまさらにおとろかすらん
後拾 おもひ出る事もあらじとみえつれどやといふにこそおどろかかれぬれ
同 夜な〜の目のみ覺つゝおもひやる心やゆきておとろかすらん
同 わすれてもあるべきものをたま〜にとふにつらさのおもひ出ぬる
續 忍ふればわれによそなる人ごともうき身の上とおどかれつゝ

○疎戀 うとくなる

おもふ中のやう〜おぼつかなくうとましくなる也

○人はよそにぞ ○天雲のよそにも ○うさくのみ ○おぼつかなくも ○枕もうさく
○我さはなしに ○いっばかり ○しられずしらぬ ○うさ濱

古 久方の天つ空にも住なくに人はよそにぞおもふべらなる
 後拾 いかばかりおぼつかなさなけかましこの世の常とおもひなさずは
 新 うとくなる人を何とてうらむらんしられすしらぬ折も有しに
 天ぐものなびくまでこそかたからめよそにみるをば人などがめそ
 ひたすらに人目をよくとおもひしはまことにうとき心なりけり
 忠家女 四行 黄中 景樹

○隔戀 へだつ

おもふ中のうとくへだてのあるなり

- へだつる心 ○へだてたる ○うさくしも ○あはぬ多く ○物ほかなげに ○あはぬ夜
- くもぬのよそ ○衣だに ○おもほぬ中に ○おしひへだつる ○契りし中も ○思ひへだつる
- おぼつかなく ○さはぬ日敷 ○春霞へだつ ○涙路へだて、 ○よそにこがる、 ○へだつる雲の
- 一重山 ○八重山

萬 君があたり見つゝもをらん生駒山雲なたなびき雨は降とも
 後 むつまじき妹せの山の中にさへへだつる雲のたえずも有哉
 拾 衣だに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつる哉
 うしつらし海山こえて通路にあはぬ月日はなどへだつらん
 へだてある人の心のうき雲やたへぬなみだの雨となるらん
 よみ人 千宜 同 同 千隆 隆長

○隔物戀 ものへだてたる

物ごしに隔ありてしたしくかよひがたき也

○あし垣 ○草がくれ ○八重葎 ○よむきふの道 ○一重山
 ○八重山 ○へだてゝまける ○へだてゝをれる
 萬 花ぐはしあし垣ごしにたゞ一目あひみし子もる千重に歎きつ
 同 一重山へなれるものを月夜よみ門に立出妹がまつらむ
 後 明らかりし浪心はつられれどすこしによせしこゑぞつれなき
 さもこそはへでてはつべき中ならめかたりかはすも垣ごしにして
 はしるしてかたらふをすのへだてより猶ゆるしなき人のこゝろか
 家持 守正 秀雄 利和

○隔一夜戀 隔二夜戀 隔三夜戀 夜をへだつ

あふ夜のへだゆるなり

- たゞ一夜 ○ふしのつらさ ○あすか河 ○今夜へだてば ○夜まぜにみえん
- 玉くしげ二夜 ○こよひいいでか ○くれ竹 ○こましふの竹 ○さゝ竹
- しのすゝき ○むらあし ○わか竹

萬 たゞ一夜へだてしからにあら玉の月日へぬるとおもほゆるかも
 六 なよ竹にえださしかはすしの薄夜ませにみえむ君はたのまし
 同 君にあはで二夜になりぬ玉くしげこよひいかでかあけんとすらん
 代 ことし生の竹の一夜もへだつればおぼつかなくもなりまさる哉
 なれぬれば一夜ばかりの夜がれにも明行ほどを待わびにけり
 きふといひけふのほそ布むねせばみあはでこよひも明んとやする
 湯原王 よみ人 朝忠 同 千ヶ 春海

あはずしてけふ三日月の眉引を妹かおもわにみむよしもがな

千ヶ

○隔日頃戀

日ごろへだてたる

いく夜ともさゝずしてたゞ日數多くへだてたるをいふ

○あはれ日まれく ○いくひきにも ○いく夜 ○夜ごろ ○此日ごろ ○さばでのみ

萬 後拾 代 万 後拾 代 萬 後拾 代 萬 後拾 代

あひみてはいく久にしもあらなくに年月のごとおもほゆるかも
ものいはで人の心をみるほどにやがてとはれでやみぬべき哉
あけくれもみるべきものを玉くしげ二夜三夜とも成にける哉
こゝろみに人のとひこぬおこたりをかぞへみしまにうとまれにけり

よみ人 道 命 天層御製 竹翁

○隔月戀

隔年戀

月へだてたる

としへだてみる

隔年戀は隔年月戀におなじ

○此月ごろ ○過る月日 ○月はへにけり ○年ぎりしける ○年月を ○住よしの松

白鳥のとば山まつのまちつゝぞ我戀わたる此月ごろを
住のえの松ならねども久しくも君とはぬよのなりにけるかな
君こふる身は大空にあらねども月日を多く過しつるかな
わすられぬものからつらきとし月はいかなる中のへだて成らん
かり初の夜をかれしだに恨にて身はならはして月もへにけり

笠 郎 女 清 蔭 伊 房 少 將 久 胤

○隔遠路戀

とほくへだてたる

戀しき人の遠路をへだてゝ有なり

○雲はなれ ○雲あなす ○天さがる ○風の音の ○心ぞらなり ○國遠み ○波路

月みれば國は同じく山へなりうつくし妹はへなりたるかも
國遠みおもひなわびそ風のむた雲のゆくごとことは通はん
思ひぬまり打ぬるよひのまぼろしも波路へだてし引かよひける
さもこそは行ほどとほき道ならめ心は人におくれましやは
へだつともあひしおもはは中空に心ばかりはゆきもあはまし

よみ人 同 長 明 伴 鹿 千 蔭

○誹戀

あつらふ

おもふ心を人に傳へむことを人にあつらふるなり

○この葉の及ばぬ ○人や傳へむ ○おもひやれ ○かくさだに ○ほのめかす

浅ぢ原小野にしめゆふそら言もあはんとときこせ戀のなぐせに
春さればまづさき草のさきくあらば後もあひみむな戀そわざも
けふの間の心にかへておもひやれ詠めつゝのみすぐる月日を
袖の上の露をたづねて三日月のかけばかりだにほのめかしてよ

よみ人 同 和泉式部 千 蔭

○白地戀

あからさまなる

かりそめにふとみたる心かりそめに逢たるこゝろ也

○かりそめに ○露のまの ○おもひかけずも ○夜をもさほさぬ ○見るほごもなし
○はかなき ○かけろふの ○あはれはかなき ○いさかりそめに ○かりそめおし

後 千 續
かげろふはほのめきつれば夕ぐれの夢かとのみぞ身をたどりつる
もくす火の磯まを分るいさり舟ほのかなりしに思ひ初てき
みしほどの夢ならませば中々にしばしはねたる心ちしてまし
めめばかりかはすこよひの手枕にながきうつゝの物や思はん
もきずりの袖のかばかり身にしみておもふはいつの契なるらん
よみ人 長 浄 光 蘆
しら 能 圓 輔 庵

○隠戀 隱在所戀 かくる ありかをかくす

隱戀は行方しれずかくれたるも隱在所戀はありかを つゝみかくすなり
○たづねばや ○跡たえて ○しらず今 ○こころのくま ○かきほおくれ
○ゆくへもしらぬ ○ゆくへもいづく ○しのおすみか ○何したふらん ○消しゆくへ
○ふりし木の葉 ○常夏のはかなき露 ○はひかくる ○あこもなく ○かくれたる
○はよきいの ○ありさもみえず ○いづかたに ○そこさしも定めぬ ○しられどさ
玉島や此河上に家はあれど君をやさしみあらはさすありき
數ならぬ身はうき草となりならんつれなき人によるべしられじ
さゝがにのいづくに人はありとだに心ぼそくもしらでふるかな
いづ方にもきかくれなむ世の中に身のあればこそ人もつられ
よみ人 同 元 同 同
しら 輔 輔 輔
ず ず ず ず

秋の田のほのみしよひのいなづまはいづれのみねのくまに消らん
さもこそはいとふあまりのわざならめかくれ所のねたくもあるかな
景 眞
樹 心

○争戀 あらそふ

何事にまれ戀につけて人といひあらそふ也

○物あらがひ ○むねはしりび ○むかひ火 ○さてはえあらず ○あらそふはしに
○あらトさいひて ○人の心 ○あだなりさ
萬 万 万 万 万
あらそへば神もにくみすよしゑやしよそふる君がにくからなくに
春日野の飛火の野守みしものをなきなといは罪もこそうれ
あだなりとあだにはいかい定むらん人の心を人とするやは
秋風にふかれてなびくをきのほそよくさこそいふべかりけれ
打つけに筆にいはするあらそひはつれなきほどのいのちげにして
よみ人 同 能 同 元 同 同
しら 宣 宣 親 親 親
ず 政 王 王 王 王

○有妨戀 被妨戀 さまたぐ

おもふ中も人に妨られ又人目の妨になりたる也

○人目づみみ ○人の中垣 ○うき中垣 ○つれもなき心より ○つらきへだて ○そのさまたげ
○さまたげられて
古 古 古 古 古
おもへどもひとめつやみの高ければかはとみながらゑこそわたらぬ
いひさしてとやめらるる池水の浪いづかたに思ひよるらん
いかなればかよふに道のなかるらん人目の關ぞすべなかりける
よみ人 同 同 同 同
しら 樹 樹 樹 樹
ず 樹 樹 樹 樹

○障戀 さはり

へだてさまたけのありてあひがたき也

- さばり多み
- あし分小舟
- 大かたの
- おもひぐまなく
- うたてもさばる

萬 みなと入のあし分小舟さはり多みわがおもふ君にあはぬ頃かも
 同 みなと入のあし分小舟さはり多み今こむ我をよとむと思ふな

いひふりて今はかことやつきぬらんあからさまにもつれなかりけり

よみ人
しら
竹

○通書戀 ふみやる

玉章をかよはすこゝろなり

- もしほ草
- 玉づき
- かきやる
- 鳥のあこ
- 濱千鳥
- みつぐき
- かよはす
- かきもつくさぬ
- 筆のすまび
- ふみの墨つぎ
- あだなる筆
- おもひしるいらへ
- 手ならひ
- むすびめ
- 露の玉づき

後 水鳥のはかなきあとに年をへてかよふばかりのえにこそ有けれ
 千 いそがくれかきはやれどももしは草立くるなみにあらはれやせん
 六 玉章のあるかなきかにもく水のたえせぬ君をあひみてしがな
 なか／＼に淺しと人にみゆやとおもふこゝろはつくさわりけり
 一すぢにおもふ心はこめたれどつたなき筆のはづかしき哉

よみ人
しらす
家
しらす
千
景
樹

○返書戀 被返書戀 かへりごと

人より来るかへりごとをも又つれなくかへすをもよむ

- とさきもみず
- 人たがへかこ
- たゞ一筆
- 見ふるれば
- むすびしまゝ
- そのまゝに
- さりもみなく
- うちみけつさは
- かへすにしろし
- かへしてむ

古 たのめこしことの葉今はかへしてむわが見ふるればおき所なし
 契けむことの葉今はかへしてむ年のわたりによりぬる物を
 手もふれでかへされにきとおもふにはわかふみさへに恨られつゝ
 かにかくに人の心のあらを田をかへすふみにもおもひしられぬ

因
香
よみ人
しらす
美
石
千
隆

○戀書 こひのふみ

戀につけてつかはすふみもかへりごとをもなべてよめり

- もとの關もり
- する墨も
- えこそかゝれぬ
- 水ぐき
- かきつめて
- ふみたがふべき
- ふみずさふ
- いらへ
- かへりごと
- かよはす
- かきやるふみ
- かきもつくさぬ
- ふみ初るあこ
- 傳へやせまし
- おもふことこの葉
- ちることこの葉
- もらさどと
- 底のみくづ
- たゞ一ことの
- ふみはしむ
- あこをたのむ
- ふみぬ
- むすはれながら

千 水ぐきはくれをかぎりとかきつめてせきあへぬものは涙なりけり
 新 人もまだふみぬ山の岩がくれなるゝ水を袖にせくかな
 同 水の上とうきたる鳥の跡もなくおぼつかなさをおもふ頃かな
 まがへこしよその玉章みてぞしるへも我をばわすれはつらん

頼
政
信
濃
謙
公
禮
初

○占戀 戀卜 うらなふ

おもふ事のなるやならずやと占ふ心又契りし事のたがひやせむとうたがふ心をもよむ

○心のうち ○ゆふけのうち ○うちまさしけれ ○こころふかめ ○うらへつたやく ○道ゆきうち
○うちごふ ○まさてにも ○うらまさのれ ○あうらする ○ゆふけごふ ○みしうち

萬 言靈の八十のちまたにもふけとふうらまさにいへ妹にあひよらん
同 也ふけにもうらにもれる今夜だにきまさぬ君をいつとかまたむ
後拾 二ぬまでもまたましもの中々にたのむ方なき此もふけかな
續 おもひあまり山菅うらにもものへばはなれくになるぞかなしき
あふことはかたやく鹿のこがれつうらとどふたびにねをやたてまし
あふことのかたきをつぐる石神のまさしきうらはとふかひもなし

よみ人
しらす
同 同
親 重
春 海
声 庵

○被知戀 被知人戀 しらる 人にしらる

戀人にわが心のしらるゝをも世中の人にしらるゝをもよめり

○なき名ぞさだに ○さはあらじとも ○しらるゝはゆめ ○人のこがむる ○うくもしらる
○心さもなく ○心の外に ○たゞ大かたに

勅 袖の上の涙ぞ今はつらからぬ人にしらるゝはじめとおもへば
六 人しれずやみなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはいはまし物を
わがおもひつゝめばつゝむけははひよりなかく人にしられ初ぬる

丹 伊 声
後 勢 庵

○不知人戀 不被知人戀 しられず

わが思ふ人に知られぬ心をも世間の人にしられぬこゝろをもよむ

○人しれぬ ○今はさりとも ○さふ人もなし ○ほのめかされば ○それさも人の
○しる人もなし ○さりさてえやは ○かくさも人の ○みがくれて ○み山がくれの草
○しられず ○なき名たつ人たにあるを ○いはでも人に ○君ゆみさだに

川のせになびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もする哉
わが床はしのふのおくの眞菅原露かよるともしる人のなき
戀しなば君もゑとだにしられでやむなしき空の雲となりなん
かくれぬの下におもひてなげいきさざりにたゞばいちしろけんな
おもひつゝぬればあやなしそれとだにしらぬ人をも夢にみてけり

友 則
定 謙
忠 教
成 章
眞 淵

○戀不知程 ほどをしらぬ

戀のおもひこれほど分量をしらす限なきこゝろ也

○いつまでか ○ばかりなき ○我戀をらん ○何によそへて ○いつともなくて ○命や戀の限
○ゆくへもしらぬ ○はてぞしらぬ

あら玉のとしのを長くいつまでかわか戀をらんいのちしらすて
わが戀はゆくへもしらすはてもなしあふを限とおもふはかりぞ
あふことはいつともなくてあはれわがしらぬ命としをふる哉
おく深く月日にそへてわけいれどはてこそなけれ戀の山路は
うき身にはいのちや戀のはてならんあふをかきりもいつとしらねば

よみ人
しら
朝 恒
經 信
禮 初
成 章

○不知爲方戀 すべなし

戀のくるしさにいかにともすべきやうなきなり

○打わびて ○せんかたなきに ○いかにとも ○何につけてか ○身をやる方のなき
○つれなしきても ○かひやなからん ○かひなかりけり

戀しきを何につけても慰めむ夢だにみえずぬるよなれば

千 拾 千 拾
これはまた思ひしことぞなれしよりあはれなごりをいかにせんとは
いかならんことの葉にかはなびくべき戀しといふはかひなかりけり
いかさまにことかはりせはつれなくてたえとたえにし人にとはれん

順 忠 順
貞 保 貞
戸 蘆

○思貴人戀 思高人戀 うまひとをおもふ

我よりは品位たかきひとをおもひかくるなり

○たかき人 ○かしこき人 ○雲ぬはるかに ○かきまぎの橋 ○かけはなれたる ○およばぬ戀
○およばぬ身 ○峯の

万 同 拾 新 代
いもといへばなめしかしこししかすがにかけまくほしきことにも有哉
いせの海の磯もといろによる浪かしこき人に戀わたるかも
さはにのみとしのへぬれどあしたづの心は雲のうへにのみこそ
よそにのみ見てやみなんかつらさやたかまの山の嶺のしら雲
光さす雲の上のみ戀しくてかけはなるへきこもちこそせね
よそにだにみるることかたき玉だれをうら山しくもかよふ風かな

よみ人 笠女 九條 同 龍
しらす 郎 後 廣 呂

○思異人戀 こと人をおもふ

われのみと契れる人のまた他の人をおもふ也

○こころに ○我さはなしに ○はふ木あまたに ○浅ましや ○我ならぬ人に
○心からなる ○よそになびく心

たか砂の尾上にたてるしらくもよさをへばさそふよその山風
宮路山及ばぬ花に心のみ雲のかけはし何なげくらむ
わが戀はくもゐにたかきあし引の山のしづくを袖にかけつゝ

廣 契 眞
件 冲 淵

○兩方戀 等思兩人戀 ふたかた

二人に戀らるゝ又二人をこふとも自他によめり

○さし分て ○そなたこなた ○いづくをも ○ふたつに分るわが身 ○ふたつに分る心
○たれたたれさか

玉かづらはふきあまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし
われならぬ人に心をつくば山下にかよはむ道だにやなき
未つひにかくては我をわすれ水なかれてよそにひかれそめなば
しめゆひし庭の橘われならぬ袖にかをれとおほしやはせし

よみ人 能 春 千
しらす 宣 海 隆

後 詞

玉江こぐあし分小舟さし分てたれをたれとか我はさだめむ
いづくをもよがるゝことのわりなきに二つにわくるわが身ともがな

よみ人 右
しらす 大臣

中川の宿なつかしき夕ぐれに方たがへしてゆくほたるかな
こひしなむけぶりの末も二方におもひみたれて立やのぼらむ
月もみむ花もたをらん朝夕に春と秋とのあらそひもなく

正 春 濱
陸 庭 臣

○老戀 老後戀 おいびと

老人の戀をするなり

○老もわすれて

○よはひのほご

○いくほどの世ぞ

○わが世ふけぬる

○さしへたる身は

○年の暮る身

○老の涙

○老らく

○みつわくむ

○老の命

○つゝまじき身

○老曾のもり

万 千 同

ぬば玉の黒髪しろくかはりてもいたき戀にはあふ時有りけり

おもひきやとしのつもるはわすられて戀にいのちのたえむ物とは

なげくまに鏡のかげもおとろへぬ契りしことのかはるのみかは

老の身におはぬ心をやさしともおもふ子もゑはおもはざりけり

さゝわけしすゝろありきのそのかみのわがみをさへに戀ふる頃哉

老の身にいつまでとてかたのむべき人にかはらぬ契なりとも

滿 院 崇 方 依 宣
誓 院 德 期 平 長

○幼戀 いとさなき

まだ年のをさなき人をおもひそめ又をさなくても戀するよしをもよめり

○ふり分がみ

○またいわけなき

○わが草

○春の若水

○淀の若こも

○井手の下帯

○小なき

○うなぬばなり

○小まつ

○小萩

万 同 後

○髪あぐ

○かたすぎぬ

○まだむすばれぬ

○春のわか草

○うら若み

三島菅いまだ苗なり時またばきすやなりなん三島菅笠

たらちねの母が手ばなれかくばかりすべなきことはいまだせなくに

人しれずわがしめし野のなでしこは花咲ぬべき時ぞきにける

いわけなきひとへ心におもひしも袖のみどりは浅からめやは

元もひに霜置そはぬくすりもがうなひ世づかは老とみるらん

同 同 廣 米
しらす 積 足

○遠戀 戀遠人 とほる

遠方の人を戀ふるなり

○さかひばるか

○いくへの嶺

○雲のよそ

○千里の外

○あづまのはて

○遠山ざり

○ひなの長路

○いくへのみれ

○ひなにうつろふ

○心づくし

○あまり程ふる

○みれの白雲

○雲のはたて

○いかなる里

○よるべなみ

○そきへのきはみ

○はるけき人

○ひなの國

○しらぬ雲ぢ

○いくへへだつ

万 古 後 後拾

國遠くたいにはみえず夢にだにわれにみえこそ逢ん日までに

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかけとなりなき

いはねどもわが限りなき心をばくもぬに遠き人もしらなむ

戀しさはおもひやるだになくさむを心におとる身こそつらけれ

玉章のたよりもかたきとほつ人空ゆくかりをそれとだにみよ

心のみかよふ夢ぢは中く／＼にわけ行よりもくるしかりけり

よみ人 同 同 國 依 廣
しらす 房 平 足

かりがねの聞ゆるよひの秋風にとほき人をもしのびつるかな
くもるにてわがこえがたきあふさかをいはとのせきとみてやよみなん
幸文
長流

○近戀 ちかき

近所の人を戀るなり隣家或は同居など數々もとむべし

- 中びき
- 聲かよふ
- まちかき
- ぼごもなき
- ほごなき中
- 軒ばならふる
- つらなる軒
- たちよる間
- よめばかり
- 近くて遠き
- あし垣
- 間ぢかき
- ここのはよかはすばかり
- 違事はよそに

新古万

うつそみの人目をしげみ石走の間近き君に戀わたるかも
人しれぬ思ひやなぞとあじかきの間近けれどもあふよしのなき
玉矛の道ははるかにあらねどもうたてくもるにまどふころかな
ほのめかす人間もなしや朝づく日かげふむばかり立ならしても
水まさる川の石ばしまぢかきもわたらぬ中はかひなかりけり
笠耶女
よみ人
しらす
朱雀院
春門
契冲

○旅戀 旅宿戀 鞆中戀 たびのこひ

旅にて逢みし人をも家なる人をもこふるよしなり

- 旅まくら
- 草まくら
- 旅の空
- かりれの枕
- 旅のまろれ
- 野べのかりぶし
- あかぬわかれ
- 旅衣かへす
- 玉矛の道
- 都の空
- しげすり衣
- 家なる妹
- 松がね枕

万 草枕旅にしをればかりごものみたれて妹に戀ぬ日はなし
よみ人
しらす

同拾

都にてみしにかはらぬ月かげをなぐさめにてもあかすころかな
君をのみ戀つゝたびの草枕露しげからぬあかつきぞなき
わくらばにこひしき人を水うまやかたみにけさはしくまれつゝ
おもひやれあまた旅ねのよるの袖かさねし折もかわきやはせし
同 同
千 同
芦 同
庵 同

○旅泊戀 とまりのこひ

舟どまりの戀なり海邊いつくにても有べし

- いそ枕
- 舟はつる
- みなさ風
- 八重の汐風
- 涙まくら
- うきれする
- 涙のうへ
- かぢまくら

万 われもゑに妹なげくらし風早の浦のおきべに霧たなびけり
同 家しまは名にこそ有けれ海原をわが戀さつる妹もあらなくに
同 室の海なみにうきねの枕にも心のとまるふしはありけり
よみ人
しらす
千 同
千 同
千 同
千 同

○獨寐戀 獨居戀 ひとりね ひとりをり

おもふ人ともろねせざるとひとりゐて物おもふとなり

- かたしき
- かたしく袖
- 手枕
- つくくこ
- なかむる空
- 君なきよひ
- 獨しぬれば

万 からの池のうらわ行めぐる鴨すらも玉藻の上に獨ねなくに
同 ほととぎす來なくさ月のみじか夜もひとりしぬればあかしかねつも
紀皇女
よみ人
しらす
79

拾同

あし引の山のあらしはふかねども君なきよひはかねてさむしも
手枕のすき間の風も寒かりき身はならはしのものにぞ有ける
あだ人の一花衣われひとりかたしく袖となりけるかな
たゞひとりまらねする夜の夜長さをのひみるよはになすよしも哉

同 同
依 平
春 海

○戀夢 夢中戀 夢後戀 ぬめこひ ぬめのもち

夢に戀しき人を見るなり夢後戀はさめて後猶こひしきなり

- みし夢 ○あふこみし ○おもひぬ ○時の間 ○さよまくら ○覺ぬれば
- 手枕 ○うたゝれ ○夢にても ○おごろきて ○なく鳥 ○さよ衣
- あふこみる ○夢路 ○夢のたゞち ○こひ衣 ○おもかけ ○なごりおぼゆる
- うつりが ○夢のかよひぢ ○よなくかよふ ○さむるわかれ ○夢のわかれ ○夢のなごり

拾同古万

夢のあひはくるしかりけりおどろきてかきさぐれども手にもふれねば
戀わびて打ぬる中にもきかよふ夢のたいちはうつゝならなん
おもひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせばさめざらましを
わすれなん今はとはじとおもひつゝぬる夜しもこそ夢にみえけれ
夢ぞとはさめての後もしらざりきおもふまゝをや夢にみつらん
おもひつゝぬればあやしなそれとだにしらぬ人をも夢に見てけり
おもひかね衣かへしてねゝものを夢にも人のつらさをぞみる

家 持
敏 行
小 町
景 樹
眞 淵
有 功 卿

○戀面影 おもかけ

万 後 六 月

おもふ人の影の身にそひて見ゆるなり

○身にそふ ○身をばなれぬ ○うき身をさらぬ ○立そふ ○おもひいつ ○わすられぬ
○おもかけにたつ ○夢のなごり ○見し人の ○うきなぢら ○おもひいつ ○わすられぬ

わきもこがしめるまよ引おも影にかゝりてもとなおもほゆるかも
おもかけをのひみしかずになす時は心のみこそしづめられけれ
目かるともおもほへなくにわすらるゝ時しなればおもかけにたつ
うきにのみならひにければおもかけのさてはとまらぬけしきなるかな
さめはてし夢はあとなき手枕におもかけばかり何のこるらん
中空に物おもふべくなりけりみし夜の夢をおもかけにして
心にもまかせぬ人のおもかけやわが身をいかではなれざるらむ
あふせなきはてけぶりのおもかけにみゆるものをう治の柴舟

伊 勢
業 平
大 輔
觀 教
政 像
春 天
有 功 卿

○戀形見 かたみ

又逢ふまでのかたみともわかれし後のかたみともよめり

- みつゝしのげん ○かたみがてらは ○かたみの衣 ○あはん日の ○わすれがたみ
- うつくしき人の ○わすらるまどき

万 同 古

あはむ日の形見にせよとたわやめのおもひみだれてぬへるころもぞ
わぎも子が形見の衣下に来てたゞにあふまではわがぬるめやも
あふまでの形見も今は何せんにもこゝろのなぐさまなくに

娘 子
よみ人
同 子

ことのはの残るばかりを形見にて心をくたく夢のおもかけ
○戀命 懸命戀 いのちをか
いのちにかけて人をこふる也

○いのちにかふる ○うき身にかふる ○命にむかふ ○いのちのはて
○いのちひさつ ○かけし命 ○逢にかへん ○よわる命

万 戀しなん後はなにせむいける日のためこそ妹はみまくほしけれ
古 しての山ふもとをみてぞかへりにしつらさ人より先こえしとて
後拾 あればこそ人もつられあやしきはいのちも哉とたのむ也はり
新 おもふには忍ぶる事ぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ
戀の命あふにしかへば消かへり後もしのぶの草やむすばん
戀しぬといひしながらもあらぬ身のわがいつはりは命也けり

○戀憂喜 よさあし

人を戀るにつきてはよろこぶことうれふる事のあるをいふ
○よしあしの ○うれしきもうきも ○世はならはしの ○世のなみくに ○こにかくに
○一方ならぬ ○そなたこなたに ○これこれこそ
後 うれしきもうきも心はひとつにてわかぬものは泪なりけり
詞 うれしきはいかばかりかはおほゆるんうきは身にしむ物にぞ有ける
代 ものおもへばわれか人かの心にもこれとぞしるしみえける

百代 兵衛 有平 業親 契沖 長流
よみ人 道信 和泉式部

○秘戀 くちかたむ

うかりにしきのふよりけふうれしきになか／＼すゝむわか心かな
かならず人にもらすなといへる心なり
○君が名も ○わが名も ○もらさどな ○それをたに ○かならずさ ○契りし事を
○人のものいひ

古 君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ
同 それをだにおもふ事とてわが宿を見きとないひそ人のきかくに
山吹の人たのめなる色みせて井出の蛙の音になもらしそ

○試戀 こころみる

人の心をよそながらこころみて浅さ深さをしる事なり
○いざ心みむ ○心みに ○うごきをいかで○神にまかせて ○心みがてら ○われこころみむ
○よそにても ○おほかたに ○心をひく
古 人の身もならはじものをあはずしていざこころみむ戀やしぬると
六拾 わればかりわれをおもはむ人もがなさてもやうきと世を試みむ
かたらへばしらぬ人なくるといふをうときをいかでなれこころみん
人心ひくとせしまに梓弓本末しらすなりにけるかな

○春戀 はる

よみ人 朝光
しらす

はるの物事によせて戀のこゝろをのぶる也

- 春立ば
- 春のあした
- のどけき
- 春されば
- 春日
- 世は春ながら
- 春の日
- 春のゆふべ
- 春のこゝろ
- おぼろ夜
- おぼろしく
- 春の空
- 春雨
- 春のあけぼの
- 心もはる
- 春の夜

万 同 古 後拾

おぼろけに妹をのひみて菅の根の長き春日を戀わたるかも
戀つゝもけふはくらしつ霞立あすの春日をいかにくらすむ
春たてばきゆる氷の残りなく君が心はわれにとけなむ
ぬば玉の夜はのけしきはさもあらばあれ人の心を春日ともがな
あだなれど櫻ならではわぎもこが匂へるすがた何にたとへむ
つれもなき人の心はいつの世の春をまちてかあらたまらん
のどかなる心は身をもあくがれて春の日ながき思ひをぞする
はるくべき方こそなけれぬる夜の夢よりかすむ春の曙

○夏戀 なつ

夏のもの事によせて戀のこゝろをのぶる也

- 夏されば
- 夏のゆふべ
- 夏なれば
- 夏山
- なつの野
- 夏川の
- 夏の朝
- 夏木立
- 夏草
- なつ衣
- みどりの夜

万 古

ほととぎす來鳴さ月のみじか夜も獨しぬれば明しかねつも
せみのこゑさけはかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

よみ人 しらす 友 則

よみ人 しらす 同 同 童 尊 知 春 眞 木 孫 紀 夫 潤

新 詞

きたともぬるまもあらし夏の夜の有明の月も傾きにけり
ひとりぬる宿のとこ夏朝な〜涙の露にぬれぬ日ぞなき
川ぐまにしはしはのこる夏むしのおもひものこる朝ぼらけかな
人しれぬわがかいまも若竹のしけみにさはる夏はきにけり
うけらたくねやのけぶりもさみだれに打しのひつゝ物をこそ思へ

○秋戀 あき

秋のもの事によせて戀のこゝろをのぶる也

- 秋されば
- 秋の夕ぐれ
- 秋の露
- 人の心の秋
- 秋の長夜
- 秋の霜
- うき秋
- 秋山
- 秋萩
- たが秋
- 秋の千草
- 秋草
- 秋の夜
- 秋の夕ぎり
- 秋の野
- 秋ぎり

君にこひしなへうらぶれわがをれば秋風吹て月かたぶきぬ
いつとともこひしからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり
つねよりも露けかりけるこよひかなこれや秋立初めなるらん
世にしらぬ秋のわかれに打そへて人やりならず物ぞかなしき
物おもはでたい大かたの露にたにぬるればぬるゝ秋のたもとを
あへばとくあはねばおそく明にけり心からなる秋のよはかな
秋ならぬ袖とてかわく袂かはおもふまゝなるながめたにせむ
枕にもはづる夜ごろのひとりねをしひてとひよるきり〜す哉

よみ人 しらす 同 紀 伊 通 親 有 家 尊 朝 古 風 重 老

好 忠 花 山 院 廣 名 景 樹 直 足

○冬戀 ふゆ

冬のものによせて戀のこゝろをのぶる也

- 冬されば ○冬くれれば ○冬がれ ○冬草 ○冬のこほり ○冬の雪
- 冬の空 ○冬木立 ○冬川 ○冬の池 ○我もしぐるゝ ○袖のしぐれ
- なみだしぐるゝ ○さゆる ○さやぐ

古 万

朝な／＼草の上しろくおく霜のきえはともにといひし君はも
 としをへてきえぬおもひは有ながらよるの袂は猶こほりけり
 さゝの葉にあられふる夜の寒けきにひとりねなんものとはおもふ
 君こそはひとりやねなんさゝの葉のみ山もそよにさやぐ霜夜を
 寒き夜はとふのすがごもかたしきて人まつ袖にたるひしにけり
 ふる雪のおもる竹むら打たれて物おもはしき頃にも有かな
 すきまあればふたりふすまも寒き夜をいかにねよとのへだて初けん

よみ人 友 島 正 清 馬 友 よみ人
 しらす 則 内 彦 輔 侍 則 ず

○戀天象 あめ

すべての戀のこゝろを月日雲雨などそらの事によせてよむ也

- ながめやる ○大空に ○そらになる ○たつくも ○ゆくへなき ○水なき空
- むなしき空 ○こゝろ空なり ○雲間の星 ○ゆふべのそら ○天のうき橋 ○おもひわれさも
- ながむる空も ○浅みどりなる ○何さて月のすむ ○空にしめゆふ

古

わが戀はむなしき空にみちぬらしおもひやれども行方もなし

よみ人 子 流 子

勅 拾

かぎりなきおもひの空にみちぬればいくそのけぶり雲となるらん
 なみだせく袖におもひやあまるらん詠むる空も色かはるまで
 天雲のむかぶすかぎり人しれずおもひたはしとしぞへにける
 つれなさはいつをはてともしら雲のうはの空なるながめのみして

圓融院 後京極 御杖 蘆庵

○戀地儀 つち

戀の心を海川野山など國出の事によせてよむなり

- かたみのうら ○うち出の濱 ○あすか川 ○なみた川 ○おもひ川 ○おもひせく川
- 人目づゝみ ○いもせ山 ○ますたの池 ○こぬ人を松帆の浦 ○あはでのもり ○はつかしのもり
- なこそ其の関 ○いる野 ○あだし野 ○いはせ山 ○みゝなし山 ○あふ坂山
- みづぐきの岡 ○しのぶの里 ○あだの大野 ○小野のしの原 ○その原 ○浅野の原
- なる尾の浦 ○みつの浦 ○いくたのもり ○たはれしま ○浅かのうら ○妹が島
- 中川

古 万

岩がねのこぐしき山をこえかねて音にはなくとも色に出めやも
 ながれては妹せの山の中におつるよしの川のよしや世の中
 たきの水ながれすむとも末つひにあだなはたてじ音なしの里
 ながれての契もよそにみなせ川かはる心やありて行らむ

長屋王 よみ人 長 源 子 流 子

雑之部上

○天 天象 あめ そら

- 天づたふ日 ○久かたの天 ○あかりたつ天 ○久かたの空 ○天つ空 ○天つみそら
 - 天さかるひな ○天くだる ○あもる ○五百つ綱はふ ○天にはも ○天の原
 - 高天原 ○こも枕高天原 ○空の海 ○天の戸 ○雲の派たつ ○雲ぬのよそ
 - ほがらかに ○天のかぐ山 ○なごめやる ○あからむく ○高しる天 ○高しるや天
 - むなしき空 ○鳥のみち ○むなしき方 ○うらくさ ○くもぬ ○大空
 - ふりさけみれば○青雲 ○白雲 ○青雲のたなびくきはみ ○白雲の向伏かぎり
 - 白雲のおりぬる限 ○天つ水 ○天つ水あふぎて待○はてなき空 ○限なき空
 - みざりの空 ○天の川 ○天の浮橋 ○天のいはくら ○天のいは月 ○天のやす川
 - ゆくべなき ○そなたの空 ○水なきそら ○そらの流 ○すめる八空 ○天の眞名
 - 天のおしみづ ○かぎりなき ○はてもなく ○はてしなき ○こたへぬそら ○岩戸の關
 - 水いろの空 ○天路 ○天の八ちまた
- 万 天原ふりさけみれば大君の御代はとこして天たらしたり 大 后
 同 天地をてらす月日のきはみなくあるへき物を何かおもはむ 大 炊 王
 同 天にはも五百つ綱はふ萬代に國しらさんといほつ綱はふ 坂 門 人 足
 同 山のはのさくらえ男天の原とわたる光みらくしよらしも 坂 上 耶 女

新 古

大空は戀しき人の形見かは物おもふごとにながめらるらむ 人 眞
 天の原そこもしろぬ大空におぼつかなきをなげきつるかな 天 曆 御 製
 天雲の向伏國やいかならむわが大ぞらは朝日さすなり 尙 忠
 千早ふる神代のまゝの大空に今も月日の影はかはらす 濱 臣
 わかれつる神代も遠くへだて来て天しづかなる青雲の空 春 庭
 とりの子のまろかれし時すめるものぼりて天となりにつらしも 利 和
 はてはいさはじめもしろぬ天の原たゞ大ぞらとみてあふぐのみ 春 滿

○日 ひ

- てる日 ○日のみかけ ○日ざかり ○日のうらく ○日の光 ○天傳ふ日
- 春の日 ○夏の日 ○秋の日 ○冬の日 ○あまつ日 ○久かたの日
- 茜さす日 ○天つ日かけ ○天てらす日 ○うらひさす宮 ○日くたち ○朝日かけ句へる
- 明る日のかげ ○朝日まつ間 ○大空の日かけ ○たかひかる日 ○豊坂のぼる ○朝日
- 朝日子 ○朝日おくれ ○夕日おくれ ○土さへさけて照る日 ○朝日
- ひなぐもり ○夕日 ○夕日かけ ○夕日のくたち ○句へる日かけ ○朝づく日
- てる日すすき ○わたる日 ○日あたり ○日影たけ行 ○日影いざよふ ○ゆふづく日
- 天しるや日のみかけ ○入日かけ ○夕日さす ○夕ひでり ○茜刺いづる光
- あまびこ ○きら／＼し ○朝ひでり ○かよふ日 ○かまやく日 ○日かげうつろふ
- 日かげさす ○ひかり ○みひかり ○てらす ○てりそふ ○くもり日
- かぎろひ ○かぎろひの立 ○入日さす ○いづる ○句ふ ○朝日のたゞさす

万 古 新 續 風 續 千

○夕日のひたてる○夕日のたゞさす○朝日さす ○日の光やぶしわがぬ ○はるゝ
○うるはし ○うらゝけく ○かしこし ○天の原岩戸をいづる ○豊ひるめの命
○大ひるめむちの命 ○天てらしませす ○朝日の日である ○夕日の日ぐる○日の大御神
○天照ひるめの命○天てらす日の神○わかひるめの命○大むるめの命

わたつみの豊はた雲に入日さしこよひの月夜明らけくこそ
みね高き春日の山にいつる日はくもる時なくてはらすへらなり
天の原あかねさしいづるひかりにはいづれの沼かさえのこるべき
久かたの天のかぐ山いづる日もわか方にこそひかりさそらめ
天つ空てる日の下にありながらくもる心のくまをもためや
久かたの天の岩戸の明しよりいづる朝日ぞくもる時なき
日の光てらさゝらめや天地のありの限のあらむかざりは
あふぎてもかしこきものは天てらすひるめの神のみかげなりけり
かぎりなき御代のためしと大空をあふぐも高き日のみかげかな
たなつものもゝの本草も天てらす日の大神のめぐみえてこそ

○星

○あかほし ○すまるぼし ○星つく夜 ○星のやどり ○七ますほし ○星のまぎれ
○星まつる ○くるゝまに出そふ星○曉しるき星○月のすむ空にまれなる ○ほしの林
○夕づゝ ○よばひほし ○ほしの光 ○南のほし ○夜わたる星 ○そらにみつ

拾 六 同 堀 同

○つらなる星 ○きらめくほし ○星みえそむる ○西にめぐる ○雨夜のほし ○矢守るこさしの星
○星をいたゞく ○星をつらぬる ○ゆふぼし ○ひこぼし ○天つひこ星 ○天つ星
○かゞせ男 ○たゞしきほし ○星のくらゐ

あまつ星みちもやどりもありながらそらにうきてもおもほゆるかな
君にのみあはまくほし 夕されば空にみちぬるわがこゝろかな
日くるれば山のはにゐる夕づゝのほしとはみれどはるけきやなぞ
夕づゝのなごてまだきに入ぬらむねよてふかねの音もせなくに
われひとりかまくら山をこえおけはほしづく夜こそうれしかりけれ
夕まぐれしばし月日のみえぬ間を光となしてほしぞかすそふ
天雲の行合の間より見る時はほしの光もめづらしきかな
大空のものとおもへばながれ来て軒ばをつたふ星もありけり
月入て光くはゝるほしこそはあやなきやみのしるしなりけれ
てりわたる光のみかは晴る夜のそらにはかすもまさるほしかな
手にとらば手にとりつべきうき雲のたえまにたかきほしの影哉

○雲

○朝ぬる ○朝たつ雲 ○山がづら ○豊はた雲 ○夕ぬる雲 ○八雲たつ
○いづもやへ垣 ○雲のすゞけり ○水まさぐも ○あしたの雲 ○雲の波 ○雲のはたで
○あまぐも ○青雲 ○しらくも ○雲むたつ ○雲風 ○雲のつかひ

- 雲のまがき ○あさゆく雲 ○雲早き ○雲のほる ○雲の八重たつ ○天の八重雲
- 八重のしら雲 ○たつ ○たてる ○にほふ ○かゝる ○たなびく
- 八重たなぐも ○八重たつ雲 ○うき雲 ○雲のみを ○むら雲 ○おりのる
- しづまる ○まよふ ○たゆたふ ○たよふ ○うきたつ雲 ○うすぐも
- 峰立のほる ○横ざる雲 ○雲のゆきよ ○雲のさばり ○心なきくも ○八重のくもぬ
- はるよ ○ゆく ○おりぬる雲 ○さわたる雲 ○雲ぬる谷 ○空ゆく雲
- 雲の衣 ○五百重の雲 ○雲の夕こり ○八重雲がくれ ○雲がくれ ○あた雲
- 雲のうへ ○あしたの雲 ○風に消ゆく ○雲こる ○風にたよふ ○みれたつ雲
- いざよふ雲 ○雲の都 ○雲ぬのよそ ○白雲のあはたつ ○出いる雲 ○かさなる雲
- 八重かさなる ○うかへる雲 ○雲のかへし ○行會の雲 ○天さかるくも ○雲づよく
- 雲のみれ ○むらさきの雲 ○雲かへる ○たなびく雲 ○たてるしら雲 ○雲たちわたる
- 雲のたよふ

瀧の上のみ船の山にゐる雲の常にあらむとわがおもはななくに
 大君は千年にまさむ白雲もみ船の山にたゆる日あらめや
 大海に島もあらなくに海原のたもたふ浪にたてる白雲
 足引の山川の瀬のなるなべにもづきがたけにくもたちわたる
 青丹よしならの都にたなびける天の白雲みれどあかぬかも
 あし引の山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき
 みやこをば天つ空ともきかざりき何ながむらん雲のはたてを

弓削皇子 春日王
 よみ人 しらず
 同 同
 賞 之
 丹 後

○雷

神さぶる御はかのまつをたづきにて村雲かゝるたかわしが原
 ふく風の心のまよにもく雲やむなしき空のすがたなるらむ
 入日さすみどりの雲はてるたへの神のみけしもしかじとぞおもふ

光 平
 安 歌
 方 耶

- いかづち ○大いかづち ○かしこき ○まろく ○まろきわたる ○おさののみ
- 天ぐも ○雲ぬはるかに ○天原 ○はるにふみあたし ○空もまろに ○光さよみて
- さくる ○おそろし ○いなづま ○さしぐもり ○雨ささもにも ○ひかり
- はたよく ○はたよ神

天雲の八重雲がくれなる神のおとにのみやもきよわたりなむ
 天雲をほろにふみあたしなる神もけふにまさりてかしこけめやも
 なる神の光とよみてさしぐもり雨もふれやも君がとまらむ
 天原ふみといろかしたる神もおもふ中をばさくるものかは
 天の原なる神いかにおもふらむけふは身をける雨とこそふれ
 たいならぬくものけしきと見るがうちに神さへなりて雨こぼれきぬ
 御めぐみの雨にきはひてなる神は八十まがことをさくる也けり

よみ人 しらず
 同 同
 同 同
 良 信
 光 賢

○風

かせ

- 朝はぶる ○夕はぶる ○はつたべ ○うはたべ ○下風 ○まきつ風
- よこつたべ ○天つ風 ○しなごの風 ○いち風 ○時つ風 ○おひ風

○風のたより ○れやのかさ戸 ○つまごぶ風 ○かざままつ ○かさおもて ○れごし山ごしふく
 ○朝風 ○夕かぜ ○風わたる ○風はやみ ○風の通路 ○下ふくかぜ
 ○吹のまに／＼ ○木がらし ○枝吹しをろ ○吹おろす ○あゆの風 ○あなしふく
 ○ひがたふく ○四ふく風 ○葉分の風 ○しのゝ小ふゞき ○深山かぜ ○むらかぜ
 ○風のしらべ ○山下風 ○木の下風 ○吹のぼる ○きたごち ○まごち
 ○ふく ○さわぐ ○あるゝ ○吹まよふ ○いぶく ○家の風
 ○風の音 ○風おもて ○かへしの風 ○南の風 ○風をいたみ ○こちのかへし
 ○浦わの風 ○澤かぜ ○沼かぜ ○風のやどり ○目に見ぬ風 ○つまふく風
 ○雲かぜ ○島かぜ ○おひ風 ○朝ごち ○宵ごち ○あすか風
 ○佐保風 ○初瀬風 ○難波風 ○いかほ風 ○うしほ風 ○北ごち
 ○風のこゝろ ○かぜのすがた ○すき間の風 ○うら風 ○みなご風 ○風の吹しく
 ○あらしの風 ○吹しなる ○しなごべの神 ○しなごの風 ○野風 ○山風
 ○谷風 ○あら磯かぜ ○沖のばやち ○立田の神 ○しなつひこ ○しなつひめ
 ○雲のかへしの風 ○谷のつぢかぜ ○ばやちふく ○世々の風 ○神かせ

たをやめの袖吹かへすあすか風都を遠くいたづらにふく
 時つ風ふくべくなりぬ香椎瀉沙干のかたに玉藻かりてな
 山ごしの風を時じみぬる夜おちす家なる妹をかけてしぬびつ
 大ぞらをながめぞくらす吹風の音はすれども目にしみえねば
 琴のねにみねの松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ
 われながらおもふか物をとばかりに袖にしぐるゝ庭のまつかせ

志貴皇子
老
軍 王
躬 恒
齋宮御女
有 家

大しほや淡路のさとの吹わけにのぼり下りの片帆かくなり
 天地のかためし國の神風になびかぬ草はあらしとぞおもふ
 ふく風はめにこそみえねいろは猶ありとしられて身にぞしみける
 山里のそとものみすゝふき分てことゝひがほの風のおとかな
 大空はむなしきものを夕かせのふけばかなしきこゑのきこゆる

匡 房
心 月
春 庭
廣 名
惟 貞

○嵐 山おろし

- しまおろし ○遠山おろし ○川おろし ○あらし山おろし ○巖山おろし ○山おろし
- 島山おろし ○谷おろし ○高根おろし ○いぶきおろし ○れわたし ○こしの根わたし
- ひらのれわたし ○夕山おろし ○はげし ○あるゝ ○さわがしき

衣手に山おろし吹て寒き夜を君きまさすは獨かもねむ
 戀しくばみてもしのはむもみち葉を吹なちらしそ山おろしの風
 吹しをる峰の本草のいかならん袖だにたへぬ秋のあらしに
 駿河の海沖つしは會をもく舟のまほにぞうくるふしの根おろし
 ものおもふたかながめより吹そめて夕山おろしおどろかすらむ

よみ人
しらず
同
家 隆
通 駿
東 喜 子

○嵐 あらし

- あし引のあらし ○あらしの北 ○みざりのあらし ○蓬主あらし ○あらしのまくら ○あらしの風
- あらしたつ ○山あらし ○圃あらし ○松のあらし ○みれのあらし ○ふもこのあらし
- 野べのあらし ○あらしま風 ○木々のあらし ○杉のあらし ○四方のあらし ○檜原のあらし

○山風をあらしといふ ○吹おろす ○あらしの庭 ○あらしのまど ○あらしのつ
 ○嵐ふく ○吹あらし ○さわぐ ○吹しく ○吹しをる ○寒けし ○山の名のあらし
 ○山がきくもり ○さゆるあらし ○つらきあらし ○たゞくあらし ○あらしの峯 ○山の名のあらし
 ○さ夜あらし ○朝あらし ○夕山あらし ○外山のあらし

万 同 古 六
 みよし野の山のあらしの寒けくにはたやこよひもわれひとりねん
 足引の山のあらしはふかねども君なきよひはかねて寒しも
 逢坂の嵐の風は寒けれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる
 われを君とふやくとまつ風の今は嵐となるぞわびしき
 くるゝより松にふきたつわが山のあらしの末をたれかきくらむ
 みなと出しその曉の船路よりともなふものはあらしなりけり
 月ふくる遠山まつにこゑたてゝ雲とゝもにもゆくあらしかな
 信濃なる菅のあら野をとぶわしの翅もたわにふくあらしかな

○雨 あめ

○こさめ ○そばふる雨 ○むら雨 ○雨のいさ ○雨のあし ○日でり雨
 ○横あめ ○雨おもる ○雨さそふ ○したる雨 ○ながめ ○雨そよぐ
 ○雨夜 ○雨間 ○雨もよひ ○雨のこゑ ○雨かぜの聲 ○雨になる夜
 ○こし雨 ○雨夜ふけゆく ○雨もよ ○雨そよぎ ○雨つゝみ ○窓うつ雨
 ○身をしる雨 ○軒もる雨 ○れやもる雨 ○苦もる雨 ○夕ぐれの雨 ○かきくらす
 ○あしとさき雨 ○下たるしづく ○雨やどり ○笠やどり ○久かたの雨 ○村雨の空

万 同 同 玉 同

○さびしきころ ○雲よりおく ○かさなるくも ○おつるむら雨 ○雨ながびく ○雨のうち
 ○さびしき ○つれくのながめ ○雨くらし ○しづく ○露
 ○露もまだひぬ ○かわかぬ ○そらさわりなく ○雨うるふ ○うるほす雨 ○雨のめぐみ
 ○軒ばの雨 ○打しめる ○おつる ○たなびく雨 ○雨になる夜 ○軒のいさ水
 ○雨になりゆく ○ふりくる雨 ○くもる ○くるゝ ○かきくるゝ空 ○雨まちげなる
 ○小雨そぼふる ○さりあめ ○霞や雨さなる ○朝雨 ○あしたの雨 ○夕の雨
 ○雨の音 ○ふくる夜の雨 ○宵のむら雨 ○一むら雨

久かたの雨のふる日をたゞひとり山べにをればいぶせかりけり
 くるしくもふりくる雨かみわの崎さぬのわたりに家もあらなくに
 まさ向のあなしの山にくもあつゝ雨はふれどもぬれつゝぞ來し
 あかしかねまどくらき夜の雨の音にねざめの心いくしをさしつ
 しづくまではまだ落そめて山かげの檜原がうへに雨ぞきこゆる
 きの海や御戸のあら濱西ふきて浪の音たかし雨をはるらん
 むら雨のあと川柳風みえてぬれし夕日のかげなびく也
 ばせを葉にむら雨過て山まどの夕日さびしき槇の下いほ
 軒のまつまがきの竹にふる雨の音をきゝわく夜はのしづけさ
 みるが内に軒ばの山もかつきえてたゞよふきりぞ雨になりゆく
 いはほよりまつぬれ初て山里の桓根さびしくそよぐ雨かな

家持 奥平 呂 奥人 永福門院 周防内侍 千廣 正周 濱臣 定良 景樹

○火 燈 ひ ともしび

- 石の火 ○まつ火 ○むねの火 ○あきた火 ○あし火 ○こもす火
- こもし火 ○光うすき ○いさり火 ○かやり火 ○蚊火 ○あぶら火
- もくづ火 ○すくも火 ○わら火 ○火きりうす ○火きりぎれ ○火をきりいでゝ
- すゝたる ○くらからぬ ○きり火 ○いけ火 ○おき火 ○あまたのたく火
- 打てたく火 ○のこるもうすき ○ほのめく ○てらす ○かゝよふ ○きえぬべく
- 庭火 ○衛士のおく火 ○こぶ火 ○もゆる ○たく ○風の前なる
- つくくゝ守る ○夜をのこす ○ほのかなる ○しめる ○こがるゝ ○かゝぐる
- そむくる ○なき火 ○もゆるほのほ ○かゝけても ○やゝかすかなる ○かべにそむける
- こもし火のかけ ○あかし ○むねはしり火 ○風のまたゝく ○かけしらむ ○しめる燈火
- まごの燈 ○宿のこもしび ○のこるこもし火 ○よひのこもし火 ○よるのこもしび ○しらぬ火
- てらす燈 ○むかふこもし火 ○あまのこもし火 ○かげうすくなる ○かげさへしめる ○かべのひまもる
- 光さびしく ○花さく ○光を花さちらす ○かゝけつくさぬ ○光をのこそ ○こもなふかけ
- かげさだまらぬ ○かげはづかしき ○かけわりゆく

候 六 同
 をりくゝにうちてたく火のけぶりあらば心ざすがをしのとぞおもふ 貫 之
 人をおもふ心のおきは身をぞやくけぶり立とはみえぬ物から よみ人
 わがやどの霜夜の風を寒みこそ海士のたく火をよそにながむれ しらす
 打なびくまどのともし火くれ竹の音せぬ風をいかにしるらん 同
 みなせ川せゝの夕なみくれそめてともし火かすむ山もとの里 春 景 門 樹

○煙 けぶり

ともし火もつれなきかすにのこるかなそむかれすのみおもふわが世に 政 直
 かまの火のけがれもゝしも家内は火しけがるればまがをこる物 宣 長

- 朝けぶり ○夕けぶり ○うすけぶり ○匂ふけぶり ○香のけぶり
- 民のけぶり ○かまごのけぶり ○けぶりきりあふ ○たく藁のけぶり ○けたぬけぶり
- むなしけぶり ○野やくけぶり ○けぶりにくもる ○なびくけぶり ○けぶりのやみ
- けぶりたなびく ○ほそきけぶり ○朝けのけぶり ○夕けのけぶり ○一むらけぶる
- なびくけぶり ○けぶる山もこ ○里わのけぶり ○鹽木のけぶり ○くゆらす
- たつるけぶり ○けぶりにむせぶ ○けぶりいふせき ○けぶり末あふ ○青柳のけぶり
- 苦やのけぶり ○炭がまのけぶり ○夜ほのけぶり ○浅間のけぶり ○ふトのけぶり
- 松のけぶり ○眞柴のけぶり ○木葉のけぶり ○あしびのけぶり ○かはらやのけぶり
- 雪けのけぶり ○けぶり立そふ ○戀のけぶり ○けぶくら ○鹽やのけぶり
- わらやのけぶり ○おもひのけぶり ○むねのけぶり ○けぶり ○水のけぶり
- たつ ○のほる ○立のぼる ○むせぶ ○いぶせき
- たえく ○たえんくつゞく ○なびく ○空にぞきゆる ○きゆる
- きえゆく ○たなびく ○立そふ ○をぐらく ○くゆる

万 古 後拾
 しかのあまの汐やくけぶり風をいたみ立はのぼらず山にたなびく よみ人
 ふじのねのなちぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりをを きのめのこ
 雲ゐまで立のぼるべきけぶりともしえしおもひの外にも有かな 細河女院

たえずたつむろの八島のけぶりかないかにつきせぬおもひなるらん
風になびくふじのけぶりの空に消てゆくへもしらぬわが思かな
おもひ出る折たく柴ときくからにたぐひしられぬ夕けぶりかな
夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそもえまさりけれ
すむ人のありとばかりは夕雲になびきそひてもたつけぶりかな
月のこるうらわのまつの木の間より浪路をわたる朝けぶりかな
ともし火のほのめきわたる竹村にのこるもうすき夕けぶりかな
夕雲にいり日をさまる山もとののこるけぶりぞさびしかりける
夕かたくけふりもよそに立そひてさびしく暮る山もとの里

顯方 西行 慈圓 菅大政 保教 繁里 廣足 信敬 春夫

○塵 ちり

- ちりひぢ ○いく世のちり ○ちりのへだて ○ちりにまどはる ○くれなぬのちり ○ぬるちり
- 朝たつちり ○光にみゆる ○ちりの身 ○御法のちり ○ちりをさまる ○ちりぬくもる
- たつ ○つもる ○ちりの世 ○はらはぬちり ○枕のちり ○床のちり
- ちりの山 ○ばく ○はきたむる ○うづむ ○まごふ ○みたる

風の上にありか定めぬちりの身はゆくへもしらすなりぬべらなり
いつとなく風ふく空にたつちりのかすもしられぬ君が御代かな
はきたむるちりの數とおもはぬを埋もることのあやしとぞみる
苔深きみとりの洞はくれなるのちりの外なる栖なりけり

よみ人 肥後 しまら しまら 衣笠内

○曉 曙 あかつき あけぼの

- あかさき ○いなめ ○しのゝめ ○あかつきおき ○玉くしけ曉 ○山がづら
- 明ぐれ ○おし明がに ○天の月の明る ○曉のかはたれ時 ○あかつきやみ ○曉づく夜
- 有明の月 ○のこれる月 ○あかつき露 ○かれのこゑ ○こりのれ ○れざめ
- かけの八こゑ ○庭鳥のこゑ ○明はなれゆく ○横雲 ○雲はわかれて ○わかるゝ雲
- 有明月夜 ○ゆふ付鳥も ○なく鳥 ○さもし火残る ○さもし火しらむ ○あかぼし
- 夜をのこす ○曉かけて ○曉くらき ○さしぐしの曉 ○まくらの山 ○ぬば玉の曉やみ
- わかるさへも ○みれの横雲 ○ほのく ○ほがらかに ○ほがらくさ ○まだほのくらき
- このあけぼの ○あけぼのくらき ○かれの音 ○あはれ ○曉のかれ ○夢さむる
- あけそめて ○曉の空

朝清めとくとおもふぞやかてそのちりにまじはる心なるらむ
朝日さすものゝすき間のちりだにも人にしらるゝ時はありけり
ふみ見むとたれをさしてもねぬ人の枕のちりやいかにつもりし

治堅 美隆 芳秀

白露を玉になしたるなが月の有明づく夜みれどあかぬか
珠州の海に朝びらきして持くれれば長濱の浦に月てりにけり
短夜のまだふしなれぬあしの屋のつまもあらはにあくるしのゝめ
深き夜に又一しきり聲立て夕つけ鳥はまたねしてけり
小鳥なくそのふの木立枝しげみ明ほのくらきこけのうへかな
老もかむ身のならばしをあかつきにかねてもしるはねざめなりけり

よみ人 しまら 家持 家隆 信實 古蔭 桑世

○朝 晨

あさ あした

とりのねもまだつげかへぬしのよめをまづしるものはねざめなりけり 顯 忠

- 朝づく日 ○朝ぼらけ ○朝きよめ ○朝まだき ○朝けのけぶり ○朝しめり
- あさ床 ○あさ戸出 ○朝あけ ○あけはつる ○朝風 ○あげたてば
- 朝かけ ○あさい ○朝れがみ ○朝なく ○朝川 ○朝こほり
- 朝みつしほ ○朝なき ○朝びらき ○朝たつ ○朝すゝみ ○朝ぐもり
- 朝雨 ○朝ざり ○朝がすみ ○朝ぐも ○朝ささの ○れての朝け
- あしたの袖 ○朝露 ○朝しも ○このれぬる朝 ○朝日かけ ○朝ひこ
- 朝まつりごこ ○朝かり ○けさ ○朝床 ○朝日よく ○齒さす朝日 ○朝ひこ
- のどけき ○心ゆたけし ○おきいでゝ ○朝日よく ○心むなしき

續 玉 万

朝ざりにぬれにし衣かわかすてひとりや君が山路こもらむ
 おきてけさ又なに事をいとなまむ此夜あけぬとからすなくなり
 みむろ山みねに朝日のうつろへば立田の川に月ぞのこれる
 青雲の空に一村いろはえてたづなきわたる朝ほらけかな
 あけわたるみ空さやかにみゆる哉うき世の塵も朝しめりして
 有明のかけをさまりて高砂のまつ葉青き朝ほらけかな
 山のはを打まもりゐてゑみさかえとよさかのぼる朝日かげみん
 おもふ事ねざめの床につきぬらんあしたむなしきわが心かな

○晝

ひる

よみ人 しらす
 景 御 正 善 繁 顯 同
 樹 杖 王 水 里 輔

新六 同 夫

みれば又かめに折さす花のいろのやがてもしほむ時は來にけり
 あし垣のかけだにみえずなりゆくは露もひるまの庭の秋草
 日ざかりは遊てもかむ陰もよし眞野の萩原風たちにつけり
 朝なゆふななまぢかくみしも半天の日かげに遠き沖つしまやま
 あふぎ見よかたふく方の中空にてらす光もさかりありとは

○夕 也ふべ

- ひるま ○ひるけ ○かたぶかぬ日かげ ○ひるなか ○まひる
- あし垣の影だにみえず ○日ざかり ○夢もまばゆき ○午の貝 ○ひるれ
- 中空に高き日影 ○露のひるま ○花の色しほむ
- ゆふづく日 ○ゆふ日かけ ○ゆふづく夜 ○夕づゝ ○夕かけ ○ゆふがり
- ゆふげたく ○ゆふこえゆく ○ゆふばえ ○夕川 ○夕されば ○くものはたて
- 豊ばた雲 ○入日さす ○れぐらさふ鳥 ○夕ぐも ○夕ぎり ○夕がすみ
- 夕やみ ○墨染のゆふべ ○かへるくも ○夕ぐもり ○夕ぐれ ○夕がすみ
- 夕まごひ ○夕まぐれ ○たそかれ時 ○かはたれ時 ○夕けさふ ○くれがたの空
- ゆふ月 ○ゆふやみの空 ○夕になれば ○入相のかれ ○夕がらす ○のこる日かけ
- くれぬさつぐる ○くるゝ ○くれわたる ○くれゆく ○露の夕ぐれ ○夕かけ草
- 夕ぐれのかはたれ時

光 家 俊 定 春
 俊 貝 頼 信 滿

同 万

玉だれのをすの間どほり獨居てまつしるしなき夕月夜かも
 玉はやすむこのわたりに天傳ふ日のくれもけば家をしそおもふ

よみ人 しらす
 同

こえくれてはや里ちかくなりけり山路の末のいり相のかね
 俊 經 繼 卿
 俊 人 監
 建 保 御 製
 春 門
 美 卿
 春 正

あすもありとおもふころにはかられてけふもむなく暮しつるかな
 おもひわびさてもまたれし夕ぐれの上なるものになりけるかな
 人の世をおもへばかなしくれゆけばけさだに立もかへらざりけり
 庭鳥をとぐらにあげて家ばとのかへるまつ間のくれずも有かな
 けぶりたつ麓の里はくれ初てのこる日かげぞかつはさびしき

○夜宵 よよひ

- | | | | | | |
|-------|---------|----------|---------|-------|-------|
| ○よる | ○夜は | ○ぬげ玉の夜 | ○夜すがら | ○夜さろ | ○夜たゞ |
| ○夜中 | ○さ夜中 | ○さ夜 | ○夜ごえ | ○のこる夜 | ○よるく |
| ○夜床れ | ○れぬ夜 | ○夜ふかき | ○夜がれ | ○夜目 | ○よるの衣 |
| ○夜寒 | ○夜つま | ○よるの契 | ○夜のふすま | ○夜くだち | ○ぼし月夜 |
| ○さ夜枕 | ○夜に入る | ○さぬる夜 | ○雨の夜 | ○夜ふれ | ○くらき夜 |
| ○夜いぜ | ○霜夜 | ○ぬる夜おちず | ○夜戸出 | ○月夜 | ○夜よし |
| ○あたら夜 | ○時うつりして | ○よるさりくれば | ○なりあかし | ○よひ | ○よひの間 |
| ○よひれ | ○よひのゆめ | ○よひく | ○よひのまさぬ | ○ふけぬ夜 | ○ゆぶやみ |
| ○うたくれ | ○まごろむ | ○うしの貝 | ○うしみつ | ○千ひさつ | ○さもしび |
| ○ふくる | ○たくる | ○ふけゆく | ○ふけぬるか | ○更にけり | |

あすのよひてらん月夜はかたよりにこよひによりて夜なかいらなん
 よみ人 しらす
 同

も、しきの大宮人のまかり出てあそぶこよひの月のさやけさ
 同

○地儀 つち

- | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|----|----|
| ○大地 | ○國土 | ○國 | ○大國 | ○山 | ○根 | ○みれ | ○嶽 | ○柚 | ○谷 |
| ○洞 | ○坂 | ○岡 | ○みち | ○關 | ○驛 | ○はやし | ○もり | ○橋 | ○野 |
| ○原 | ○田 | ○畑 | ○石 | ○海 | ○湖 | ○濱 | ○潟 | ○浦 | ○島 |
| ○湊 | ○崎 | ○なだ | ○せせ | ○こまり | ○津 | ○淵 | ○瀧 | ○河 | ○淀 |
| ○渡 | ○沖 | ○磯 | ○淵 | ○瀬 | ○きし | ○江 | ○池 | ○沼 | ○沼 |
| ○井 | ○堤 | ○水 | ○波 | ○沙 | | | | | |

天の原くもなき宵にぬば玉の夜わたる月のいらまくをしも
 同 同
 人 麻 呂
 兼 守 隆
 安 守 隆
 蘆 庵

さ夜中と夜は更ぬらしかりがねのきこもる空に月わたるみゆ
 あし引の山鳥の尾のしだりをの長々し夜を獨かもねむ
 よひの間に君をし祈おきつればまた夜深くもおもほゆるかな
 まだ宵のこゝちのみするわが夜さへねざめかちにはいつ更にけむ
 身のうさも月をしみればなぐさみきやみこそ夜はわびしかりけれ

せの山にたゞに向へる妹の山かことゆるすやもうちはしわたす
 よみ人 しらす
 春 夫 直
 惟 直
 敏 直
 響 重

あらかねの土はこがねもうみなすを草木のみとおもひけるかな
 山みても倭心ぞほこらるゝ花のみよし野もきのふじのね
 よしさらば市に心ぞすますべきのがれむ山もちりのなるて
 山のそき野のそきまでも御めぐみのかげにもれたるくまなかりけり

- 軒ばの山 ○まくらの山 ○高山 ○みどり山 ○ひき山 ○草のは山
- 竹のは山 ○外面の山 ○外山 ○かた山 ○あし引の山 ○わがぬる山
- 山のごかげ ○横たつ山 ○横のたつあらし山 ○み山の奥 ○山のかけち ○遠山
- 末野の山 ○山のとむけ ○山のとわ ○關山 ○あら山 ○塵ひぢの山
- 遠近の山 ○山中 ○中山 ○み山 ○きし山 ○東山
- さかしき山 ○こやしき山 ○かしこき山 ○海ごしの山 ○いそ山 ○北山
- 南の山 ○野山 ○そのま山 ○山の端 ○山のかひ ○高砂
- 高砂のをのへ ○のをへ ○尾ごし ○山かた ○ひごへ山 ○八重山
- もへ山 ○五百重山 ○五百重かおく ○山びこ ○山中 ○山本
- 根山 ○山はた ○山のみ ○山ぎは ○ひら山 ○四方の山
- 下つむら山 ○四方のむら山 ○むら山 ○山ごえ ○しげ山 ○山下水
- 山のがび ○は山 ○くもゐの山 ○山草 ○外山の原 ○山のはさま
- 山のかげ草 ○片山きり ○山のかたそば ○かさなる山 ○山路 ○み山路
- 山がへり ○山おろし ○山のかげぢ ○山のかけ橋 ○檜原の山 ○柚山
- 山のはかけ ○は山がすそ ○は山がくれ ○山下かけ ○まがきの山 ○わか山
- 山がた ○山ぎし ○山ごもり ○山口 ○岩のあら山 ○さ山
- 横の外山 ○横のしげ山 ○榮さる山 ○おく山 ○山高み ○山がくれゆく
- 山めぐり ○山まゆ ○夕山 ○つらおり ○うこきなき山 ○あさけの山
- 山下しげき ○片山もこ ○かた山林 ○外山のすそ ○外山の道 ○岩根ふみ
- 岩山 ○遠山すがた ○山また山 ○は山しげ山 ○は山しげ山

よき人のよしとよくみてよしといひし吉野よくみよよき人よくみつ
いにしへのことはしらぬを我みても久しくなりぬ天の香具山
なる神の音のみきし巻向の檜原の山をけふみつるかも
大汝少なみ神の作らしし妹妹の山をみらくよしも
つくは山このもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし
すべらきを八百萬代の神もみな常磐に守る山の名ぞこれ
つくは山は山しげ山繁けれどおもひ入るにはさはらざりけり
妻どひし心もなきて三山のたてるすがたぞとばにしづけき
そらにみつやまと島根にふたつなき寶となれる不二の芝山
ふじのねにのぼりてみれば天地はまだいくほどもわかれざりけり
四方はみなかべたちのぼる屋代山大國玉やつくりましけん
ふじのねのふもとを出てゆく雲はあしがら山のみねにかくれり
千たびみて千度めづらし雲風にすがた定めぬ不二の芝山

○根 嶺 嵩 ね みね たけ

- くもゐのみれ ○みれぢ ○峯のかよひぢ ○峯うつり ○みれべ ○みれのたび人
- 嶺のなち方 ○は山がみれ ○こやまのみれ ○根ごし ○白雲のたなびく峯 ○よぢのほる峯
- 枕のみれ ○そごしのみれ ○やごかるみれ ○みれこし ○いく重のみれ ○嶺つゞき
- たかれく ○みだけ ○やみれ ○大みれ ○なみれ ○あやしき峯

天武天皇
よみ人
しらす
同
同
同
永 鏡
重 之
廣 足
契 沖
長 流
眞 淵
同
有 功 卿

○嶺の庵 ○嶺の山風 ○みれのまつ ○みれの松原 ○みれのかげ橋 ○みれの雲
○みれの檜原 ○嶺づたひ ○峯飛こゆる ○嶺立ならず ○かさなるみれ ○みれうつり

万 ふじのねを高みかしこみ天雲もいもきはかりたなびく物を よみ人
しらず

同 ふじのねにふりおける雪はみな月のもちに消ぬればその夜ふりけり 同

同 みよし野の青根がたけの苔むしろたれかおりけんたてぬきなしに 同

古 白雲のたえずたな引みねにたにすめば住ぬる世にこそ有けれ 惟喬親王

大空のてる日のかげも及ばねばとけたる世なきふじの雪かな 景樹

白雲のたえぬに我のみねはかり神代おほゆる山は有けり 廣海

ふじのねは國のしづめの神なれば雪の白もふかけぬ日もなし 有功卿

○窟

いはほの中 ○いはほがく ○動なきいはほがくれ ○苔むすいはや ○おもきいはや
○岩がれ枕 ○岩つば ○岩がき ○岩がれのこゝ ○岩がれのこゝ
○岩のうつば ○岩がざ ○岩のむろ ○こゝしきいはや

万 大汝少彦名のいましけむしづの岩やはいく世へぬらむ 生石

同 はた薄久米の若子がいましけむみほの岩やはあれにけるかも 博通

金 草の庵を何露けしとおもひけむもらぬ岩やも袖はぬれけも 行尊

さびしさも今はいはほの中々になれて住よき山のおくかな 安守

○杣

そまがた

○斧のひゞき ○杣川の山くだし ○浦の杣山 ○谷の杣木 ○杣たてゝ ○そまがた
○そま方の林 ○杣のかりや ○杣山 ○うつ墨繩 ○ひく手あまた ○檜のつまで

○眞木さく ○蓬が杣 ○杣木さる ○杣木だち ○杣くだし ○杣ぐれ

○神の杣木 ○くち木の杣 ○杣にたつ民 ○杣のわれ木 ○木まつり ○斧のおこ

○宮木引 ○宮木もり ○杣たくみ ○山の杣木 ○千引の綱 ○しげき杣木

○杣くだす ○斧にみてぐら取添 ○くれ ○杣山風 ○杣山あらし ○杉ぐれをひく

○杣人 ○れりその綱 ○れりその綱 ○杣山風 ○杣山あらし ○杉ぐれをひく

万 眞木柱つくる杣人いさゝめにかりほのためとつくりけめやも よみ人
しらず

拾 高しまやみをの中山杣たてゝつくりかさねよ千代のなみくら 同

六 杣山にたつ杉ぐれのおもてゝ人ひかるゝ君はたのまじ 同

夫 杣人は斧にみてぐら取そへて木まつりすらし谷ふかくいる 公朝

ふみおへる龜もいづみの杣人は萬代かけて宮木ひくらし 良臣

かげ高き高根の檜原杣たてゝとるやくもゐの宮木なるらん 眞淵

○谷

たに

○谷のさかげ ○谷の下みち ○ふもとの谷 ○谷の戸 ○谷のかたち ○雲しく谷

○谷ぶさころ ○外山の谷 ○ふもとの谷 ○雲ぬる谷 ○ばさま ○谷のひゞき

○谷のこたま ○谷のこゝろ ○かきほの谷 ○行あひの谷 ○谷がくれ

○谷つゞき ○ほそ谷川 ○谷かげ ○谷ふりて ○谷おろしの風 ○朝日がくれの谷

○谷水 ○谷かげめぐる ○雲ぬる谷 ○谷のかたそば ○苔むす谷 ○谷ぞこの庵

- 光なき谷
- 谷の埋木
- 谷の下庵
- 谷風
- 谷のかけ草
- 谷の朽木
- 谷のふるす
- 谷のいたはし
- 谷の木がくれ
- み谷の淵
- 谷のかけはし
- 谷あひ
- 谷せばみ
- 谷のほそ道
- 外山の谷
- 谷せき
- 谷の下風
- そまもの谷
- ふかき谷

万 古 後 夫

大きみのみかさの山の帯にせるほそたにがはのおとのさやけき
 光なき谷には春もよそなれば咲てとくちるもの思もなし
 世の中にしられぬ山に身なぐとも谷のこゝやいはでおも
 高雄山清瀧川を下に見て谷かけめぐるまつのした道
 いはほのみかさなる山のおくなれば水の音さへ世に似ざりけり
 まつかしは千重に五百重にとちられて谷ぶところはいぶせかりけり
 山彦はわがよふ聲のひびきに谷のこゝろやつねにむなしき

よみ人
 しらす
 源養父
 よみ人
 しらす
 冬基
 務杖
 御杖
 芦庵

○洞 ほら

- 蓬がほら
- 洞の山かぜ
- 洞の戸
- 霧のほら
- みどりの洞
- 洞のうち
- 苔深き洞
- 苔の洞
- 洞の秋風
- 跡なき洞
- いはほの洞
- かた山洞
- いはやの洞
- 石のゆかふく洞
- もみぢの洞

新後拾 夫 家

影ふかき蓬が洞の秋の月霜をてらさば捨すもあらなん
 苔深き洞の秋風身にしみて古き檜原の聲ぞかなしき
 更ぬれば露とよもにや宿らまし岩屋の洞の苔のむしろに
 谷ぐくもさわたりかねてあへでめり雫の洞のこけのとなめ

通具
 土御門院
 後京極
 菅雄

○岡 をか

- なつかへ
- 夕づく日さすや岡へ
- 岡ごえの道
- 岡のくず原
- そまもの岡
- 岡の家ぬ
- 岡のかけ草
- むかつ岡
- 軒げの岡
- 朝彦の八重さす岡
- はなれ岡
- 岡の草根
- 岡の松原
- 野中の岡
- 岡への里
- 岡の松原

君が代もわが代もしらむ岩代の岡のかや根をいざむすびてな
 しげ岡に神さび立て榮たる千代まつの木のとしのしらなく
 朝日てるさだの岡べにむれるつゝわがなく涙やむ時もなし
 水ぐきのをかのかたに妹と吾とねての朝けの霜のふりはも
 深みどり色そことなる大君のきぬがさ岡のまつのむら立
 梓弓いてのとねりがとも岡の小篠のしのは君にやはぐらむ

中皇女命
 鹿人
 舍人
 よみ人
 しらす
 千陸
 芦庵

○關 せき

- 關の道もり
- 四の關
- 夢路の關
- 關のあら垣
- 岩戸の關
- 關しまさしき
- 關もろ浪
- 天の關もり
- 關屋
- 蓬が關
- 月さしせぬ
- さかも木
- 關のせきもり
- 關吹こゆる
- 關吹のほら
- 關吹のほら
- 關水
- ゆふつけざり
- 關の戸
- 心の關
- 名のる
- こゆる
- 關すゑて
- 關吹のほら
- 關水
- せきのわらや
- 關山
- 關もり
- ゆるさぬ
- あくる
- 中の關守
- 鳥の空れ
- 關路
- 關あらし
- 關の外山
- 板びさし
- ゆるす
- 波の關守

万 後 後拾 千

わがせこがあとふみ求め追もかば木の關守いとやめなむかも
立よらばかげふむばかり近けれどたれかなこそこの關をこゑけん
みやこをばかすみともに出しかど秋かせぞふくしら川の關
逢坂の關には人もなかりけり岩間の水のもるにまかせて
ふじのねを打守りつゝ行々てかへりみすれば關はこえにき
あふ坂や名のりをしつゝゆくこゑもきよとめがたき杉のした風
さとすぎて不破の關屋のあとへばせきもる鳥の聲もはるけし
あふ坂の關の東の國はみなふしのたかねの麓なりけり
あしがらの關の山路を北もけば空もをぐらきこゝちこそすれ

○道路 みち

- ち ○都路 ○大路 ○舟路 ○山路 ○浪路
- わかれど ○宮ぢ ○川の堤 ○露の下道 ○野路 ○長路
- 中みち ○した道 ○道もり ○世にふる道 ○車をくだく道 ○こげぢ
- こげの下道 ○關路 ○戀路 ○岡こえの道 ○川そひ道 ○道のなひで
- あぜの細道 ○柴の下道 ○おごろの道 ○谷の岩みち ○谷の下みち ○ほそ道
- こげのほそ道 ○道のたより ○夜みち ○道ゆく人 ○なだのかけぢ ○岨のかけ道
- 朝たつ道 ○そびひの道 ○そこの道 ○道もせ ○かよひぢ ○道行ぶり
- 岩のかけ ○ちまた ○杉の下みち ○みちのべ ○岩のほそ道 ○道のたより
- 岩根にふむ道 ○つまぎの道 ○道のひさ筋 ○うまやぢ ○楊のかけふむ道 ○こましき道

金 村
八條御息所
能 因
成 仲
尊 孫
御 杖
繁 里
隆 正
眞 淵

万 同 古 後 新

天原ふりさけみれば白眞弓はりてかけたり夜道はよけむ
春駒のあがきを早みくもゐにぞ君があたりを過てきにける
世にふればうさこそまされみよし野の岩のかけみちふみならしてん
さかの山いみもき絶にし芹川の千代のふる道あとはありけり
おく山のおとろが下もふみ分て道ある世ぞと人にしらせむ
君が代はのがるとなしにふじのねのこやしき道も人ぞけわいる
おくえぞのはてまでなびく君が代にひらけぬ道はあらじとぞ思ふ
岩がねのこやしき山のはこね路もならせばなれて人はこえずや
あしふめば小石おちくるつゝらをり山路は杖ぞ命なりける
みるがうちに浪ぢへだてゝ山のみほそくなりもくわが心かな
いにしへのならの御代よりふみ分し木曾の坂路のなれずも有かも

- さかしき道 ○かしこ道 ○みれのかけぢ ○夜みち ○紅のすそ引道 ○道のなはて
- 里の中道 ○みちのべ ○人やりの道 ○つま木の道 ○かよひぢ ○たより行
- 道すがら ○さゝわくる道 ○もごし道 ○竹の中道 ○あぜ傳ふ道 ○千代のふる道
- 小車の道 ○み山ぢ ○玉ほこの道 ○世わたる道 ○道はさまたげ ○その道
- 世を治る道

大 浦
人 呂
よみ人
行 平
太上天皇
直 養
景 樹
千 廣
濱 臣
知 紀
眞 淵

○驛

○うまやぢ

○うまやぢのたひ

○うまやぢの鈴

○うまやぢのをさ

○うまやぢく

○水うまや ○うまやつつき ○うまやおちつき ○東路のうまや／＼ ○早うちうのうまや
○うまや／＼とまつ ○關のうまや ○夜る山こゑて ○はゆまのすゞ

六 同 六 東路のうまや／＼とかぞへきてあふみのちかくなるがうれしさ
東路の里の遠さもあらなくにうまや／＼ときみをまつかな
同 顯 朝 多 香 子 美 痴 春 門

六 同 六 松原はそこともみえずはりまちやかこの驛はきり深くして
東路やをちこち人の打むれてはもまの鈴のねにぞにぎはふ
五十あまり三のうまやちつら／＼に千代よばふ也松風のこゑ
みちしあれは御代のうまやのこまのつめつがるのおくも安くへにけり

○坂 さか

○みさか ○たむけ ○さかゆ ○老の坂 ○二坂 ○大坂
○のほれづくだる ○つく杖 ○過ゆく ○のぼる ○くだる ○こえかれて
○たまさかに ○なが坂

万 藤白のみ坂をこもと白栲の我衣手はぬれにけるかも
後拾 白雲の上よりみゆるあし引の山の高ねやみさかななるらむ
俊 千 能 よ しみ 人 因 ざ
武 隆 因 ざ

○林 はやし

○かた山林 ○山の林 ○里林 ○星の林 ○松林 ○錦の林

○ゆきのはやし ○花の林 ○林のさき ○杜がくれ ○木葉の林 ○竹の林
○みどりの林 ○くもの林 ○袖がたの林 ○春の林 ○夏の林 ○秋の林
○冬の林 ○詞の林 ○玉の林 ○心の林 ○み山林 ○哥の林

万 柚方の林のさきのさぬ榛のさぬにつくす目につくわがせ
同 あら玉の岐への林に名をたてよもきかつましくいをさきだてに
後拾 木のもとにおらぬにしきのつもれるは雲の林のみぢなりけり
額田女王 しみ人 しらす
御 杖 繁 里

○杜 もり

○もりの下風 ○もりの下道 ○神のますもり ○もりの下草 ○もりの下水 ○神なび
○神なびのもり ○山もとのもり ○森の一むら ○そごものもり ○もりの木かげ ○もりのしめなほ
○もりのくち葉 ○もりの下露 ○もりの木の間 ○もりの下かげ ○もりの檜

万 山しなの岩田のもりにふみこえばけだし吾妹にたゞにあはんかも
古 ねぎごとをさのみきよけん社こそはてはなげきの杜となるらめ
續 今よりは信太のもりにやどりせじ千枝の雫は雨にまされり
はづかしのもりとこたへむ人もがなわが身をしりてかけにかくれむ
契 千 千 しみ人 千 合
沖 隆 ず 岐 合

○野 の

- 野がみ
- かげ野
- かれ野
- 園生の野へ
- むかひの野へ
- 野なる草木
- 眞野
- 野分
- 野中の道
- 都の野へ
- 野づかさ
- 末野
- すそ野
- 遠いた野へ
- 野路のやどり
- 枯生の野へ
- 春の野
- 野がひの牛
- 野もせ
- 野のべ
- 野山
- しめし野
- 垣ほの野へ
- 野へのいほ
- 野火
- 夏の野
- かりげの小野
- 野ちの一寸ぢ
- 小野
- 野ら
- 浅ぢふの小野
- 花野
- 野守の鏡
- 野中のなが
- 秋の野
- 冬の野
- 野やくけぶり
- 野中
- 野路
- ふた野
- あら野
- まがきの野へ
- 野ふし
- 野守
- 野守のいほ
- 春のやけ野
- 野原
- 野田
- やけ野
- ひなのあら野
- 龍の野へ
- 大野
- 野澤
- 野中ふる道
- 野風ふく

万 同 古
引弓野に匂ふはり原いりみだれ衣にははせ旅のしるしに
眞草かるあら野にはあれどもみぢ葉の過にし君が片見とそこし
としをへて住こし里を出ていなばいと深草野とやなりなん
もろこしの國にありせば下野やなす野はとらのふしどならまし
日本はいともかしこき神ませばうべもとらふす野べなかりけり
むさし野や尾花なみよる秋かせにはてはみえけり雪のふじのね

○原 はら

- ふぢ原
- さゝ原
- 小篠が原
- 浅茅原
- 小松が原
- 萱原
- 浅野の原
- くず原
- しきみが原
- 外山の原
- 松原

奥 人 業 道 春 千
人 廣 平 男 里 陸
呂 呂 平 男 里 陸

万 同 同 讀古
いざ子ども倭へはやく白すげの眞野のはり原手をりてゆかん
しらすげの眞野のはり原ゆくさくさ君こそみらめま野のはり原
あられうつあられまつ原住の江のおとひをとめと見れどあかぬかも
かるもかく猪名野の原のかり枕さてもねられぬ月をみるかな
旅人の袖吹かへす夕かせにむら雨なびく野ちのしのはら
きみが代はさかえてつゞく家なみにはてもみえけりむさし野の原

○橋 はし

- 川ばし
- 丸木橋
- 棚ばし
- 峯のかけ橋
- 竹橋
- かり橋
- 玉のみはし
- たえま
- わたせる
- いた橋
- 岩橋
- かさゝぎの橋
- 井出の岩橋
- けた
- 朽木の橋
- ふしきの橋
- 打わたす
- たゆる
- かけ橋
- つぎ橋
- もみちの橋
- 橋ばしら
- はしら
- つくる
- 行合のはし
- 天のさ夜橋
- 石橋
- 萩原
- は山の原
- 大原
- かりたの原
- 蓬が原
- はり原
- 萩原
- すそのゝ原
- 菅原
- すそ野
- 小原
- はり原
- 打はし
- 天の浮はし
- 谷のいた橋
- 橋づくり
- 山のたな橋
- 雲の梯
- かくる
- 楓のいたばし
- あゆみいた
- 柴橋
- ひさつばし
- まつのだなばし
- 高ばし
- 綱ばし
- 雲ぬのはし
- ゆきかへる
- あゆみいた
- 中橋

黒 黒 長 隆 之 譽
人 人 皇 祐 正 重
妻 子 子 祐 正 重

- ひろ橋
- 大橋
- 小橋
- 波のうき橋
- 岩のかけ橋
- むなしき橋
- 水のいた橋
- そり橋

千鳥なく佐保の川どの瀬を廣み打橋わたすなが来と思へば
 大橋のつめに家あらばまがなしく獨ある兒にやどかさましを
 小治田の坂田の橋のくづれなば桁よりゆかむなかこひそわぎ妹
 あし間よりみゆるながらの橋柱昔のあとのしるべなりけり
 榎の板も苔むすばかりなりにけりいく代へぬらん瀬田の長橋
 わたりこし木曾のかけ橋あやふきはかへりみてこそ立まさりけれ
 から衣きそのかけ橋千代かけてあやふげもなくわたる御代かな
 人とはぬみ出がくれのいは橋はくちせずわたるかひやなからむ
 立わたる雲のとだえに山人の衣手なびくきそのかけはし
 東路のせたの長橋長ければ夕日のさすも久しかりけり

○石 岩 巖

- 玉がしほ
- 石だまみ
- 岩根
- 岩みち
- 谷の岩垣
- 岩のうつほ
- 岩月がしほ
- 石の火
- 岩月
- 岩のほそ道
- 沼の岩垣
- 岩の陰道
- 千引の岩
- いしの床
- 石橋
- 岩垣
- 岩かご
- いはほの中
- さざれ石
- 岩まくら
- おほ石
- しづく石
- 岩のかけぢ
- 鶴のすむ岩
- はなれ石
- 岩ふれ
- しらいし
- 石井
- 水せく岩
- あら磯岩
- 沖の石
- 岩間
- たまいし
- 岩井
- 岩がれ清水
- 岩屋

景高尊鶴廣匡清同
 樹岑孫夫臣房正
 大伴耶女
 よみ人
 しらす

○田 畑

- 小山田
- あら田
- かきつ田
- みちのよこ田
- みさしろ小田
- むしろ田
- 冬田
- 門田
- み山田
- あら田
- 神田
- 遠の山田
- うゑ田
- 田づら
- 野田
- 庭田
- 沼田
- ふか田
- 高田
- うき田
- 坂田
- 濱田
- 谷の澤田
- そしろ田
- わさ田
- くぼ田
- 春田
- すそ田
- みなさ田
- 澤田
- 五百しろ田
- 千町田
- 水田
- 夏田
- きし田
- あし原田
- そさも田
- 山田のくろ
- 寺田
- ひつぢ田
- 秋田
- 川そひ小田

信濃なる千曲の川のさわれ石も君しふみては玉とひろはむ
 いかならんいはほの中にすまばかば世のうき事のこえこざらん
 君が代は千代に八千代にさわれ石のいはほとなりて昔のむすまで
 吉野川早きながれをせく岩のつれなき中に身をくだくらん
 をしからでなけもやられぬわが身こそ千引の石のたぐひ也けれ
 あしがらの峯のいはほはうごきなき東の國の御楯なりけり
 うごきなき庭の立石いくよへて宿のしづめと神さびにけむ
 石工手ふれぬ石のいかにしてかくさまぐのすがたみせけむ

よみ人
 しらす
 同
 同
 後京極
 忠房
 千薩
 茂岡
 有功
 畑

- 垣根の小田 ○田面 ○田面の澤 ○ふもさ田 ○田中の道 ○御田やもり
- かり田 ○山のすそ田 ○外山のすそ田 ○そぼづ ○あぞ道 ○田中の井戸
- かり田のいほ ○田なつもの ○くひ田 ○かり田の原 ○はたけ ○はけ田
- 古ばた ○畑やく ○片山ばた ○田川 ○なが田 ○山畑そば
- 遠山ばた ○園生のはた ○はたつもの ○はたもり ○山ばた ○あぬ畑
- ふる畑 ○やけ山畑

万 たちのしり玉まく田井にいつまでも妹をあひみす我こひぞらん
 同 あし引の山田つくる子ひですともしめだにはへよもるとするがね
 古 あし引の山田のそほづおのれさへわれをほしといふうれしき事
 神代よりけふのためとや八束穂に長田の稻のしなび初けむ
 をちかたのかた山ばたもつくるかな岩のはざまをかりいほにして
 むしろ田にまけるもだねもかぎりなきとしの敷にはしかじとぞおもふ
 むさし野も時しきぬれば新ばりの田づらの里ぞにぎはひにける

○海 うみ
 ○海原 ○青海原 ○わたづみ ○大わたづみ ○わたの原 ○大海原
 ○海づる ○大海 ○入海 ○あら海 ○ありそ海 ○わたつみ神
 ○わたつみの宮 ○八重のくまぢ ○山下海 ○海のみやこ ○世をうみ ○筆の海
 ○わたのそこ ○床のうみ ○海のおもて ○海の時 ○わたつみのかさし ○おくのうみ
 ○海の中道 ○うみづら ○なみだの海 ○千尋の海 ○海べた ○沖へ

拾 千 万
 ○へ ○なぎさ ○こさばの海 ○枕の下の海 ○朝なぎ ○ゆふなぎ
 ○千ひろの底 ○こしの海 ○にしの海 ○海にます神 ○南の海 ○北の海
 ○海つぢ ○青海 ○四方の海 ○八重の沙ち ○沙の八百會 ○沙のみちひ
 ○沙げの畑 ○沖つ沙風 ○沙瀬 ○うらの入海 ○海わたる舟 ○にはよく
 けひの海にはよくあらしかり菰のみだれつるみもあまのつり舟
 はるくとつもの沖をこぎもげばきしのまつかせ遠ざかるなり
 清見瀉月はつれなき天の戸をまたでもしらむ浪の上かな
 あら海を四方にめぐらす日の本は神のかためし御國なりけり
 あかねさす夕日のなごりさがたみこがれてみゆる浪の上かな
 船のへのいたらんきはみ海原も君につかふる道はありけり
 すめ國の四方のかためと常しへに浪の關もるわたつみの神
 四方の海は天のぬぼこの一しづく島となりけん名ごりなるらし
 わたつみのしほの八重路も浪風のをさまる御代に舟ぞにぎはふ

○湖 みづうみ
 ○鹽やかい海 ○鹽ならぬ海 ○みるめなき海 ○沙瀬に似たる ○みちひなき ○氷のはし
 ○なぎさ ○みぎは ○さゝ浪 ○さゝれ浪 ○大わた ○鳴のかきす
 ○さゝ浪よする ○いさなざりあふみ ○あふみ ○すばのわたり ○氷の上の通路

同 万
 いその崎こぎたみもげば近江の海八十のみなとにたづさはになく
 あふ坂を打出てみれば近江の海白もふ花になみたちわたる

黒 人
 よみ人
 しらす

滞る時もあらしな近江なるおももの濱のあまのひつきは
すはの海の氷の上のかよひちは神のわたりてとくるなりけり
ふしの根の雪けの雫みなぎりてあら山中そ海となりぬる
箱根山峯の雲には夜をこめて浪より明るあしの海づら
むらすよきなびく入江の秋風にかた穂かけたる眞野の浦舟
君が代にあふみの海を見わたせば八十のみなとに舟ぞ出いる
くものゐるみねのしづくか世々をへて箱根の海はたへたるらむ

兼 顯 重 游 景 大 千
盛 仲 盛 清 樹 平 蔭

○濱

はま

- 濱ざき ○八百日ゆく濱 ○濱路 ○濱田 ○濱の眞砂 ○濱づこ
- 濱かぜ ○小濱 ○わすれ貝 ○小濱のしゞみ ○濱ひ ○濱つゞら
- 濱菜 ○濱松がえ ○濱ゆふ ○濱ひさぎ ○海の濱ひ ○濱中
- あらし濱へ ○濱まつがえ ○貝ひろふ ○長濱 ○濱べ ○濱のこまや
- 濱清み

松かげの清き濱べに玉しかば君來まさむか清き濱べに
ますかひみ見ぬめのうらはもと舟の過てゆくべき濱ならなくに
濱清み浦めづらしみ神代より千舟のはつる大わたの濱
大海のいそもとすりたつ浪のよらんとおもへる濱のさやけく
君をおもひおきつの濱になくたづのたつねくれはぞ有とだに聞

八 乙 八
東 戸 呂
房 呂 呂

○潟

かた

吹上や濱の松かせたもむよも袖やすからぬ雨のおとかな
鹽かせの吹上の濱はちりならぬ眞砂も山とつもりぬるかな

安 重
年 老

- 沙の干がた ○遠つひがた ○沖のひがた ○干潟の船 ○干がたになる ○沙干のかた
- あまのまてがた ○ひがた

ますらをがさつ失たばさみ立向ひ射る圓方は見るにさやけし
なには潟汐干に立て見わたせば淡路の島にたづわたるみも
夏そ引海上がたの沖つすに船はとゞめんさ夜ふけにけり
清見がた月はつれなきあまのとをまたでもしらむ浪の上かな
おきつかた磯根にちかき岩まくらかけぬ浪にも袖はぬれけり
さしいづる干潟につるのこゑたてゝ浪はしづけき海の朝なき
大がたやそらもひとつにすみもきていづれ月ともみえぬ影かな
夏そ引海上がたのにはをよみ沖こぎわたるみちのくの舟

舍人 媛 子
よみ 人
しらす
同 通 光
意 純
誠 之
千 蔭

○浦

うら

- うらぢ ○こごうら ○うらわ ○浦のみわたし ○浦の菅や ○浦つたひ
- うらさびて ○浦よりをち ○うらさびし ○浦わたり ○うらく ○浦のみるめ
- うら舟 ○うらがなし ○うら浪 ○うらなく ○浦人 ○浦こぐ舟
- うらなれて ○浦の遠山 ○うらの入海 ○浦やまし ○うらなつかしみ ○浦風

- おのがうらく ○うら千鳥
- うら松
- うらわげごろも ○うらのこ
- うらこひし ○うらこぶ
- うら人
- 浦たづ
- 浦のもしほ火
- うらの王藻
- 心のうら
- うら路
- うらわこきたむ ○浦鹽
- うらなく
- うら島
- うらなけく

万 　　ひるくれどあかぬ田子の浦大君の命かしこみよるみつるかも
 同 　　いなみ野は行過ぬらし天づたふ日笠の浦に浪立るみゆ
 古 　　陸奥はいづくはあれど鹽がまの浦こぐ舟のつなでかなしも
 おくれつるあまかきぬたにうちませてよるはさびしきすまの浦波
 見れどあかぬ繪島の波をうらなれしあまはいくとせ袖にかくらん
 鹽屋がにまれなる浦のよそめには烟の末もさびしかりけり

益 人
 よみ人
 同 　　ず
 廣 海
 依 平
 眞 淵

○島 しま

- しまれ
- にたま
- 千しま
- 島山
- しまのあらす
- にひ島
- しまよつ
- 浮たま
- 大和しま根
- 神のはつ島
- 蓬が島
- うらの島々
- しま風
- はなれ島
- 秋つしま
- えぞの千島
- しまもり
- しま松
- 島おろし
- 河しま
- 島わ
- 池の中たま
- しまつたひ
- おきつしま
- 遠たま
- 大しま
- しまかけ
- 島がくれ
- 百つしま
- 島ざき
- 八十しま
- 沖つしま
- 沖の遠たま
- 島きは

万 　　鹽ざゐにいらこの島へこく舟にいものるらんかあらし島わを
 同 　　きよしごとまこと尊く奇くも神さびをるかこれの水島

人 廣 呂
 長 田 王

同 　　家人はかへり早こといはひじまいはひまつらん旅ゆくわれを
 古 　　わたの原よせくる浪のしばくも見まくのほしき玉つしまかも
 僧鏡 　　われこそは新しまもりよおきの島あらし浪風心してふけ
 生そはるはなれ小島のそなれ松浪にうかれし種やよりけむ
 にしの海いづくはあれどいつくしま浪立かへりたれかみざらん
 はりまがたいかでみやこのつとにせんる島の波よかくよしもがな

よみ人
 しらす
 同
 後鳥羽院
 永 章
 景 樹
 眞 淵

○湊 みなと

- 湊のせき
- 湊に向ふ舟
- 袖のみなと
- みなさかた
- みなさ田
- みなさなれて
- 遠のみなと
- 花のみなと
- みなさの入江
- みなさ入の舟
- みなさの沖
- 春のみなと
- みなさ舟
- みなさにいづる
- こしのみなと
- みなさにさいつる
- 濱のみなと

万 　　天ざらひひがた吹らし水莖の岡の湊に浪立わたる
 同 　　わが舟はひらの湊にこぎはてん奥へなさよりさ夜更にけり
 代 　　もく舟のちらの湊のおきつすに梶とりむけてよする舟人
 もく舟のはへるみなとはふるさとの夢をあつひる所也けり
 しまきふく沖のなごろの高ければむやひかねたる湊舟かな

よみ人
 しらす
 黒 人
 政 村
 菅 彦
 濱 臣

○津 つ

- ふなつ
- 舟はつるつ
- 大津
- 八十の舟津
- 津による舟
- 舟よする津

新 同 万

○崎

○舟いたす ○舟よそひ ○舟出する ○月まてば ○津にをる舟 ○汐もかなひぬ
 久かたの天のさぐめが岩舟のはてしたかつはあせにけるかも
 わが命まさきてあらば又も來む志賀の天津によする白波
 舟ながらこよひばかりは旅ねせむ敷津のなみに夢はさむとも
 柔田津のありその玉藻打なびき底のいくりも月にみえつゝ
 難波津はにぎはふ里となりしより平のみやこいやさかえけり

角 麻 呂
 老 實 方
 秀 實 方
 光 憲

玉 千 同 同 万

くしろづくたふしの崎に今もかも大宮人の玉藻かるらむ
 玉藻かるみぬめを過て夏草の野じまが崎に舟ちかづきぬ
 千早ぶるかねがみさきを過ぬともわれはわすれじ志賀のすめ神
 あしべにはたづがねなきて湊風寒く吹らむつをのさきはも
 はりまがた須戸の月よみ空さえてゑしまが崎に雪ふりにけり
 もふづく日わたのみ崎をこぐ舟のかたほにひくやむこのうらかせ
 磯崎のまつのいく代かなれぬらんさてしもあらし浪の音かな
 いそざきの神の心になびくらん常世の浪のかへる間もなし

人 戸 呂
 同
 若 湯 生 王
 親 隆
 太 政 大 臣
 景 樹
 清 彦

○磯

○あら磯の外ゆく舟 ○磯のうへ ○あら磯かけ ○いそ波 ○いそす浪
 ○入ぬる磯 ○梓弓いそ ○磯もこ ○磯のすさき ○はなれ磯
 ○磯もさるるに ○いそもさゆすり ○入江のいそ ○しほみついそ ○磯立ならし
 ○いそわ ○沖のあら磯 ○ありそ ○磯まくら ○あまのいそや
 ○磯のさまや ○いそのいはや ○いそまがくれ ○磯のなみち ○磯やかに
 ○あら磯いは ○磯松がれ ○いそ菜 ○浦のいそや ○磯のいさこ
 ○いそべ ○いそ山 ○いそべの小まつ ○磯ぢ ○磯のなみわけ
 ○いそのいくり ○ありそのいくり ○磯ぢ

玉 千 古 同 万

あべの崎鶴の住む磯による浪の間なくこのころ倭しおもほも
 あちのすむすさの入江のありそ松をまつころはたひひとりのみ
 玉だれの小がめやいづらこよろぎの磯の浪分沖に出にけり
 さ夜千鳥ふけひの浦に音づれて繪島が崎に月がたぶきぬ
 磯の崎いく久さにかなりぬらんいたく木高き風の音かな
 としなみのこもる磯べのいは根松いはねと千代はあらはれにけり
 こけむせるいそのいはほはいつの世に浪のよせこしさゝれなるらん
 いそ崎のまつのいく代かなれぬらんさしもあらしなみの音かな
 もくまのあらし箱根路こえくればこよろぎの磯に浪の寄み也

赤 人
 よ み 人
 同 基
 宗 基
 鎌 倉 右
 有 忠
 壺 満
 景 樹
 眞 淵

○沖

おん

- 沖つす
- 沖つ風
- 沖す
- 沖べばるか
- 沖の小島
- 沖の白洲
- おきつ島人
- 沖つ島守
- 沖のなごろ
- 沖つしらなみ
- 沖つ玉藻
- 沖の廣瀬
- 霞の沖
- 沖つ沙さぬ
- 沖めかり舟
- 沖つ朝なき

万 名ぐはしき印南の海の沖つ浪千重にかくりぬ倭しま根は
 住の江のまつをゆきかせ吹からにこゑ打そふるおきつしら波
 はるくつとつもの沖をこぎもけばさしの松風遠ざかる也
 けふこそは都のかたの山のはもみえずなるをの沖に出ぬれ
 うきねするまつへの沖のかかり火はもろこし舟のいさりなるかも
 沖つ風吹のすさびにゆく舟はくがより安きみちありげなり
 海原のおきの高くもみゆるかないく重つもりし水にか有らむ

人 廣 呂
 朝 恒
 孫 重
 實 家
 孫 重
 景 樹

○淵 ぶち

- 岩ぶち
- きりの淵
- うづまく淵
- たぎつ岩淵
- 岩がき淵
- 涙のふち
- 石川かた淵
- 淵の石
- かた淵
- 花のふち
- みなわさかまく淵
- 青淵
- もみちの淵
- みどりの淵
- ぬま淵
- みどりの淵
- 底ひなき淵
- ふちに沈めし玉
- あゆふす淵

古 万 しばらくも行て見てしが神なびの淵は浅びてせにかなるらむ
 あすか川淵は瀬になる世なりともおもひそめてし人はわすれじ

よみ人 しらず
 同

新拾

大井川みなわさかまく岩淵にたゝむいかだの過がての世や
 青淵にたゝふる水はおく山の石根の苔のしづくなるらむ
 しら玉はありともたれかかづくべきこの岩淵のそこひなければ

俊 頼
 依 平
 春 海

○瀬 せ

- 舟瀬
- 中つ瀬
- よる瀬
- ひろ瀬
- わた瀬
- のち瀬
- 梁瀬
- 瀬あさ
- 下つ瀬
- あふ瀬
- 早瀬
- 浅瀬
- ひら瀬
- 瀬にます神
- 瀬のさゞれ
- 瀬
- こひしき瀬
- こゝろを瀬に
- いく瀬
- ひごつ瀬
- せおりつひめの神
- 岩瀬の玉
- わたり瀬
- のぼり瀬
- 瀬
- 高瀬
- 瀬のこ
- せの舟ぐい
- たぎつ早瀬
- くだり瀬
- 瀬のあたる木
- 瀬か早み
- ゆく瀬
- 岩瀬
- 瀬だえ
- 瀬の白ゆふ
- 上つ瀬
- せなみ
- 沖の廣瀬
- 瀬の廣瀬
- 瀬
- 瀬ざり

万 すゝか川あさ瀬わたりてたれもゑか夜越にこゑん妻もあらなくに
 山川の清き川瀬にあそべどもならの都はわすれかねつも
 梓弓いるが如なる瀧川の瀬はとし月のたぐひなりけり

よみ人 しらず
 同
 春 滿

○迫門 せとと

- せとわたり
- せとこの舟
- 浦の門
- せとこの早舟
- せとこの沙さき
- 瀬のせと
- 瀬戸の入江
- 瀬戸の吹わけ
- せとこの舟人
- 瀬戸のさゞれ
- 瀬のこ
- せの舟ぐい
- たぎつ早瀬
- くだり瀬
- 瀬のあたる木
- 瀬か早み
- ゆく瀬
- 岩瀬
- 瀬だえ
- 瀬の白ゆふ
- 上つ瀬
- せなみ
- 沖の廣瀬
- 瀬の廣瀬
- 瀬
- 瀬ざり

万 天放るひなの長路もこひくれば明石の門より大和島も

人 廣 呂

同 同 勅 後拾

あは島にこぎわたらんとおもへども明石のと浪いまださわげる
はや人のさつきのせとを雲なす遠くもわれはけふみつるかも
あなしふくせとの汐ひに船出して早くぞ過るさやかた山を
浪高きむし明のせとにもく舟のよるべしらせよ沖つしほかせ
大鹽や淡路のせとの吹分にのぼりくだりのかた帆かくなり
はりまがたせと出る舟のまほみえて沖の汐瀬をもく嵐かな
木間もく帆かげも早し明石がたせと吹わたる松のあらしに
松浦ぶねいたてになりぬ大島のせとの高汐いまかおつらむ

灘

- なだ舟 ○なだの鹽風 ○なだの塩やき ○ふだの拾舟 ○灘女 ○あなたのなだ

新 續後

あしのやのなだの鹽やきいとまなみつげの小櫛もさゝすきにけり
綱手ひくなだの小舟や入ぬらんにはのたづの浦わたりする
千田の海の沖つ大なだ庭をよみつりかもすらし船ぞむれたる
山まつに浪のひゞきを打そへて月よりおくるなだの鹽風

洲

- 沖つす ○みなさす ○はなれす ○うきす ○島のあらす ○なが洲
- いその洲さき ○洲崎 ○川洲 ○しら洲 ○ながれ洲 ○洲崎の岩

業 平 國 信 齋 廣 千 廣

万 新 夫

倭こひいのねられぬに心なくこのすのさきにたづなくべしや
かもめある藤江の浦のおきつすに夜舟いざよふ月のさやけさ
さまぐのなが洲のすがたあらはれて鹽ひの入江水ぞ少き
たい一木たてる洲崎の松かげにいくたびあまの舟つなぐらむ
ながれすにながれぬ浪とみえつるはおのがなくねにあらはれにけり
夕しほの今かみつらんすみ田川もとのすさきかへるしら浪

渡

- わたり瀬 ○かちわたり ○ふなわたり ○わた瀬 ○朝わたり ○夕わたり
- 朝川わたる ○夕川わたる ○わたりを遠み ○わたしまつ間 ○わたりもはてぬ ○わたりやいづこ
- ふるきわたり ○わたり川 ○舟よばふ ○ふるわたり ○わたる小舟 ○わたるちん人
- わたしもり

乙 廣 顯 仲 雅 有 游 清 尊 孫 景 樹

万 同 同 拾

わたり守船わたせをとよぶこゑのいたらねばかも梶の音せぬ
ふねはつる對馬のわたりわた中にぬさとりむけて早かへりこね
くるしくもふりくる雨かみわの崎さぬのわたりに家もあらなくに
をしむともなきものもゑかしかすがのわたりときけばたいならぬかな
雨深きさのゝわたりの夕ぐれは風さへやどるかげやなからん
夕されば水底すみて澤田川雲のかげのみ立わたるみゆ

よみ人 奥 廣 呂 兼 通 景 樹

泊

とまり

- 波のさまり
- 夜のさまり
- うきれ
- かぢまくら
- さぎ合のおな泊
- 泊にしづむくち舟
- かしふりたつる泊舟
- 波まくら
- 友舟
- 波のよるく
- さまる舟人
- さまり定めむ

万 同 夫

住のえのえなづに立て見わたせば武庫の泊もいづる舟人
 おも山に霞たな引さ夜更てわが舟はてむ泊しらすも
 こしの海竹の泊をけさみれば一夜をこめてもきふりにけり
 わたの原雲よりをちにこぐ舟ははてむとまりもしられざりけり
 海原にうきねをすればみなと風寒く吹夜にたつぞなくなる
 しき島の倭にもあらぬこもちしていとやかきねのからとまりかな

黒 人
 基 師
 兼 盛
 資 雄
 春 卿
 宣 長

瀧

たき

- おちたぎつ
- たぎち流るゝ
- 瀧のいさ
- 瀧つせ
- 瀧川
- たぎつ早川
- 瀧のみた
- 瀧の瀨わき
- 瀧の水上
- たきの玉水
- みれの瀧つせ
- たきのながれ
- 瀧つみなわ
- 瀧まくら
- 繪にかく瀧
- なみだの瀧
- 袖のたきつせ
- 雲にひまきて
- 雲よりおつる
- たゝむ岩かぢ
- 心のうちの瀧
- 岩そゞく瀧
- 岩ばしる瀧
- 岩根にひびく
- 瀧のそま
- 雲にあまざる
- 中にも淀
- 木がくれおつる
- 岩にせかるゝ
- せき入ておさす
- 瀧のいはつば
- あゆげしる瀧
- 岩のはさま
- 瀧のそま
- 瀧もあまりの水走
- たきつ岩根
- たぎの玉みづ
- たぎつ心
- 岩こめて
- 瀧の緒
- 瀧のみた
- 瀧の岩かぢ
- しらゆふたぎつ

万 古 同 同 拾 後 金 新

- 瀧つみなわ
- 瀧のふるこゑ
- たきつ川
- 早瀧のたき
- たきのしら王

としのはにかくも見てしがみよし野の清きかふちの瀧つしらなみ
 龜の尾の山の岩根をとめておつるたきのしら玉千世の數かも
 落たぎつ瀧のみながみ年つもり老にけらしな黒きすちなし
 風ふけど所もさらぬしら雲は世をへておつる水にぞありける
 音にきくつゝみかたきを打みればたゞ山川のなるにぞ有ける
 くる人もなきおく山の瀧の糸は水のわくにぞまかせたりける
 白雲とよそにみつればあし引の山もとやろにおつるたきつせ
 久方の天つをとめかなつ衣くもるにさらすぬのびきの瀧
 しづかにとおもひ入にしおく山のみねまでひやく瀧の音かな
 そことしもまだしらねど瀧の音のきこゆる山は涼しかりけり
 山まつはけしきをそふるものなれどなくともみばやたきの白浪
 右になし左になしてこえくれはたきの音さへ山めぐりする
 おちたぎりたきの水上見てもかむ雲なかくしそ那智の高山
 天なるやおとたなばたのおるはたの手玉みだるゝ山のたきつせ

金 村
 友 則
 忠 岑
 躬 恒
 定 瀧
 經 信
 有 家
 最 樹
 壽 胤
 重 胤
 濱 臣
 知 紀
 眞 淵

河

かは

- 石川
- 底のみくづ
- 底の玉藻
- 水のみわた
- 川やしる
- 朝川
- 夕川
- 山川
- 袖川
- 谷川
- 沼川
- たぎつ早川

○ 柚山川	○ 田川	○ ほそ谷川	○ 野川	○ 小川	○ いさゝ小川
○ 早川	○ 瀬ノ井くひ	○ 川そひの關の古杭	○ 井せき	○ 川そひ小舟	○ 川舟
○ 早瀬川	○ 瀧川	○ 瀧だえの水	○ 川門	○ ふもこ川	○ 川洲
○ 岩の井關	○ 瀧つら	○ 川おこ	○ あゆふす川	○ うづまく川	○ 川淀
○ 水を清みか	○ 川さほし	○ 川おこ	○ 川おこ	○ みなわさかまく	○ 此川のたゆるさなく
○ 川橋	○ 川なさ	○ 川おこ	○ 川おこ	○ 川わだ	○ 川の瀬
○ 川ふれ	○ 川ふち	○ 川おこ	○ 川おこ	○ 春ゆく里	○ 沖つしま川
○ はや瀬	○ よごむ瀬	○ 谷のいし川	○ 淺川	○ 眞砂川	○ 冬川
○ 河内	○ 川わたり	○ 川たげ	○ ながるゝ川	○ おもひ川	○ みなさ川
○ 堤	○ 關川	○ 川ぞひ小田	○ 川ぞひ柳	○ ゆく水	○ 水ゆく川
○ 汀	○ わたる	○ さゞ浪	○ さゞれ浪	○ 川ぞひうつき	○ 川ぞひ道
○ ふち	○ 瀧	○ 瀧	○ きし	○ さゞれ水	○ 川よりみち

みれどあかぬよし野の川の常なめのたもることなく又かへりみむ
 山川もよりてつかふる神ながらたきつかふちに船出せずかも
 大君のみかさの山の帯にせる細谷川の音のさやけさ
 むかしみしきさの小川をけふみればいよゝさやけくなりけるかも
 あしたづの立る川べをふく風によせてかへらぬ浪かとそみる
 石川や瀬見の小川の清ければ月も流をたづねてぞすむ
 さ夜更て嵐吹らしあなし川かはおとたかくなりまさるなり

人 慶
 同 大 件 癩 ず
 長 貫 之
 野 宮 空

○淀

○ 川よご	○ 七瀬の淀	○ よご瀬	○ よごめる浪	○ よごめる水	○ よご川のよごむ
○ 淀川	○ 淀の川舟				

みなもとの清き賀茂川すめらざの御代にとこしくすみて有けり
 もちゝかみたかねの雪やとめぬらるる日にまさるふしの川水
 淵となり瀬とかはれども飛鳥川昔の浪はかへらざりけり
 かくばかりすめる世になど東路のとねの川水下にごるらむ
 風ふけば水かけ草のかけなびく清き川内はちりだにもなし

嘉 千 千 茂 譽
 言 隆 廣 枝 正

○岸

○ かたきし	○ 川きし	○ 岩きし	○ 片山きし	○ 山きし	○ きしのくれ竹
○ さしの山吹	○ さしのうばて	○ さしのみわだ	○ さしのはにふ	○ 岸のひたひ	○ くづるゝきし
○ さしのつがき	○ ゆくてのきし	○ 遠近のきし	○ さしの下ゆく水	○ さしのごまや	○ さしの岩根
○ 南のきし	○ さしの松がえ	○ さしれ	○ さしかげ	○ きし田	○ きしうつ波

湯 原 王
 よ み 人
 同 正 主
 尊 晴

万 同

○きしの柳 ○舟つなぐ

住の江のきしの松原とほつ神わか大君のいでまじところ
岩代のきしの松がえむすびけむ人はかへりて又みけんかも
しばしとておりたつきしの苔むしろきてとふべき所也けり

兄麻呂
意寸麻呂
清男

○江 え

- おもひ入江 ○浅き江 ○ふかき江 ○くるゝ江 ○入江の月 ○みさび江
- さび江 ○にこり江 ○みごもり ○ふる江 ○いり江 ○山もこの入江
- 沙の入江 ○沼の入江 ○入江の千鳥 ○入江のたづ ○入江にあさる ○入江にたてる
- 冬にいり江 ○ながれ江 ○ほり江 ○みなと江 ○玉江 ○江の水
- 入江のあし ○入江のまごも ○入江の菅 ○入江のあやめ ○入江のみまこ ○江の波
- くるゝ入江 ○入江のまつ ○大江 ○ふかき江 ○ぬまのふかき江 ○しほの入江
- 山もこの入江 ○みまこいる入江 ○あしたつのさわぐ入江

万 同 同 後

くさか江の入江にあさるあしたつのあなたづくし友なしにして
三島江の入江のこもをかりにこそわれをば君はおもひたりけれ
風ふけば浪たかゝんとさむらふに葛のはそえに浦がくりぬぬ
としをへて濁だにせぬさび江には玉もかづかで今ぞすむべき
朝ほらけ浪のもやひのうつはれて雪の入江ぞしつけかりけり
住の江や村雨過てあしの葉の夕日もなびくまつの下風

旅人
よみ人
赤人
忠人
廣海
繁里

万 六 廻

○沼 ぬまぬ

- かくれぬ ○うさね ○みごもりぬま ○流れぬ沼 ○岩がき沼 ○沼の岩がき
- こひぬま ○草にかくるゝ沼水 ○沼川 ○鮫のぬま ○沼の入江
- 沼水 ○みぬま ○眞菰 ○根せり ○みごり沼 ○根ぬたば
- 池の堤のかくれ沼 ○菅 ○あし ○藻 ○ほたる ○水鳥

おく山の岩がき沼のみこもりに戀やわたらんあふよしをなみ
水草生て有ともみえぬ沼水の下のこゝろをしる人のなき
桁おちて苔むしにけりをはたのいたづらの川にわたるたなばし
かくれぬの藻にふす魚も天傳ふ日のみかげだにはもれじと思ふ
草がくれ人のみぬまをたづねずばにぐる心のそこもしられじ

人麻呂
よみ人
しらす
仲實
春門
芦庵

○澤 さは

- 野澤がくれ ○外面の澤 ○田つらの澤 ○澤のみかけ ○野澤 ○山澤水
- 澤へ ○澤水 ○澤田 ○鳴たつ澤 ○浅澤 ○ふか澤
- たのむの澤 ○大澤 ○あれ田の澤 ○入江の澤 ○澤の水かけ ○菅かる澤
- ふす鳴 ○まごこ ○菅 ○小澤 ○ものおもふ澤 ○あれ田の澤
- みくり ○茅原 ○根せり ○わが菜 ○あし ○澤へ

さぬらかくは玉のをばかり戀らくはふじのたかねの鳴澤のごと
まごもかる淀の澤水雨ふれば常よりことにまさるわがこひ
廣澤の池にうかべる白雲は底ふく風の浪にざりける

よみ人
しらす
重之
貫之

むさし野のをぐきの雲のゆきかひに野澤の水のすみにごりする

池 いけ

- 池のこほり ○池の汀 ○庭の池水 ○みさび ○うき草 ○池の心
- 池の面 ○池浪 ○池のなきさ ○池のさゞ浪 ○外山がくれの池 ○池のおも
- 池の菱 ○冬の池 ○池のなきさ ○池の江 ○池の岩根 ○池のかゞみ
- 池の玉藻 ○やまの池水 ○池のつゞみ ○池水のいひ出る ○池のうもれ水 ○池水のすさき
- 池べ ○すめる池水 ○底のさゞれ ○池のあし間 ○池の水鳥 ○水廣き池
- 底の玉藻 ○池のむら鳥 ○池のかゞみ

万 同 拾 新

かるの池のうらま行めぐる鴨すらも玉藻の上に獨寝なくに
 大君は神にしませば真木のたつあら山中に海をなすかも
 雨ふるとふくまつ風はきこゆれど池の汀はまさらざりけり
 池水の世々に久しくすみぬれば底の玉藻も光見えけり
 のぼりたちかへりみすれば香具山のしづく也けり埴安の池
 池しあれば水は心の引方にまかする小田のたのもしきかな
 ふるさとの野となる庭に今も猶すめるやいけのこゝろなるらん
 しなが鳥ぬな山まつにこちふけばはるかにさわぐこやの池水
 月のすむいく田の池の水かゝみ秋さびゆけど見る人もなし

堤 つゝみ

紀皇女 人麻呂 貫之 大輔 大平 光彪 大朝 尊朝 景樹 有功 痴

万 千 勅

井 むみ

- 池のつゞみ ○堤くづるゝ ○つゞみむかひ ○人目づゞみ ○堤ぼるかに ○おでづゞみ
- 堤吹こす松風 ○つゞみつく ○袖のつゞみ ○つゞみあへぬ ○つゞみあへぬ ○つゞみあへぬ ○池の堤にさす柳
- まこ井の井づゞ ○井の底にみる大空 ○玉井 ○み井の玉水 ○山の井
- 岩井 ○板井 ○井筒 ○あか井 ○み井のまし水 ○我門の板の清水
- たな井 ○石井づゞ ○井づゞ ○はしり井 ○さきは井 ○いさらへば
- わく ○くむ ○かばづ ○清水 ○筒井づゞ ○山井
- いな井 ○すむ ○にざる ○底 ○むすぶ ○水くさ
- わすれ井 ○おしほ井 ○おしほの長井 ○かめ井 ○ます井 ○いづみ井
- 天のおしほ井 ○たる井 ○まつ井 ○柴のかげ井 ○いはつほ

小山田の池の堤にさす柳なりもならずも汝とふたりはも
 池もふりつゞみくづれて水もなしうべかつまだにとりのゐざらん
 堤をば豊浦の宮につきそめて世をへぬれど水はもらさず
 はにやすのつゞみの上に有たてば宮しかしけむ神代しおもほ也

よみ人 足根 眞信公 肥後 貞信公

万 古 千 風

山のべの御井を見がてり神風の伊勢をとめども相みつるかも
 むすぶ手の雪に濁る山の井のあかでも人にわかぬるかな
 むさし野のほりかねの井もあるものをうれしく水のちかづきにけり
 世々をへてみむともつきじ久かたの天よりうつすおしほ井の水
 くむ人のまれなるほどもしられけりかしのはしづむ山の井の水

長田王 貫之 俊成 延誠 忠友

岩かねの杉の下水おりたてば心さへゆく山の井の水

六 秋

○水 みづ み

- みかは水 ○ふるべの水 ○さざれみづ ○うもれみづ ○わすれ水 ○水かけ
- 水上 ○山水 ○谷水 ○川水 ○ほしり井の水 ○かけひの水
- 落くる水 ○岩もる水 ○池氷 ○沼水 ○澤水 ○清水 ○清氷
- 石清水 ○岩そゞろ水 ○わきいづる水 ○ゆく水 ○瀬ざりの水 ○瀬だえの水
- 玉水 ○下水 ○まし水 ○みもひ ○やり水 ○にはたづみ ○いづみの水
- 春の水 ○秋の水 ○みなわ ○水すぢ ○野中の清水 ○水のあや ○みなれ
- 水尾 ○みなわ ○水ぬるむ ○山の井の水 ○岩ざりさほし行水 ○水のけぶり
- 水のみわだ ○雲水 ○水ぬるむ ○瀧の水 ○みごもり ○水カマ
- 水草 ○天のをち水 ○淵のしみづ ○こぐれが下の山水 ○水のこゝろ
- 松の下水 ○みながる ○岩なみ ○たまり水 ○水青き
- ゆきの下水 ○松の下水 ○岩がれ清水 ○山下水 ○水むすぶ ○雪けの水
- 水のしらなみ ○たらひの水 ○苗しろ水 ○水のみわだ ○水のけぶり ○井の水
- 岩井の水 ○筒井の水

万 おちたぎつ走井水の清くあればわたりはわれはゆきがてぬかも
 同 あしびなす榮し君がほりし井の石井の水はのめどあかぬかも
 古 いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞみむ
 後拾 あふ坂の關とはきけどはしり井の水をばえこそとめざりけれ
 菅贈大政 しみ人 しがらず 同 同 堀河大政

新

海ならずたへる水の底までも清き心はつきぞてらさむ
 あし引の山下水の清くのみあらまほしきは心なりけり
 わがしめし岩間の水の行末をすむ人さへはにこらすもがな
 さしおほふ青葉が下のまし水はしたたるいろのたまる也けり

菅贈大政 尊孫 廣名 景樹

○堰水 むせき

- ぬで ○ぬでこす水 ○ぬせきをこゆる ○ぬせきをもちる ○かばらぬせき
- せくさはすれぎ ○こしむさにせく ○せきわくる ○水せきかくる ○水ひく
- ぬのて ○ぬでこす堰

万 伊香保ろのやさかの井手に立ぬじの顯ろまでもさねをさねてば
 同 はつせ川ながるゝ水の瀬を早み井でこす浪の音のさやけさ
 後拾 とし毎にせくとはすれど大井川むかしの名こそ猶ながれけれ
 六 大井川井關をこえてもく水のたえずも物をおもふころかな
 清 しみ人 道 濟 しみ人 彦

○浪 なみ

- たつなみ ○水のしら浪 ○沖つ白浪 ○へつ浪 ○へ浪 ○なごろ
- 藤浪 ○浪のひる ○水浪 ○さざれ浪 ○さざ浪 ○千重の浪
- もゝ重浪 ○ぬでこす浪 ○しづまる浪 ○いそこそ浪 ○あらいそ浪 ○沖にうれ浪
- 朝はぶる ○夕はぶる ○千重浪しきに ○まごよの浪 ○しき浪 ○常世のしき浪

- 背浪 ○いざよふ浪 ○遠かた浪 ○あしべの浪 ○霞の浪 ○雲のうき浪
- あら浪 ○浪のおこ ○浪のあや ○浪のこゑ ○濱浪 ○波のさわき
- 岩さろ浪 ○浪わけ ○浪をさまる ○くだくる浪 ○浦浪 ○高浪
- 瀨浪 ○ゆく浪 ○浪のかよひぢ ○浪のほ ○いはせの浪 ○と浪
- 瀨さりの浪 ○川浪

伊勢の海の沖つ白浪花にもがつゝみて妹が家づとにせむ
 大伴のみつの濱べを打さらしよりくる浪のゆくへしらすも
 わたつみのかさしにさせる白たへの浪もてゆる淡路島山
 風による浪のいそにはうぐひすの春もえしらぬ花のみぞさく
 沖の舟手向すらしも岩なみのたてるありそにかゝる白もふ
 あま衣袖野のうらのしら浪をみぎはにたゝむ沖つ風かな
 ふきおろすいそ山もとのはなれ岩あらしをくだく浪の音かな
 へつなみのよせてはかへすをり／＼にいさごそひゆく濱びさし哉
 あかしがた今までなぎしうな原にあらはれ初る沖つしら浪

安貴王
 よみ人
 同 貫 真 雅 望 重 景
 之 之 足 見 老 樹

○潮

塩竈 しほ しほがま

- しほ道 ○汐ひの道 ○あさみつしほ ○夕しほ ○夕のひがた ○うしほ
- 入しほ ○汐ぐもり ○汐けぶり ○汐がれ ○もしほ ○からしほ
- 汐もかなひぬ ○やくしほ ○しほひ ○しほたるゝ ○汐むかふ ○もちつほ
- 汐のま ○しほづあい ○しほぶれ ○しほ木 ○しほさぬ ○みつしほ

○温泉

も

- 潮の入江 ○沖つしほ ○沖つ鹽あひ ○鹽の八百會 ○潮瀬 ○潮げたつ
- 潮の干がた ○潮ざけし ○うらしほ ○しほみち ○しほがま ○夕しほみち
- からき ○朝夕しほ ○月の出しほ ○八重の潮ぢ ○しほがま ○夕しほみち

にぎ田づに船のりせんと月までは汐もかなひぬ今はこぎてな
 わたつ海の沖の鹽あひにうがふ沫の消ぬ物からよるかたもなし
 夕づく夜しほみちくらしなには江のあしのわか葉をこゆるしらなみ
 ほり江川曉汐やさしくらん棹の音ふかくなりまさるかな
 白雲につらなる汐の八百會も渡ればわたる道はありけり
 からしとてわざないとひそ大王の鹽やくあまの名をしおもは
 鹽屋だにまれなる浦のよそめにはけぶりの末もさびしかりげり

額田王
 よみ人
 西 景 廣 千 眞
 行 樹 海 陸 淵

後拾

- いでゆ ○御ゆ ○わきいづる ○いづる湯 ○湯げた ○かひのみゆる
- はしりゆ ○早きしるし ○わきがへる ○病やむべき ○わくがごと ○あつみ
- たえずわく ○わく ○温泉神社 ○おりたつ ○あむ ○そゝく

いづる湯のわくにかゝれる白糸はくる人たえぬ物にぞ有ける
 めづらしく御幸を三輪の神ならばしるしありまの出湯なるべし
 はしり湯の神とはうべもいひけらし早きしるしのあればなりけり
 病人のわきていもてふみくま野の出湯や神の心なるらむ

重 之
 賢 賢
 鎌倉右
 永 章

おりたちてあむ薬湯に老人の心さへにぞ若がへりける

露 滿

○國 くに

- 皇大御國 ○すめら御國 ○すめ國 ○みくに ○くにの秀 ○天つ國
- 國の常立の神 ○國のしつめ ○國のかため ○國かた ○くにのまほら ○神の御國
- をす國 ○御けつ國 ○大倭の國 ○うらやすくに ○くぬちこさく ○こま玉の幸はふ國
- こま玉の助くる國 ○さやぎなきくに ○やまごの國 ○水穗の國 ○あし原の水穗國
- あし原の中つ國 ○日高見の國 ○常世の浪よる國 ○斬首のきこゑぬ國 ○御心を廣田の國
- 御心を長田の國 ○いく國の長映の國 ○大八島國 ○やまご島根 ○うら安の國
- 秋つしま ○豊秋つ島 ○たけち國原 ○國原 ○國もせに ○國さめる
- やすくに ○玉垣の内つ國 ○細矛千足國 ○しわのぼる秀眞國 ○定みつ倭の國
- 神隨言舉せぬ國 ○神隱しひ言せぬ國 ○うこなき國 ○玉矛の道ある國 ○國中 ○もさつ國
- 天地のかためし國 ○國のまもり ○このくに ○敷島の倭 ○あつまの國 ○國の風
- 國見をすれば ○國のまほら ○人のくに ○さつくに ○つくしの國 ○大君のしきます國
- いづる日の高見の國 ○このくに ○人のくに ○さつくに ○しりへの國
- ひなの國 ○うつし國 ○國のまほら ○あつまの國 ○つくしの國
- 四方の國 ○常世の國 ○根の國 ○底の國 ○よもづくに ○しりへの國

記 万 同 古

やまとは國のまほらまたまなづく青垣山ごもれる倭しうるはし
いざ子ともたはわざなせそ天地のかためし國ぞやまとしま根は
安見しゝわが大君の御食國は倭もこもおなじとぞおもふ
久かたの天よりおろす玉矛の道ある國ぞいまのわがくに

倭 建 命
仲 麿 呂
大 伴 卿
太 上 天 皇

續千 代 月 清

わが君のやまと島根をいつる日はもころしまでも仰がざらめや
千年とも御代をばわかじしき島や倭島根しうごきなければ
わか國は天照神の末なれば日のもとよしもいふにぞありける
なり出しむかしながらのわが國も神代は遠くなりけるかな
うごくべき時しあらめや天地の神のよざせるすめら御國は
おろかにも千代萬世といはふ哉こゝはとこ世のやまと島根を
汐沫のなれる國すら治れりうへ大八島なみたゝめやは
あしすげを神のうゑしや萬代にさかゆく國の根ざしなりけん
岩戸あけて天てらす日のもとつ世をあふがぬ國のあらばこそあらめ
天下國は多けど神ろぎのうみなしませる大やしまくに

○都 みやこ

- みささ ○都のうち ○大宮所 ○みやこ路 ○都の大路
- みやこのかた ○みやこべ ○みやこ人 ○みやこのてぶり ○みやこのつぎ
- みるきみやこ ○國のみやこ ○山遠き都 ○玉のみやこ ○九重のみやこ
- 花のみやこ ○月のみやこ ○玉しきのみやこ ○玉しきの平のみやこ ○内日さすみやこ
- 久かたのみやこ ○みやこのそら ○みやこの四方 ○みやこのさかひ ○みやこさなりぬ
- 大宮ころ ○しきます都 ○かばるべからぬ

万

青によしならの都はさく花のかをるが如くいまさかりなり

小 野 老

大君は神にしませば赤駒のはらばふ田居をみやことなしつ
大君は神にしませば水鳥のすだくみやこを都とならしつ
あら野々に里はあれども大君の敷ます時はみやことなりぬ
石上ふるきみやこを来てみればむかしかざしと花咲にけり
いやでりの神の御代より天地とかはるべからぬおふみや所
萬代も平安と定めおきつらん此みやこもそ大宮どころ
よほろゝがみつぎはこぶとみやこべにさわぐ御代こそしづけかりけれ
御心を平の宮と定めてし神のみやこはとこしきろかも
國々をその國人にまもらせて君は平のみやこにぞます

○古都 故宮

ふるきみやこ

- あれたるみやこ ○たちかばりぬる ○あるらくをしも ○あれにけるかも ○見ればかなしも
- いにしへ ○むかしへ ○むかしながら ○あれにした ○世の中を常なき物
- しのぶ ○ふる宮 ○猶玉しきの ○しらざりし昔 ○むかしこふらん

いにしへの人にわれあれやさし浪のふるき都を見ればかなしも
さし浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな
さし波や國つみ神のうらさびてふるきみやこに月ひとりすむ
あすか川これやむかしのみかは水かはればかはる世にこそ有けれ
ふる里のならの都をきてみれば鹿のふしとあれにけるかな

安麻呂
よみ人
金村
よみ人
譽正
景樹
芳久
重威
正主

○禁中 大内 大宮

おほうち おほみや

- 雲の上 ○くもぬ ○雲ぬの庭 ○九重のこのへ ○こゝのかさね
- かしこ所 ○宮柱太しく ○みづの御あらか ○下津岩根に ○ひのみかど
- のこづくり ○柴の庭 ○清く涼しきうてな ○九重の庭 ○中の重
- おほみかど ○そまもの大御門 ○かげさもの大御門 ○日のたての大御門 ○日のよこの大御門
- 外の重 ○近きまもり ○萩の戸 ○梨つぼ ○ふぢつぼ
- 大宮人のありかよふ ○大宮人の朝まわり ○天の下しるしめす宮 ○天の御あらか ○かたみくら
- きりつぼ ○うめつぼ ○みそのふ ○みかきもり ○みかばみづ
- 天つ高御座 ○たかどの ○日のみや ○眞木さく日のみや ○朝日の日でる宮
- みかきの竹 ○衛士のだく火 ○御はしの櫓 ○御はしの櫓 ○うてなの竹
- 夕日の日でる宮 ○夕日の日ぐる宮 ○朝日のたゝます宮 ○あまつ宮 ○玉のみはし
- 玉のみそぎり ○大内山 ○もゝしき ○神の大みや ○もゝしきの大宮 ○いさもかしこし
- 秋のみや ○よるのおさゝ ○わたりごの ○いはひをるがむ ○をるがみまつる
- かしこかれども ○ありがよひつかへ奉る ○玉しきのみや ○はこやの山 ○霞のほら
- 伴のみやつこ ○殿もりの朝清めする ○つかへまつらん ○玉しき平のみや ○天つみや
- もゝしきの大宮人 ○もまのつかさ ○づかさく ○長つぼれ

天地と相さかえんと大宮をつかへまつれば尊くうれしき
いづみ川ゆくせの水のたえばこそ大宮所うつろひゆかめ
すめろぎの神のみかどをかしこみとさもらふ時にあへる君かも

巨勢朝臣
よみ人
しれず
同

神代よりよしの宮にありがよひ高しらせるは山川をよみ
山川のおとにのみきくもよしきをみをはやながら見るよしもがな
萩の戸の花の下なるみかは水千年の秋のがげぞうつれる
高御座雲の幌をかぐとてのぼるみはしのかひもあるかな
百しきの大宮所あふぐにも千木高しれる神代をぞ思ふ
雲の上を雲のうへより望みればふじより高し大内の山
大宮をめぐるみかはの水なれば月日のかげもよどむべら也

赤 人
伊 勢
後 京 極
入 道 前 大 政
菫 蹊
春 滿
景 樹

○故郷

ふるさと

- すみすてしやご ○こしふる里 ○ふりにし里 ○ふるさこ人 ○むかしわすれぬ ○住けん人
- しのふ草 ○軒のまつがえ ○あれし軒端 ○あれにけり ○人ふるすさこ ○ふるき都
- 古きみかき ○むかしながら ○むかしみし松 ○むかしの友 ○草のふるさこ ○ふりのこる
- あれはてゝ ○おもかけばかり ○昔がたりの松風 ○むかしをしのぶ ○むかしの夢 ○浅ぢふ
- むぐらふ ○八重藤

浅ぢ原つばらくにものおもへばふりにし里しおもほゆるかも
わすれ草わが紐につく藤原のふりにしさとをわすれぬがため
たれみよと花さけるらん白雲のたつ野とはやくなりしものを
ひとりのみながめてとしをふる里のあれたるさまをいかにみるらん
むかしみし松の梢はそれながらむぐらの門をさしてけるかな

旅 人
同
よみ人
しらす
敦實親王
辨

なき人のあとをだにとて来てみればあらぬ里にもなりにけるかな
ふる里の浅ぢが原はあれにしを猶かれのこるむしのこゑかな
ふる里はなべて木深くなりけり今も葉守の神はますらん
きてみれば松さへくちてふる里はあらしの音ものこらざりけり

慶 退
文 清
依 平
景 樹

○水郷

川べの里

- 河風 ○河おさ ○舟人 ○みぎは ○よる浪 ○打まぢかく
- 川よご ○川はし ○柴ばし ○橋 ○里入 ○よる瀬
- 入江 ○蟹のぬる ○つり舟 ○川ぞひの里 ○川ぞひ柳 ○柴つむ舟
- いざよふ浪 ○川づらの里 ○川つらのやご ○川のべ

朝床にきけば遙けしいづみ川朝こぎしつゝうたふ舟人
久かたの中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる
はるゝ夜の星か川べのほたるかもわがすむ方のあまのたく火か
朝ぼらけ水のけぶりの末はれてみとりみえゆくなみのつぶらえ
おしてるやほり江の水に住鳥のなにはみやこの跡ぞのこれる

よみ人
しらす
伊 勢
業 平
利 和
千 隆

○郡

こをり

- 國のこほり ○四方のこほり ○あまたの郡 ○いくこほり ○ひなのこほり ○こほりのみつぞ
- こほりのつかさ

和泉なる日根の郡のねもすに戀てぞくらす君がしるらん

よみ人
しらす

同 新六 夫

君がためいのちかひへぞわれはゆくつるの郡のよはひうるなり
長門なる阿武の郡の柚いたはもろこし人もすさめざりけり
秋の羽のすがたの郡うごきなし國つもろ神守りをさめて
天下もたかなる世に住たみはいづくもやすの郡とおもふ
天とぶやつるの郡にもく人は世を長ちはの神も守らむ

滋 光 定 千
春 俊 家 庵 隆

○里

さと

- なちの村里 ○里のしるべ ○里のかきれ ○里はあれて ○里の子 ○里遠からぬ
- わが里 ○里なれぬ ○ささわ ○ふもとの里 ○番野の里 ○關のべの里
- むかひの里 ○山里 ○山さほの里 ○山のべの里 ○田つらの里 ○いく里
- 河づらの里 ○山もとの里 ○あまのすむ里 ○炭やく里 ○畑やく里 ○里の中うち
- ささひたる ○外山の里 ○千里 ○里の一むら ○たがすむ里 ○里つゞき
- 里ばなれ ○里をあまた ○里をはかれず ○あなたどの里 ○たが里 ○人里
- いかなる里 ○千里のはか ○尾上の里 ○末くむ里 ○山下里 ○野里
- は山のさと

万 古 同 金 代

とぶ鳥の飛鳥の里をおきていなみ君があたりはみえずかもあらん
いさこゝにわが世はへなんすがはらやふしみのさとのあれまくもをし
山里はものゝさびしきことこそあれ世のうきよりは住よかりけり
くもりなきとよのあかりを近江なる朝日の里は光さしそぶ
たかくらの山の麓の里なればつみおく稻のかずもしられず

持統天皇
よみ人
しらす
同 教 正
光 家

○村

むら

- むかひのむら ○むら／＼みゆる ○遠の一村 ○里の一村 ○入江のむら ○江のむら
- 村のもろ人 ○ひこむら ○そなたのむら ○むらのけぶる ○一村けぶる ○おのしづや

しめゆひしをりかけ垣もかりそめの里すみばかりゆかしきはなし
たから田の千代田といひし大江戸のみ田のみ寶千代そさかゆる
月をまつたびねの床のさらの葉にあらし吹也さらしなの里

守 豊 景
一 啓 樹

万 千 玉

○市

いち

- 朝市 ○市路 ○山もとの市 ○東の市 ○西の市 ○あき人
- 市にたつ ○うる ○かふ ○朝たつ ○里の市 ○いち人
- 市女 ○市のかりや ○さわぐ市人 ○かへる ○かふる ○さばぐ
- いそぐ ○おも荷 ○つぎふ市人 ○市さよむ ○市姫の神 ○世わたるわざ
- 所せきまで ○くるればかへる

とく來ても見てましもものを山城の高槻の村ちりにけるかも
天地のきはみもしらぬ御代なれば雲田の村の稻をこそつけ
八隅するわが大君の御代にこそ酒井のむらの水もすみけれ
たもたひに雲ぞ一むらかゝりけるにぎはふ里のけぶり成らん
世々をへてたれか住らんくれ竹のふしみの里の竹のむらどち

黒 鏡 匡 足 土
人 兼 房 根 滿

万

東の市の殖木の木たるまであはぬ君うべわれこひにけり

門 部 王

焼つべにわかゆきしかばするがなる阿部の市路にあひしくらいも
 戀をのみしかまの市にたつ民もたへぬおもひに身をやかへてん
 市ひめの神のいがきのいかなればあきなひものに千代をつむらん
 辰の市やくるれば人のかげもなしうるまの清水月はそめども
 たいにもく人こそなけれ東の市のうゑ木の花にほふころ
 朝なくいづるあすかの市人はきのふをけふにかふる也けり
 いにしへをしりびがちにもすぐすかなしかまの市にうる事をなみ

老 俊 爲 千 景 知 有
 成 頼 足 紀 樹 功
 人 人 人 人 人 人 人

○山家 山居 山館 山亭 やまのいほ

- 松の戸 ○松の門 ○竹の戸 ○竹の門 ○柴の戸
- つま木のけぶり ○よそめさびしき ○よそながらおもひし ○世のうき目みえぬ ○人めかるゝ
- 柴の門 ○山のいほり ○山のいほり ○みれのいほり ○みれのいほり
- をのへのさこ ○眞柴をりしく ○かこひもしめぬ ○そのふの山 ○隣まごほ
- 山ずみ ○山住の庵 ○身をかくす ○かくれが ○山かげの庵
- 山かたづけの庵 ○うしろの山 ○遠山畑の庵 ○瀧のおさ ○外山のさこ
- 山の下庵 ○すむ山 ○谷の戸 ○柴垣 ○杉のいほ
- 山のいほ ○山にても ○み山のいほ ○かけひの水 ○山の井
- 柴の庵 ○萱垣 ○谷ちかき ○草のいほ ○世はなれて ○柴のあみ戸
- 竹のばしら ○いはほの中 ○草のいほ ○眞柴の軒 ○軒のあみ戸
- 苔のかよひぢ ○山さこ ○前の柴橋 ○軒ばの松 ○軒の松風

○さびしきになれて ○すみつゝ ○軒ばを下る山人 ○さふ人もなし ○しつかなる
 ○そごもの山 ○そごもの谷 ○柴の袖かき ○雲の戸さし ○竹のあみ戸
 ○しづけし ○さびしき ○をのゝおさ ○ましらなく ○のがれすむ
 ○柴のかこひ ○山水 ○山下水 ○軒ばの雲 ○草の戸さし
 ○かくれがば ○かくれても ○外山の里 ○あらし ○しのぶ草
 ○枕の山 ○枕のみれ ○枕の谷 ○片山さこ ○松のはしら

青丹よしならの山なる黒木もてつくれる宿はませどあかぬかも
 白雲の絶すたなびく峯にだにすめば住ぬる世にこそ有けれ
 横の戸をみ山おろしにたゝかれてとふにつけてもぬるゝ袖かな
 山里の柴をりゝにたつけぶり人まれなりとそらにしる哉
 たれ住てあはれしるらん山里の雨ふりすさぶ夕ぐれのそら
 立出てつま木をりこしかた岡のふかき山路となりけるかな
 たきの音松の嵐もなれぬれば打ぬるほどの夢はみせけり
 なにもゑに山にはすむと人とはいこたへむまでの心ともがな
 なかむれば夕ぐれ深くなりけり外山のおくの松のむら立
 さびしさは住よからんのあらましも心にたがふ山のおくかな
 あらしふくまつの下柴引むすびいほとなしてもとしはへにけり
 おのづから山べにそめば世の中をいとふかすにもいりぬべき哉

聖 武 帝
 惟 喬 親 王
 俊 成
 肥 後
 西 行
 寂 禪
 家 隆
 景 樹
 久 秋
 建 正
 東 溟
 尊 孫

軒ちかき松のもとつ葉をりくべてけぶりも庵のよそにもとめじ
 信樂の外山の夜の雨の音を都の人にきかせてしかな

芳樹
 眞淵

○田家 田づらのいほ

- 山田ものいほ
- かりいほ
- わが門のいな葉
- 荇田のいほ
- なるこひく
- いなむしろ
- いなしきの伏や
- 小田のいほ
- あしのまるや
- 里わの小田
- 外面の小田
- あれ田の菴
- もりすてしいほ
- 小田もる庵
- むらすめ
- 門田
- しぎの羽がき
- 山田のいほ
- 落穂ひろふ
- 田中のいほ
- 呻つたふみち
- 門田の末
- もる田
- さゝのいほ
- 田面のいほ
- 垣根の小田
- いなぶきのいほ
- 門田の面
- もるかりいほ
- 稲葉のかりいほ

万 同 詞 千 勅
 わが門にもる田をみれば佐保のうちの秋萩薄おもほゆるかも
 秋田かるかりほをつくりわがをれば衣手寒し露ぞおきにける
 ひたぶるに山田もる身となりぬればわれのみ人をおどろかすかな
 小山田のいほにたくひのありなしに立けぶりもや雲となるらん
 時あれば秋の雲なすいなむしろかりしく民のたゝぬ日ぞなき
 とほしろに田づらのいほの夕けぶり御代もたけなるさまもみえけり
 ながめふる田中のふせや風たえてのきばをめぐる夕けぶり哉
 露ちらす山田のいな葉風こえて軒ばにしめる朝けぶりかな
 田ぢからのもりけむ御代のおもかげも民のかまどになつけぶりかな

よみ人
 しらす
 同
 熊
 盛
 前
 關
 白
 美
 龍
 伴
 之
 常

○家屋 宿庵 いへ や やど いほ

酔つたひ道一筋はありながらもきままれなる小田のいほかな

信敬

- いもが家
- 家おして
- つくる家
- しきたへの家
- めぐりの垣
- 花のやど
- 宿のまつ
- ふりにしやど
- こや
- 柴のかりや
- すゞのしのや
- 浦のこまや
- 杉や
- 横のかりや
- すゞのかりや
- わらのかりいほ
- かりいほ
- みれのいほ
- 家をま
- 家人
- 家うつり
- わがやど
- 住む家
- やどがる
- あれたる宿
- 宿はあれて
- こやのしのや
- 旅やかた
- 柴や
- あづまのまや
- あしびたくや
- つまや
- もや
- 草のいほ
- かりほの庵
- 蓬がおくのいほ
- 家をい
- 家の犬
- 家をいつる
- よもぎがやど
- すみか
- やどもせ
- 此やど
- むぐらのやど
- かばらや
- かりやかた
- あばらや
- あしのや
- あつまのまや
- 川べにつくるや
- 枕づくつまや
- そめやかた
- こけの下いほ
- すゞのかりいほ
- 草のかりいほ
- 草のかりいほ
- 家のあるト
- 家につたふる
- 家つこ
- 岡へのやど
- かりれのやど
- あしぶきの宿
- 浅ぢのやど
- 蓮生のやど
- 横のいたや
- 菅やかた
- あしのや
- かりや
- はにふの小や
- ひらや
- かりや
- 眞柴のいほ
- 谷ぞこのいほ
- かげのいほ
- いへ
- にぎはふ家
- つくる家
- 家のはひり
- たびの中やど
- しら雲のやど
- さばれぬやど
- 月すむやど
- 横のふせや
- 磯や
- 磯や
- あしてや
- かばや
- にひや
- 民のいほり
- 遠山ばたの庵
- 杉の葉かげのいほ
- ひさついで

○つたのいほ ○つたふけるいほ ○さゝのいほ ○尾花がいほ ○尾花かりふくいほ
 ○柴のいほ ○いほむすぶ ○谷のいほ ○み山のいほ ○田づらのいほ ○松のいほ
 ○杉のいほ ○かりのいほ ○しづがいほ ○下いほ ○むすぶ庵 ○つくるいほ
 ○黒木もて作れる庵 ○露のかりいほ ○かりそめの庵 ○さまもるいほ ○つくれる庵
 ○すむ ○あるゝ ○住なるゝ ○つくる

万 秋の野のみくさかりぶきやどれりし宇治の都のかりはしおもほゆ
 わが庵は都のたつみしかそすむよをうち山と人はいふなり
 今とはとてつま木こるべき宿の松千代をば君に猶いのるかな
 あれはてゝ風もさはらぬ苔の庵にわれはなくとも露はもりけん
 世をそむく門出はしたり大原やせりふの里の草のいほりに
 世にしげきことの葉草を吹分て家の風をもつたへてしがな
 天下平けき世はほどくをさむる家の内もたのし那
 かぐつちのあらびはいつとなきものをたれかたくみに家つくるらん
 ひた工ほめて作れる真木柱立し心はうごかさまし
 真 廣 高 春 後 徳 大 寺
 淵 足 尙 滿 尊 成 王

○閨 ねや
 ○ねやのあれま ○ねやのひま ○蓬がねや ○あれがねや ○ねやの月 ○ねやのさむしろ
 ○ねやの埋火 ○閨のひこりね ○閨のいたま ○閨ふかき ○ねや寒み ○さびしきねや
 千 夜もすがら物おもふ頃は明やらで閨のひまさへつれなかりけり 後 惠

○軒 ねや
 まどの梅軒の橋かをる夜はねやのあれまの風もうとます 春 満

勅 おもひかね詠れば又夕日さす軒ばの岡の松もうらめし
 老らくもしらぬ山路とたのみしを軒ばの小松ふりにけるかな
 まつ風のなれぬる音もたむむ夜はまどつつ軒の雨ぞことゝふ
 住まざる軒ばの山のまつ風に月もうき世をおもひすつらん
 かしのみの軒ばにおつる音はしてさびしくゝるゝ山かけのいほ
 寛 秀 廣 清 家
 光 雄 成 風 隆

○庭 砌園 には みぎり その
 ○庭つくり ○すそひく庭 ○白洲の庭 ○月の庭 ○山かげの庭 ○庭の面
 ○庭もせ ○庭の松 ○苔の庭 ○庭草 ○庭のまさごぢ ○庭の木かけ
 ○むらさきの庭 ○玉しきの庭 ○庭田 ○庭の竹 ○庭のまきごぢ ○庭の浅木
 ○浅ちが庭 ○むぐらの庭 ○はひりの庭 ○庭のうへ ○庭のたきつ瀬 ○庭の浅ちふの庭
 ○九重の庭 ○庭の眞砂 ○庭にたつ ○庭のみきり ○庭のたきつ瀬 ○庭の松
 ○庭のやり水 ○庭のたていし ○庭のいけ水 ○庭の雪 ○庭のみぎり ○庭の花 ○ゆには
 万 おもふ人はこんとしりせば八重葎はひたる庭に玉しかましを
 同 をとめらが玉もすそひく此庭に秋風ふきて玉はちりつゝ
 ふみ人
 しらす
 安宿王

○垣 籬

かき まがき

よさの海の春のうら／＼見わたせば笈やの庭にわかめかりほす
人こそはとひもこざらめとぶとりの翹やすむる庭のまつが枝
おのづから千代をしめたるみぎりには所えがほにみゆるまつかな
あれしやどの庭のよもぎふむぐらふのしげきかたをや野べとわくべき
大 千 春 春 春
輔 門 陸 滿

○竹垣 ○いおき ○玉がき ○あけの玉がき ○みづがき ○かき根

○むぐらの垣 ○外重のかき ○八重のくみがき ○小垣 ○ひめがき ○袖がき

○菊の垣 ○うばらがき ○櫛垣 ○御垣 ○中垣 ○ませがき

○あら垣 ○まがき ○松がき ○くず垣 ○かやがき ○くえがき

○かきほ ○あし垣 ○すゝきがき ○木あら垣 ○さゝ垣 ○小笹が垣

○卯花がき ○八重がき ○八重の青ふしがき ○かきれの山 ○苗代がき ○あらき組垣

○關のあら垣 ○垣つ ○卯月垣 ○ひま ○あめる ○あばらなる

○かやがき ○しのがき ○くものまがき ○さしのまがき ○すみのまがき ○ふるきかきれ

○玉のまがき ○花のまがき ○古さまがき ○蓬のまがき ○まがきの山 ○まがきのひま

○まがきの花 ○露のまがき ○竹のまがき ○まがきの野へ ○まがきの草 ○まがきの木

○まがきのひま ○あばらまがき ○かこら ○へだつ ○めぐらす ○ゆふ

○あみ目 ○きりのまがき

古 万 あらたまのきくが竹垣あみ目もいもしみえなばわれこひめやも 同 よみ人
人しれぬおもひやなぞとあし垣の間近けれどもあふよしのなき 同 しれず

夫 代 秋の月白くぞてれる海原の青ふし垣もいろかふるまで 同 好 患
しげかりし蓬が垣のへだてにもさはらぬものは冬にざりける 道 男
つたかづら心おそくぞかゝりけるまがきやうつ山路なるらむ 春 門
くれ竹のをりかけ垣の奥深き田中の里ぞ世はやすげなる 春 樹
いはほよりまづぬれそめて山里のかき根さびしくそゝぐ雨かな 最
かこはねどかくれ住山のかひなれや立雲きをまがきにはして 春 滿

○柱

はしら

○宮ばしら ○大宮ばしら ○真木のはしら ○丸木のはしら ○なごのみはしら ○天のみはしら

○國のみばしら ○はしらはふさく ○大木のはしら ○杉のはしら ○ふさしきたて ○ほめてつくる

万 真木柱はめてつくれる殿のごといませ母としおもかはりせず 首 麻 呂
國の中になてしたためしぞたてゝみよなど御柱の人になるらむ 春 海

○戸 と

○くるゝ戸 ○朝戸出 ○夜戸出 ○竹の戸 ○草の戸 ○真木の戸

○松の戸 ○櫻戸 ○山櫻戸 ○杉の戸 ○柴の戸 ○つま戸

○里の戸 ○やり戸 ○あみ戸 ○竹のあみ戸 ○杉のあみ戸 ○柴のあみ戸

○しのゝあみ戸 ○萩の戸 ○菊の戸 ○草の月さし ○松の月さし ○圍のいた戸

○板やすゝ戸 ○黒戸 ○關の戸 ○天の戸 ○まごの戸 ○月さし

万 わぎも子が夜戸出のすがたみてしより心ぞらなり土はふめども 人 麻 呂

新

君まつとねやへもいらぬ槿の戸にいたくなふけそ山のはの月
柴の戸をたくくあらしもなれく音せぬよひはさびしかりけり
住人もおもひたえたる柴の戸にたれまつ風のそらに吹らむ

式子内親王
永章
魯道

窓

まど

- 窓さづる草 ○窓しづかなる ○窓おし明る ○まどうつ雨 ○窓ちかき ○まなびの窓
- 山まど ○まどこし ○まどふかき ○窓のうち ○まどめぬまど ○霞のまど
- 夕のまど ○杉のまど ○おろさぬまど ○窓の竹 ○窓の梅 ○まどの雨
- まどの雪 ○まどのまへ ○まどのさもし火 ○まどのほたる ○まどの月かげ ○まどの夕かげ
- あらしの窓 ○杉生のまど ○東のまど ○南のまど ○窓より西 ○北まど
- さづる ○さす ○まどの時雨 ○まどのあられ ○まどのゆき ○うつる日影
- たくくあらし ○窓吹入るかぜ ○あくる ○おろす

万 夫

まどこしに月さし入てあし引のあらし吹夜は君をしぞおもふ
秋寒きあらしのまどは明やらでねざめに見よとすめる月哉
めづらしとみるべき山もあらねどもまどを心のゆく方にして
心ある人とこそしれくれ竹の世をへだてたるまどのともし火
まど近き竹を心にならひなばすぐなりけりと人のいふらむ
おこたりの夢ををりくさまたげぬ文よむまどの竹の下かせ
かくてこそのがれてすめるかひもあれまど静なる雨の夕ぐれ

よみ人
しらす
爲相
常操
直樹
忠之
魯重
春夫

門

かど

- かなど ○小金門 ○柳の門 ○竹あむ門 ○むしろの門 ○わが門
- 妹が門 ○杉の門 ○松の門 ○柴の門 ○むぐらか門 ○老せぬかど
- よもぎの門 ○かためぬ門 ○かごもるいぬ ○門たがへ ○門まもり ○御門
- 大御門 ○いは門 ○門のはひり ○天の岩門 ○をさむる門 ○杉たてる門
- さす ○たつる ○さづる

万 古 新

妹が門もき過かねて草むすぶ風ふきとくな又かへりこん
わが庵はみわの山本こひしくばとぶらひ來ませ杉たてる門
おもへどもいはで月日は杉の門さすがにいか忍びはつべき
門の戸をたくくましますらの手すさびにおどろかさるゝ折も有けり
世にはまだいでじとおもふわが門をたれしてとちし八重葎かな
世をすてゝ人目をいとふ柴の戸をとづればたく軒の松かせ

よみ人
しらす
同定
忠近
汎引
千直
政直

隣

となり

- ちかごなり ○隣のまつ ○隣の軒 ○ならびすむ ○隣のかべ ○中がき
- 隣へつたふ道 ○垣こし ○窓こし ○隣たえたる ○軒つゞき ○四の隣
- 隣をかふる ○さなりぬぬ ○さなりのふえ ○春の隣 ○秋の隣 ○まがきのへだて
- あしがきの間近き ○あし垣のへだて

堀 夫

かきこしにはのめくだにもあるものをねたくも梅のあるじなる哉
となりぬぬ畑のかりやに明す夜はしかあはれなる物にぞ有ける

俊頼
西行

山ざとは心へだてぬ隣さへましらなくなる峯ごしにして
 よそめのみとりつくろひて中垣は心のほかのへだて也けり
 たへてきくとなりもありとさびしさをなぐさめてけり軒の松風
 となりにもきこえぐるしき世のさがをよしやへだつるゆしの中垣

秀雄 伴雄 常岳 春滿

○閑居 閑中 幽居 幽栖 かくれが

- 世のかくれが ○こはれぬ宿 ○世の外宿 ○うき世の外 ○世をそむく ○世をいさふ
- 庭の外なる ○よもぎふ ○むくらふ ○浅ぢふ ○庭の浅ぢふ ○庭のよもぎ
- 八重むぐら ○なれてさびしき○庭のこけ ○庭を蓬にまかす○有さだにしられぬ○風のみ音づるゝ
- 門の柳 ○草のいほ ○葉の戸 ○葉の門 ○住わぶる ○世をさくる
- すゞのしのや ○友なきやど ○にはのあまたゆる ○わびしらに ○人はこで
- 人さばぬ ○はらはぬ庭 ○物にまされぬ ○草の戸さし ○人目かるゝ庭 ○松のあらし
- 庭にたゞずむ鹿○つれく ○世の外なれば ○浅ぢがおく ○過る月日もしらぬ
- こけのかよひぢ○よもぎふ ○世をすてゝ ○なれてもさびし○いさばしげなる○なかもむる
- さびしき ○しづけし

古拾千同新
 今更にとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ
 いかでかは尋きつらんよもぎふの人もかよはぬわが宿の道
 さびしさにうき世をかへてしのばすばひとりきくべき松の風かな
 岩そゞぐ水より外にきこえねは心ひとつにすましてそすむ
 都より雲の八重たつおく山の横川の水はすみよかるらん

よみ人 同 寂蓮 守覺法親王 天曆御製

世の中をへだてがほなる中垣も心のおくはむなしかりけり
 いかばかりふかき心のおくなれば山かげよりもしづけかるらむ
 市人のさわぐ中にも住なれつしづけきものは心なりけり
 心をはすますたよりと草のいほはふる雨さへも音しつかなり
 ことなくてひとりおきふすわが宿にままれるものは月日也けり
 かた山の竹の林のおくしめて世をこそ月におもひかへけれ
 かくれ家は夕かほ棚の心ちしてさもやすらかに身のなれる哉

宣門 景樹 同 千尋 光輔 廣名 有功 有卿

○寺 古寺 蕭寺 たら

- 墨ぞめの袖 ○かはらの松 ○ふみよむこゑ ○ふくぼら ○のりの林 ○みてら
- 山寺 ○野寺 ○ふる寺 ○大寺 ○かれのこゑ ○あか井
- 法のごもし火 ○あか棚の花 ○麓寺 ○峰なる寺 ○尾上の寺 ○寺ふりて
- 法のごゑ ○磯山寺 ○野寺のかれ ○あかのみつ ○しきみつむ ○柔つみ水くみ
- 法の師 ○山ぶし ○法の庭 ○遠山寺

新堀代
 世をそむく所とかきくおく山はものおもふにぞいるべかりける
 谷じかみ跡だにみえぬ山寺はかけひの水のゆくにてぞしる
 昔おもふ高野の山のかき夜にあかつき遠くすめる月かげ
 名にたてる初瀬高野のふる寺は佛さびてもみえわたる哉
 わかつきは心にかゝるくもゝなし高野のおくの山のはの月

道命 顯仲 知家 高尙 魯道

中へに立かくしたる一村の松ぞ野寺のしるべなりける
よそにきておもひ入こそあわれなれみ山の寺の夕暮のかね

景 樹
真 淵

○古戦場

万

さゝ浪の國つみ神のうらさびてあれたる都みればかなしも
かさぎ山あすのしぐれを先たてよみだるよ雲に嵐吹なり
いな村の汐を干しめてわたつみの神もみかたとなりける哉
をけはざまむらがる雲のいづこより山裂とほり神はおちけん
ものよふの命を露とあらそひしあら野の末に秋風ぞふく
ものよふの矢にはのあとの山河に打橋わたしかよふ御代哉

黒 諸 重 千 依 廣
人 平 威 廣 平 海

○雑之部中

○草 くさ

- | | | | | | |
|---------|--------|--------|--------|----------|---------|
| ○ささ草 | ○草かけ | ○ゆふかけ草 | ○草たかみ | ○山草 | ○山のかけ草 |
| ○野草 | ○草の原 | ○ふる草 | ○にひ草 | ○おほひ草 | ○手向草 |
| ○涙の下草 | ○わか草 | ○はつ草 | ○みなし草 | ○草根 | ○眞草 |
| ○みま草 | ○野べの草 | ○草ふけ野 | ○草むら | ○草村深き | ○草村しげき |
| ○草のたもこ | ○草かづら | ○草のゆかり | ○草むすぶ | ○草の下紐 | ○民の草葉 |
| ○かり草 | ○ふっ草 | ○草のこ | ○草のたもこ | ○くさしげき | ○草葉のつゆ |
| ○小草 | ○はつ草 | ○雪の下草 | ○根なし草 | ○くさのもろむき | ○まぐさ |
| ○あら草 | ○枯草 | ○にこ草 | ○水かけ草 | ○いつまで草 | ○はる草 |
| ○夏草 | ○秋草 | ○冬草 | ○庭草 | ○八千草 | ○もも草 |
| ○千草 | ○軒の下草 | ○草葉の床 | ○谷のかけ草 | ○谷岡の小草 | ○おごろの草葉 |
| ○つれなし草 | ○草のかれふ | ○戀草 | ○草むすぶ | ○かやぬひめの神 | ○ばせを葉 |
| ○えのこ草 | ○つくくし | ○かまみ草 | ○かたばみ草 | ○芝草 | ○しば |
| ○からすあふぎ | ○忍草 | ○忘草 | ○つゞら | ○紫 | ○麻 |
| ○日かげ草 | ○すゞ | ○みすゞ | ○くれなゐ | ○木賊 | ○もも世草 |

- すまひ草 ○さよめ ○たて ○はよこ ○さしも草 ○からすあふぎ
- 天のおし草 ○駒つなぎ ○かくも草 ○くたに ○さいたづま ○をばぎ
- かたばみ ○し草 ○浮草 ○うき藻 ○藻 ○蘆
- 菅 ○名のりて ○みくり ○若和布 ○め
- 澤湯 ○おほぬ草 ○あざゝ ○みくさ ○しりくさ ○水葱
- 小なぎ ○ひし ○藻しほ草 ○みづ草

わがせこはかりいほつくらすかやなくば小松が下の草をからさね
 わが門の板井のくみさ里遠み人しくまねばみ草生にけり
 ふる道にわれやまどはむいにしへの野中の草はしげりあひにけり
 種なくてなきもの草はおひにけりまくてふことはあらじとぞ思ふ
 浅茅生る野べやかるらん山がつの垣ほの草は色もかはらず
 み山木のかげの小草はわれなれや露しげれどしる人もなき
 夜をてらすはたるをみれば下草の朽はてし身もたのみ有けり
 おなじ野のゆかりおもへばかすならぬうけらが花もあはれ也けり
 露ばかりあはれはかけよ根なし草たれもかりなる世にすまふ身は
 植てみしやまとなでしこからまよひ葎にかはるやどのさびしさ

中皇女命
よみ人
しらす
すけみ
慶
伊勢
雄風
千隆
千隆
忠友

○芝

- 若葉の芝生 ○しばすり衣 ○しばふの床 ○芝生 ○むら芝 ○芝の

東路の芝すり衣なれにけりいく朝露にそぼちきぬらん
 芝ゐる山松かげの夕すゝみ秋をもほゆる日ぐらしのこゑ
 家の風吹からしたる芝の根はおこし所もなくなりにけり
 かすならぬ庭の芝生のうへにだに春と秋とのいろはみえけり
 ひとつついろにしげる野もせの芝生にもさすがに分し道はのこれり

重保
野宮
信實
千隆
千隆
声庵

○苔

- むすこけ ○さがりこけ ○こけのうへ ○こけの下 ○苔の戸びら ○苔のみしろ
- 苔の衣 ○苔の枕 ○苔のみづら ○苔のさむしろ ○根もいらで ○苔のかよひぢ
- あさなき苔 ○苔の下水 ○苔に跡なき ○苔のみだれ ○こけ路 ○かはらぬ色
- 苔のしとれ ○軒ばのこけ ○苔のみだれ ○いはほのこけ ○苔むす岩 ○苔のみざり
- 苔のまがき ○まつのこけ ○苔ふかき ○こけむす

跡たえて世をのがるべきみちなれか岩さへこけの衣きにけり
 ときはなるまつにかゝれるこけなれば年のを長きしるべとぞ思ふ
 山かげや軒ばの苔の下くちてかはらのうへにまつぞかたぶく
 年ふればこけのみづらをもひそへて岩のすがたを神さびにける
 よし野山たがふみならず跡ならんまだ苔うすき岩のかけみち
 わがやどの松のこかげにすむこけのみどりも深くなりにけるかな

守覚法親王
よみ人
しらす
後京極
師時
實有
景樹

さいれ石のなれるいはほにむすこけは松よりふかきみどりなりけり
山すみのまへのたなばしこけむすは世にかよふべき跡かくすらむ
有 功 卿 正

○蓬

- よもぎ
○蓬が柚 ○からよもぎ ○よもぎふ ○蓬草 ○ふるよもぎ ○蓬がもこ
○蓬のかけ ○蓬がやぎ ○門のよもぎ ○麻の中の蓬 ○蓬の窓 ○蓬生のかけ
○よもぎが關 ○蓬生あらし ○蓬の柚かた ○蓬のまろれ ○心のまゝの蓬 ○蓬が洞
○霜の蓬 ○蓬生の宿 ○庭 ○あれしみぎり ○かはらよもぎ

新 新
大 新
新六 新六
あら小田の去年のふる根の古蓬今は春べとひこばへにけり
われもふり蓬もやどに茂りにし門に音する人はたれぞも
横むくの檜原に似たるからよもぎ柚のじけみとうべもいひけり
そのかみは山路のたねときくものをかはらよもぎとたれ名付けん
好 忠
信 實
千 蔭

○律

- むぐら
○むぐらふ ○八重葎 ○むぐらばふ ○葎のやぎ ○むぐらの門 ○むぐら生て
○おほふ ○庭もせに ○あれたる宿 ○あれゆけば ○しげみおもこ ○むぐらや
○こづる ○しげる

万 同 新六
おもふ人來なんとしらは八重葎おほへる庭に玉しかましを
いかならん時にか妹をむぐらふのけがしき宿に入まさしめん
霜がれのやどのなきほの八重葎ひまなかりしは昔なりけり
よみ人
しらす
田村大嬢
光 俊

○忘草

- わすれ草
○わするゝ草 ○忘草おふる野へ ○軒ばにしげる ○きしにおふてふ ○忘草下紐につゝ
○愁わするゝ草 ○人わすれ草 ○戀わすれ草

杉たてるかひこそなけれとはれても門はむぐらにとちはてにけり
わすれ草わが下紐につけたれどしこのしこ草ことにし有けり
住の江におふとぞきゝしわすれ草人のこゝろにいかで生けむ
おもふとはいふものからにともすればわするゝ草の花にやはあらぬ
片時も見てなぐさまんむかしよりうれひわするゝ草といふ也
春はもえ秋は花さくわすれ草をりわすれぬぞ名に似ざりける
かれはてし人はわするゝ草の名をおもひたがゑてなどしのぶらむ
家 持
貫 之
よみ人
しらす
兼 輔
春 海
宜 長

○忍草

- しのぶ草
○君しのぶ草 ○昔しのぶ ○軒のしのぶ ○古き軒ばのしのぶ ○板間のしのぶ
○あれにし軒 ○園のあれま ○軒ばの草

ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞおひける
住わびてわれさへ軒のしのぶ草しのぶかたぐしげき宿哉
東やの小がやの軒の忍草しのびもあへずしげるおもひに
のがれきてわがすむ宿の軒にこそ世にはしのぶの草も生けむ
しばしとて時待ほどのかりいほに世をもしのぶの草生にけり
貞 登
周 防
親 隆
春 海
日 善

○思草 おもひぐさ

○花がもこ ○かやが下 ○霞がくれ ○霜がれの ○下もえわたる ○中々の思草
○たれしあれば

万 道のへの尾花がもとのおもひ草いまさらくになにかおもはん

よみ人
しらず

新 とへかした尾花がもとのおもひ草しをるゝ野べの露はいかにと

通 具

細 引馬野のかやが下なるおもひ草又ふるこゝろなしとしらすや

仲 實

○蔓 かづら

○玉がづら ○されがづら ○ゆふがづら ○あまかつら ○あまづら ○あまのよきづら
○正木のがづら ○いはひがづら ○谷べにはへる ○たゆる時なく ○たえず

万 玉かづら花のみ咲てならざるはたがこひならめ我戀思ふを

巨勢耶女

同 山高み谷へにはへる玉かづらたゆる時なくみむよしもがな

よみ人
しらず

後 名にしおはあふ坂山のさねかづら人にしられてくるよしもがな

三 條

六 なき名のみ立田の山のさねかづらくる人ありとたれかいひけむ

よみ人
しらず

○蘿 日かけ

○日かけのかづら ○日かけ草 ○久かたの日かけ ○天の日かけ ○さるのをがせ
○さるをかぜ ○かくる ○日かけがづらく ○おもひかけそふ ○天てらす日かけ

天地のめぐみの露はたらちねのちぶさに似たるえびかづらかな

廣 海

○おく山の日かけ○光なき谷間の日かけ○こゝろ葉

後 ときはなる日かけのかづらけふしこそ心のいろにふかくみえけれ

師 忠

新 あかねさす朝日の里の日かけ草豊のあかりのかざしなるべし

輔 親

新六 もろ人のかくる日かけの心葉に天てる神のめぐみを見る

衣 笠 内

宮人のかづらにすなる日かけ草遠つ神代もかけてしのばむ

春 海

山まつのいく代をへてか神わざにかくる日かけのかづら生けむ

千 陸

○鞭草 つい

○青つやら ○濱つやら ○くまつやら ○しげる ○くる ○はふ
○たゆる時なく ○山下つやら ○ゆふつやら ○玉つやら ○あそ山つやら ○こつやら

万 山たかみ谷へにはへる青つやらたゆる時なくあふよしもかも

よみ人
しらず

古 山がつの垣ほにはへる青つやら尋くれどもあふよしもなし

籠 義

新六 ながき日もくるすの原の青つやら末葉さしそひしげる頃かな

衣 笠 内

そばだてるいはほにはへる青つやらこゝろしき道のくるしげもなし

重 義

○藍 あゐ

○あゐばた ○山あゐ ○いろふかく ○そむる ○そむる心 ○つがれのあゐ
○こぞめの色

新六 かりおけるつがねのあゐのあまたあればあくまでそめむ色ぞしらるゝ

知 家

同 はりまなるしかまに染るあゐ畠いつあながちのこぞめをかきん

信 實

○紅 からある くれなる
染なせる心づからはあゐに出て猶あゐよりぞ濃さまさりける
管 道

○ちしほのいろ ○こそめのいろ ○ふりてのいろ ○うれつむ花 ○すみつむ花 ○紅のこそめ
○こきくれなぬ ○末つみはやす ○末つみはやす紅 ○紅のあく ○そむる
万 わがやどにからあるまきおぼしかれぬれどこりすて又もまかんとぞ思ふ 赤
同 こふる日のけながくしあればみそのふのからあゐの花の色出にけり しみ人
わが園の末つむ花の末つひにたが衣手の花をそむらん 千 隆
むらさきの根をもたづねず人心末つむ花の色につく也 契 沖

○紫 むらさき
○ふかむらさき ○紫生る野へ ○紫の心にしむ ○こむらさき ○こきむらさき ○うすむらさき
○若むらさき ○花むらさき ○匂ふむらさき ○紫の一本 ○紫のゆかり ○紫の初しほ染
○ゆかりの色 ○根ばふ ○根ぞめ ○おふる野へ ○灰さす ○位のいろ

万 むらさきの根ばふ横野の春野には君をかけつうぐひす鳴も しみ人
古 むらさきの一本もゑにむさしの草はみながらあはれとぞみる しみ人
新六 紫はなべて位の色なればこきもすきもうはぎ成けり 爲 家
むさし野の千草の秋のあはれさをこの一本にこめてけるかな 千 隆

○麥門冬 やますげ
○山菅の根もさろ ○根ながく ○山菅のやます ○根をはへて ○ながき根の

○根もころく ○根もころ妹に ○れたくのみ
万 咲花はうつろふ時ありあし引の山菅の根し長くはありけり 家 持
代 山菅の二むすひにぞしらぬる後の世までの契ありとは 定 經
ねもごろのおもひばかりは山菅の心ながさを世のつねにして 守 常

○菅 すげ
○眞菅原 ○すが原 ○眞菅 ○堀江のますげ ○小菅 ○岩小菅
○岩もこ小菅 ○菅かる澤 ○しづすげ ○岩本菅 ○しら菅 ○菅のみどり
○みかけの眞菅 ○眞菅たたく ○しのび菅 ○いづみの小菅 ○まる小菅 ○玉の小菅
○なまふ菅 ○ありま菅 ○みくまが菅 ○すが枕 ○小菅のまくら ○みしま菅
○菅のあみ笠 ○菅の根 ○青すげ ○しづやの小菅 ○れやはら小菅 ○笠にぬふ
○三島菅がさ ○すかんさ ○なにはすげ ○川菅 ○しづ小菅 ○かる
○沼田 ○澤へ ○入江 ○三笠にぬへる

万 眞玉づくおちの菅原わがからて人のからまくをしき菅原 しみ人
同 みな人のかさにぬふてふありま菅ありて後にもあはんとぞ思ふ しみ人
拾 夏草のしげみに生るまる小菅なびきてわれに心といめよ 元 眞
勅 みよし野のみくまが菅をかりにだに見ぬ物からやおもひみだれん 雅 經
夫 三島菅いまだなへなり時またばきすやなりけん三島菅笠 景 樹
みしま江におふる眞菅をには鳥は笠にもぬはでかづきぬる哉

○菰薦 こも

○若こも ○夏がり ○かりこも ○さふのすがこも ○こもまくら ○駒にかふ
 ○玉江のまこも ○若こもをかる ○かりほす ○淀の若こも ○眞こも ○みこも
 ○すこも ○ゆふ ○沼に生たる ○そよく ○澤への眞こも ○澤の若こも
 ○かる ○おふる ○しげる ○つかれもあへず ○かりにくる ○ふる江のあし
 三島江の玉江のこもをしめしよりおのがとぞ思ふいまだからねど
 山しろの淀の若こもかりにきて袖ぬれぬとはかこたざらなん
 駒にかふ澤の若こもかりにきていかでよど野のことをしりけん
 川のせのしげる眞菰の中にしもあさるくひのかくれなき哉
 うき世こそ旅のかりねのこも枕高きいやしきこゝろやすまね

○蘆葦 あし

○角くむあし ○夏かりのあし ○ながれ江のあし ○むらあし ○みだれあし ○ながれあし
 ○あしの根 ○あしのふる葉 ○川あし ○うきにはふ ○下ばふあし ○浦あし
 ○湊あし ○あしのわか穂 ○あしの穂むけの風 ○下みだれ ○あしのうら葉 ○あしまがくれ
 ○あしのにひ葉 ○あじのわか葉 ○あしの花 ○あしづゝ ○あし原 ○豊あし原
 ○ふし葉 ○あしのやへぶき ○あしのやのなだ ○あし火たく ○穂末 ○穂
 ○澤へのあし ○澤田のあし ○ふる江のあし ○あしの下根 ○あしのめ ○みどかきふし
 ○あしの花 ○しほあし ○江のあし ○入江のあし ○あし分小舟 ○下ばふ沼
 ○しをるゝ ○あしづの ○夏かり

万 家思ふといをねをすれば田づがなくあしべもみえず春の霞に
 同 おしてゐるなにはほり江のあしべにはかりやどれるか霜のふらくに
 後拾 津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれあしの八重ぶき
 六 あしづゝのおひてし時に天地と人とのしなは定りにけり
 万 には江の入江のあしぞさやぐなる下葉をかけて汐やみつらん
 同 すめぐにの御名にかゝせるあしの葉の露もあだには思ふべしやは
 拾 有 功 卿

○濱木綿 はまゆふ

○わか葉さす ○もゝへなす ○かさなるかず ○浦の濱ゆふ ○うらみかされん
 ○いくへ ○ゆふざりしてゝ

万 み熊野の浦の濱もふ百重なす心はもへどだにあはぬかも
 同 おくれにし人を思はしでの崎もふとりしてゝまたんとぞ思ふ
 拾 さしながら人の心をみくまの浦の濱もふいく重なるらん
 万 かぎりなき南の海のいはへ浪いくへよすらん浦の濱もふ
 千 兼 屋 人
 陸 盛 主 麻 呂

○萍 蘋 うきくさ

○根ざしこゝめぬ ○根をたえて ○身なうき草 ○よるべ定めぬ ○水の上なる ○澤のうき草
 ○池のうき草 ○ぬまのうき草 ○さそはれいづる ○水のまにく ○たざち流るゝ ○うゑぬに生る
 ○さ月のうき草 ○根ざゝで生る

古 わひぬればみをうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ
 小 町

拾 金 六

水の沫や種となるらん浮草のまく人なみの上におふれば
せきもあへぬ涙の川は早けれど身のうき草はながれざりけり
根をたえて木にうかべる浮草は池の深きをたのむ也けり
川浪に打まかせたるうき草のながれはてぬも世中ぞかし
心して根ざしとめずはうき草のにごる水にもさそはれやせむ

○莫鳴草

なりのりそ

○なのりその花 ○磯がくれ
○花つむまで ○のりにまどれる

○磯にかりほす

○波にゆらるゝ

○磯わに生る

よみ人 俊 伊 黄 中
しら 勢 軒 中

万 同

奥津浪よするありその名のりそは心のうちにとくととなりけめ
紫の名高の浦の名のりその磯になびかむ時待吾は
梓弓磯間におふる名のりそのことゝなく身はふりにけり
みごもりに名は名のりそとおもひしもかひなく浪にあらはれにけり

○藻

○沖つ藻 ○へつ藻 ○なびきも ○おきつ玉藻 ○なびく
○みだるゝ ○かよりかくより ○よりれし妹 ○よする ○玉藻 ○玉藻かる
○海士の敷藻 ○藻くず ○すお藻 ○かる藻 ○かくものけぶり ○もしほ草
○磯の玉藻 ○なびく ○濱藻 ○すく藻 ○玉ものみだれ ○玉藻かづく
○もかり舟 ○よる ○來よる ○ながるゝ ○流れふらげへ ○玉藻なす

よみ人 同 衣 基
しら 笠 笠 政
ず 内

○玉藻の枕

○いつも

○川藻

○つくも

○藻づく

万 同

打麻ををみの大君あまなれやいらこが島の玉藻かります
うつそみの命をゝしみ浪にぬれいらこが島の玉もかりをす
みさごゐる濱の真砂の打上に波きはみえてよるもくづ哉
瀬にかはる世やうらむらん川水になびく玉もの下にみだるゝ
なみくの世にはみえじなしられじな風になびかぬ底の玉藻は

○和布

め

○わかめかる ○わかめほす ○おきめ ○いせをのあま ○にぎめ ○あらめ
○めかり船 ○めかり鹽やく

万 家 夫

磯に立沖べをみればめかり船海人こき出し鳴かけるみゆ
なるみがた鶴の住む岩におふるめのめもかれすこそ見まくほしけれ
よさの海の春のうらくみわたせば筈やの庭に若めかりほす
にはをよめわかめかり舟出にけりなるとのあまやいとまなからし

○海松

みる

○深みる ○うきみる ○ありそにおふる ○沖べにおふる ○みるめかる ○かる
○ながるゝ ○みるぶさ ○千尋のそこ ○おふる ○おひゆく末 ○みるくも

古 千

うさめのみ生てかがるゝ浦なればかりにのみこそあまはよるらめ
曬たるゝいせをのあまやわれならんさらばみるめをかるよしもかな

よみ人 寶 國
しら 國

つねはさはみぬめの崎にこぐ舟のあまたみゆるやみるめかるらん

春 満

○莎草 三稜 みくり

○うきにくち行 ○根も見ぬ ○池のみくり ○江のみくり ○人のひきさる

六 津くま江におふるみくりの水早みまだねもみぬに人の戀しき

よみ人 光 俊

新六 さ山なる池のみくりのねもみねど打はへ人のくるぞまたる

光 賢

大山のすそわの池のみくり草うきにも堪へてとしぞへにける

○苜 あざ

○心あざ ○おもひあざ ○うきにおふる ○うきて世をふる ○池のあざ

六 見るからにおもひます田の池におふるあざのうきて世をはへよとや

よみ人 信 實

新六 見れば又あざ生てふ澤水は底のこころの根をぞあらはす

光 憲

うしとみていづるはなとかかたからんこころあざぞすべなかりける

○蓴 ぬなは

○かきぬなは ○ぬなは草 ○池のぬなは ○ねぬなは ○しげきぬなは ○うきにおひたる

○くる ○くるしき ○水さびまどりの○つながれて ○ながれもやらぬ○長きぬ

万 わが心もたのたもたのうきぬなはへにも沖にもよりがてましを

よみ人 同

拾 ねぬなはのくるしかるらん人よりもわれぞます田のいけるかひなき

千 奥山の岩がき沼のうきぬなは深きこひちに何みだれけむ
俊 新少 成
新 少 將
廣 呂 満

代 うかりけるみぬまにおふるうきぬなはくる事たえていく世へぬらん
風すさぶあらふの池のうきぬなはうきいとなみの安からぬ世や
うき事のます田の池のねぬ繩のくるしきまでは物をこそ思へ
春 満

○菱 ひし

○ひしふ ○池のひし ○ひしのうきぬ ○うきにおふる ○ふる江のひし ○おふるひし ○玉江のひし

万 君がためうきぬの池のひしとるとわがそめし袖ぬれにけるかも
よみ人 同

六 あすといへば心ぼそみの池におふるひしのうきぬをなかれこそすれ
しづがとるうきぬのひしを宮人の衣のあやにたれかおりけん
同 千 隆

心ざし深澤水にとるひしのみをいたづらにしづめはてばや
よみの雨の露はがらかに明そめてひしふのてふも床はなれけり
美 痴 言

○蓼 たで

○水たで ○青たで ○穂たで ○いぬたで ○からきめ ○からしや

万 わがやどの穂たでふるからつみはやしみになるまでに君をしまたん
よみ人 同

六 みな月の河原におふる青蓼のからしや人にあはぬ心は
衣 笠 内 同

新六 鷺のある川への穂たでくれなるに夕日さびしき秋の水かな
春 満

みをつみておもへばたれもやはたでのからき世わたるうさはかはらじ

あぢきなや水草にまじるいぬたでのからき世にのみ名は老にけり 黄中

- 篠 さゝしの
- 玉ざゝ ○小ざゝ ○小笹はら ○さゝ原 ○笹生 ○小笹生
 - さゝまくら ○さゝむしろ ○さゝくろめ ○さゝわくる ○さゝのいほ ○小笹がくま
 - 笹葉かりしき ○野べの小笹 ○岡べの小笹 ○玉笹の葉分 ○岩間のさゝ ○しのゝ小笹
 - さゝ分る道 ○さゝ分衣 ○うかれのさゝ原 ○道のさゝ原 ○野べのさゝ原 ○野路のしの原
 - 汀の小笹 ○小笹が垣 ○さゝや ○さゝのまるや ○さゝのいほ ○さゝがき
 - しのや ○笹の戸 ○音さやぐ ○ひさふし

万 妹がりと吾通路のしのすゝき我しかよはばなびけしの原 よみ人
 拾 わが釣は早くもかなん天ひこが八重さす岡の玉篠の上に しらす
 千 かれはつる小笹がふしをおもふにもすくなかりける世々の数かな 同
 新 小さゝ原風まつ露の消やらで此一ふしをおもひおこな 俊成
 夫 よし野山みねのあらしのはけしさにさゝのいほりは露もたます 大進
 新六 風かよふ野守がいほのさゝむしろ木陰ならねど夕涼せり 信實
 露しげき岡べの小笹わけもけばひろはぬ玉の袖にみだるゝ 涌蓮

- 竹 たけ
- くれ竹 ○うる竹 ○わか竹 ○笹竹 ○御河竹 ○おまへの竹
 - われ竹 ○みかきの竹 ○かばたけ ○夕ぐれ竹 ○なよ竹 ○しの竹

万 いくみ竹 ○むら竹 ○一村竹 ○雪のむら竹 ○雪の下をれ ○竹の葉すさぶ風
 古 竹のそのふ ○そのふのおくの竹 ○竹すがき ○竹垣 ○竹の葉山 ○竹の落葉
 後 木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり よみ人
 金 君がためうつしてうるくれ竹に千代もこもれる心ちこそすれ しらす
 千 幾千代とかざらざりけるくれ竹や君がよはひのたぐひなるらん 院
 新 竹の葉に吹風よわる夕ぐれの物のあはれは秋としもなし 宮内卿
 六 もみぢする草木にも似ぬ竹の葉ぞかはらぬ物のはじめ也ける 貫之
 細 吳竹はいろもかはらでみづ垣の久しき世より縁なるかな 公實

○いさゝむら竹 ○おひそふ竹 ○谷のくれ竹 ○さしの竹 ○長橋のかばたけ ○根ざし
 ○竹の林 ○みぎりの竹 ○まごの竹 ○竹のさえた ○竹の生末 ○しげみさえた
 ○なよ竹のこをよる ○から竹 ○野竹 ○まの竹 ○竹のやぶ ○心むなしき竹
 ○竹のまがき ○竹の下風 ○葉分の月 ○やふばら ○竹のほつえ ○やぶ原かくれ
 ○日の光やぶしわかぬ ○ほつえ ○竹のしげみ ○竹のほつえ ○竹のえだ
 ○一もこ ○れざし ○すぐなる竹 ○竹のよここ ○たけの下みち ○あばら竹
 ○ふし ○よ ○竹むら ○葉なり ○なびく ○此君
 ○わが友 ○おきふす ○下折 ○千尋あるかけ ○竹のふか根 ○竹の葉なみ
 ○葉分の風 ○葉がへせぬ ○さゝ葉かりしく ○うてなの竹 ○竹の壺

わが宿のいさゝ村竹ふく風の音のかぞけきこのもふべかも
 木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり
 君がためうつしてうるくれ竹に千代もこもれる心ちこそすれ
 なよ竹の音にも袖をかづきつゝぬれぬにこそは風としりぬれ
 幾千代とかざらざりけるくれ竹や君がよはひのたぐひなるらん
 竹の葉に吹風よわる夕ぐれの物のあはれは秋としもなし
 もみぢする草木にも似ぬ竹の葉ぞかはらぬ物のはじめ也ける
 吳竹はいろもかはらでみづ垣の久しき世より縁なるかな

竹の葉のそよぐ夜毎に寐覺して何ともなきに物ぞかなしき
しばらくはまどのくれ竹かけ消て月のまへもくひの村さめ
かりそめにうゑしむら竹いつしかもかきこもるべくなりにける哉
かぎりなき世をこめもたる竹なればうべこそいろもかはらざりけれ
ふる年の雪にたわめるくれ竹も子の生先はいさましき哉

孝標女
春門
千隆
成章
重成

○木

- 宮木 ○み山木 ○ふし木 ○柴木 ○しげ木 ○み木
- 木根 ○神の木根 ○うつぼ木 ○やどり木 ○舟木 ○あし木
- うき木 ○もぎ木 ○ふる木 ○つま木 ○たき木 ○さきは木
- 大木 ○小木 ○うもれ木 ○くち木 ○柚木 ○わか木
- 老木 ○黒木 ○もしほ木 ○しほ木 ○つみ木 ○みなれ木
- 枝木 ○木立 ○木末 ○そなれ木 ○ながれ木 ○直き木
- 山木 ○世々の埋木 ○まがり木 ○はき木 ○しげみ木立 ○木がくれ
- こぐれ ○木のくれ ○ふしをれ木 ○にしき木 ○たか木 ○眞木
- くゞのちの神

山しろの久世の鷹阪神代より春ははりつゝ秋はちりけり
霜八度おけど枯せぬ榊葉は立さかもべき神のきねかも
杉たてるやどをぞ人はたづねける心のまつはかひなかりけり
もかばこそあはずもあらめはき木の有とばかりは音づれよかし

よみ人
しらす
同
同
馬内侍

○枝

- ほつ枝 ○かみつ枝 ○中つ枝 ○下つ枝 ○しづえ ○はひえ ○かたえ
- たちえ ○木の立枝 ○みづえさす ○みづえ ○枝もしみゝに ○なびく ○かくる
- おほふ ○さしおほふ ○さえた ○わかえ ○五百枝 ○もゝ枝 ○千枝
- 枝もさなゝ ○枝もたわゝ ○えだたわに ○えだうつり ○むすぶ ○一枝 ○ふる枝
- さす ○しげる ○しゝに

かたやきてたれうらどはむ神の世にはゝかてふ木の生もいはずば
くらの山たかきみじかきほどゝに木々さへしなはある世也けり
花もみぢあだくらべして立る世にてらはぬ松ぞのとけかりける

春海
彦广
有功
癩

岩しろの濱松がえを引むすび眞辛くあらば又かへりけん
袖ふるか見もべきかぎり我はあれどその松がえにかくれたりけり
直き木に曲れるえだも有物を毛を吹疵をもとむるがうき
大ぞらのみどりの色をきそふまで生のほりたる園のまつがえ

有馬皇子
よみ人
しらす
高伴内親王
千隆

○梢

- うれ ○すゑ ○梢なびかし ○梢あまれく ○梢のみどり ○梢のしげみ
- 梢のいろ ○梢のさわぐ ○梢をみれば ○梢をぐらき ○梢もたわに ○こぬれしみゝに

山川の音ぞ梢にかへりくるきしにかたぶく風さきの松
今はたれ住ならすらんかきりみしやどの梢もおもがはりして

契冲
枝直

○葉 は

- 青菜 ○もみぢ菜 ○うは菜 ○下葉 ○わか葉 ○ふる葉 ○もこつ葉
- おかせ ○かれ葉 ○末葉 ○杉のもこ葉 ○ひろ葉 ○うら葉 ○まつ葉
- 榊葉 ○草葉 ○杉のもこ葉 ○うき葉 ○まき葉 ○くす葉 ○杉葉
- 椎の葉 ○いな葉 ○さゆり葉 ○さま葉 ○一葉 ○ひろ葉 ○二葉
- みつ葉 ○よつ葉 ○ほちす葉 ○みだれ葉 ○しなれ葉 ○本葉 ○もこつ葉
- うれ葉 ○末葉 ○くち葉 ○たち葉 ○ふし葉 ○もろ葉 ○こづみ
- こもる ○しげる ○かへる ○なびく ○さす ○しげりあふ

万 同

天雲のたなびく山のこもりたるわが下心木葉しるらむ
見れどあかぬ人國山のこの葉をしわか心からなつかしみ思ふ
ふる里に松のおち葉のつもらずは軒のあれ間を何にかくさん
大原やうしほの小松二葉より千年のかげのしるも有哉

ふみ人 枝直
しらす 成章

○根

- まつがれ ○竹のれ ○草の根 ○あやめの根 ○下根 ○根さし
- 根をばへて ○ふるれ ○根 ○かや根 ○柳根 ○あし根
- あしのわか根 ○根ばふ ○根ばへる ○たゆる根なく ○たゆる ○れもころ
- れもころくに ○根にあらはれて ○れもみず ○わか根

万 金

神さびしいはほにおふる松がねの君がこころはわすれかねつも
なには江のあしの若根の繁ければ心もかぬ舟出をぞする

ふみ人 六條右
しらす

○松

ふえにきる末もしられてくれ竹の高くなりゆく根こそ清けれ
かぐ山に根ごしてきつるたねなれや千々の社の神のまさか木
石上ふる川柳みなれそなれその根うせねば若がへりつゝ

千 東
正 隆 満

- 山まつ ○みれの松 ○谷のまつ ○そなれ松 ○濱まつ ○磯松
- さしの松 ○川島のまつ ○川へのまつ ○ひごまつ ○海まつ ○うらまつ
- ひめまつ ○ひめこまつ ○小松 ○小松原 ○わか松 ○おいまつ
- ふる松 ○ふる木の松 ○宿のまつ ○軒のまつ ○みきりの松 ○庭のまつ
- ならび松 ○松原 ○みれの松原 ○まつかけ ○山松かけ ○岩根のまつ
- 岩がれまつ ○松の木間 ○ひご夜松 ○門のまつ ○うゑ松 ○友なき松
- 松の葉ごし ○松のむら立 ○あらゝ松原 ○あられ松原 ○まつ原ごしに ○松のふた葉
- 松のけぶり ○松のこゝろ ○松のたち葉 ○松のはしら ○松の戸 ○松の門
- いつげの松 ○入江のまつ ○松のみどり ○深みどり ○浅みどり ○十かへりの花
- むすびまつ ○松のみさを ○いろかへぬ松 ○さきはのまつ ○まつかぜ ○松のあらし
- 相おひの松 ○かはらぬいる ○さきは ○かきは ○まご葉 ○まご葉なす
- さきはなる ○葉がへぬいる ○松のよはひ ○松の千年 ○松のこゑ ○まつのひんぎ
- 松のはひえ ○松のはひれ ○岩がれまつ ○岩ほに根さす ○松の下かけ ○松の下草
- 松の下風 ○松のひさしほ ○尾上のまつ ○峰にのこれる ○松のここの葉 ○松をためし ○子日のまつ
- 高砂の尾上のまつ ○松のひさしほ ○峰にのこれる ○松のここの葉 ○松をためし ○松をめぐりの垣 ○千代の生末
- 君まつの木 ○万代までに ○千代をへて

万 額田王
 同 よみ人
 古 同 敏行
 同 元善
 後 女御
 拾 貫之
 同 資仲
 後拾 資能
 千 通能
 新 性空
 六 是則
 同 伊勢
 代 資長
 景樹
 幸文
 知紀
 大秀

みよし野の玉松がえははしきかも君が、ことを持てかよはく
 あまおとめいさりたく火のおぼしく角の松原おもほゆるかも
 我みても久しくなりぬ住よしのきしの姫松いく代へぬらん
 千早ふる賀茂のやしろの姫子松万代ふとも色はかはらじ
 うゑし時契やしけん武隈の松をふたゝびあひみつるかな
 琴のねにみねの松風かよふらしいづれのをよりしらべ初けん
 雨ふるとまつ吹風はきこもれど池の汀はまさらざりけり
 岩代の尾上のかせにとしふれどまつのみどりはかはらざりけり
 萬代も住べきやどにうゑつればまつこそ君がかげをたのまめ
 千年ふるまつだにくもる世中にけふともしらでたてる我哉
 此川の入江のまつは老にけりふるきみもきのことやとはまし
 おふるよりとし定れる松なれば久しきものとたれかみざらん
 神垣にみそめし松も老にけりおもひしらるゝとしのほどかな
 高砂の松はあらしもきこえけり君が千年のかげぞのとけき
 春日野のみねのまつ原風吹ば遠き昔の聲ぞ聞ゆる
 住江のなぎさの遠くなりしよりいくらの松か生そはるらん
 さゝなみの國つみ神の御心とさかえもゆくかしがの濱松

○榊

ときはなる松は日毎のゆきかひにかざしなれてもあかぬかげかな
 人ごとに千代をおぼゆるまつの葉の心ひろさをみるべかりけり

桂 満
 有功卿

- 眞さかき ○みれの眞榊 ○八重榊 ○榊葉のかけ ○しらゆふ
- みむろの榊 ○根ここの榊 ○しげる榊 ○榊葉のいをかぐほしみ
- 榊がえだ ○五百枝榊 ○榊さる ○つき榊 ○さきほかきは ○榊立たり
- 榊葉の春さす枝 ○霜八度おけご枯せぬ ○神のきれかも ○しめさす ○ゆふかくる
- 玉ぐしの葉 ○天の眞榊 ○かさす ○さす ○山の榊 ○神のよさせる
- いはふみむろ ○ひもろぎ立て ○色もかはらぬ ○これごつきせぬ ○葉がへせぬ ○岩根におふる
- さきはなる

後 千はやぶる神垣山の榊葉はしぐれに色もかはらざりけり
 拾 萬代の色もかはらぬ榊葉はみ上の山におふるなりけり
 千 天のしたのとけかれとや榊葉をみかさの山にさしはじめけん
 香具山に根こじてきつる種なれや千々の社の神のまさか木
 はふり子がゆふとりかくるさかき葉に神代のあとは今ものこれり
 雨そゝぐ露の玉串玉ちりて夕風すゝし露の玉ぐし

よみ人
 しら
 ず
 同
 清輔
 千
 春
 伴
 鹿

○杉

- 杉の一村 ○杉の青葉 ○杉の葉がさす ○いむ杉 ○こけむすまでに○玉杉

○杉がえ ○杉がうれ ○杉むら ○あや杉 ○いはふ杉村 ○杉のむら立
 ○杉の本立 ○杉ふけるいほ ○杉の下いほ ○矛杉 ○杉生 ○かくれ杉
 ○しろしの杉 ○さし杉 ○青葉の杉 ○杉生のまじ ○杉の門 ○軒ばの杉
 ○杉の葉いげ ○杉たつ山 ○杉のたちご ○杉のもまつ葉 ○二もこの杉 ○ふるの神杉
 ○杉のしづえ ○杉のふる葉 ○杉のふる木 ○杉の下水 ○杉ばしら ○みわの神杉
 ○神杉 ○神垣のおまへの杉 ○杉たてる門 ○古木の杉

万 万 同 同 拾 千
 いつしかも神さびけるか香具山の矛杉がもとに苔むすまでに
 神なびの神より板にする杉のおもひもすぎすこひのしげきに
 神なびのみむろの山にはふ杉おもひすぎめやこけむすまでに
 いづれをかしるしと思はんみわの山ありとしあるは杉にぞ有ける
 ときはなる三上の山の杉村や八百萬代のしるしなるらむ
 とし高くしげれる杉のかげことに流てよどむ谷のした水
 柚山に神さびたてるいはひ杉いつの宮木に引はもらせし
 あしからや箱根に立るみ山杉冬はあらしの宿り也けり
 いく代へぬいのるしるしもいちはやき國つやしろに立る神杉
 みわの山杉のむら立わけいれば神代のかせの音ぞのこれる

足 人
 よみ人
 同 之
 貫 之
 季 經
 廣 足
 春 滿
 久 胤
 眞 淵
 有功 痴

○榧

○榧のしげ山 ○榧立山 ○榧のたつあらし山 ○榧のふる木 ○榧の下葉 ○まきの葉
 ○榧のしげ山 ○榧のしづく ○榧の葉末 ○榧の一むら ○榧ながす ○まきのたちがれ
 ○まきの榧 ○まきのふるえ ○榧の下草 ○まきの柚 ○榧たつ山 ○榧たつおく
 ○榧山 ○榧の柚木 ○榧のしげみ ○つれなき色 ○榧のしげ山 ○榧の外山
 ○榧の遠山

万 万 新 新 新六
 あだへもくをすての山の榧の葉も久しくみねば苔生にけり
 さびしさはその色としもなかりけり榧たつ山の秋の夕ぐれ
 かげくらき榧のしげ山つれぐにいつを月日のあかりともみづ
 み山には木がらししらぬま木ならで染し一葉はのこらざりけり
 おく山のおく霜八度かさぬとも榧のみどりは千代もかはらじ

よみ人
 家 蓮
 信 實
 枝 直
 眞 淵

○檜

○ひのき ○檜原 ○しげき檜原 ○ふるき檜原 ○檜原のこゑ ○たてる檜原
 ○檜原くもらぬ ○檜原の中 ○檜原がおく ○峯の檜原 ○岡への檜原 ○かすむ檜原
 ○外山の檜原 ○檜原にくるゝ ○檜原にくもる ○かさしなる ○たてる ○しげき
 万 万 同 同 王
 みむろづく三輪山みればこもりくの初瀬の檜原おもほゆるかも
 もく川の過にし人の手をらねばうらぶれたてりみわの檜原は
 苔深き洞の秋風身にしみてふるきひばらの音ぞかなしき
 ひく人もあらしものを柚山に宮つくる檜のつまでなりせば
 みわの山かつは檜原もみゆるかな杉のほつえに立ならびつゝ

よみ人
 同 之
 土御門院
 枝 直
 茂 承

○檜 なら

○ならがしは ○ならしは ○ならの廣葉 ○檜のむら立 ○ならの落葉 ○ならの木かげ
○ならのしづえ ○ならの葉しは ○ならのもみぢ ○ならのかれば ○ならしがほ
万 みがかりするかりばの小野のならしはのなれはまさらで戀こそまされ よみ人
後 わがやどをいつならしてかなみの葉のならしがほにも折におこする 俊 子
同 ならの葉の葉守の神の有けるをしらてぞをりしたよりなさるな 枇 杷 左
○ する人も今はまれにぞならのはのそのふることは世につたへても 春 滿

○柏 かしは

○ならかしは ○ならの葉がしは○玉がしは ○かしは木 ○葉廣がしは ○もりの柏木
○あから柏 ○ながめがしは ○青がしは ○この手がしは ○いはてがしは ○柏のひらて
○葉守の神 ○ほゝがしは ○ながめかしは ○朝柏 ○そこものかしは○ならのかしはぎ
○もしかしは ○むらがしは ○みつのがしは
万 吾せこがさゝげてもたるほゝかしはあたかも似たる青き絹がさ 惠 行
同 すめろぎのとはみよゝははいしきを酒のむといふぞ此はゝかしは よみ人
古 石上ふるから小野のもとがしはもとの心はわすられなくに 同 さらず
同 人こふるながめがしはゝふる郷のうきねにのみぞしげくみえる 同
露しぐれとほさぬもりのかしは木をいかで葉守の神はしめけん 千 千
すめ神にひもろぎまつるころなれや都へはこぶみねのかしは木 千 千 陸 嶺

○栢 かへ

○かへの木 ○かへの實 ○花さく ○かへの風落 ○葉がへぬ色 ○かへの木むら
六 色かへぬかへの葉のみぞ秋なれどもみぢする事ならはざりける 貫 之
新六 花さけど人もすさめぬかへの木のいたづらにのみ實はなりにけり 衣 笠 内
としごとにもどり深めてかへの木のいやわか々へりいくよへぬらむ 千 陸
いかにして人に心をかへの木のかはらぬ色をしへしかな 契 沖

○椿 つよみ

○玉つばき ○やつ尾の椿 ○はた山椿 ○み山椿 ○つらく椿 ○八千年椿
○わが門の片山椿○はま椿 ○つばき市 ○いろかへぬ ○八千させ ○八千代
○千年へむ ○八重さく椿 ○葉がへぬいろ ○あし引のやつをのつばき ○しら玉つばき
○岩根に生る ○つらくに ○つばらかに ○かた山椿 ○岩根に生る玉椿○や峯の椿
○若葉さす ○椿さく ○青椿
万 巨勢山のつらく椿つらくに見つゝおもはなこせのはるのを 人 足
同 川のべのつらくつばきつらくに見ねどもあかすこせのはる野は 老 人
同 おく山の八尾のつばきつばらかにけふはくらさねますらをのとも よみ人
同 あし引のやつをの椿つらくに見ともあかめやうゑてる君 家 持 ず
後拾 君が代はしら玉椿八千代ともなゝかぞへむかぎりなければ 資 業
新 とやかへる高をの山の玉つばき霜をばふとも色はかはらじ 匡 号

春日さす里の竹村おくみえて花數しるきたま椿かな
松杉にまさるよはひは春毎に八千代花さく玉つばきかな

敏 則
邦 直

○桂 かつら

- わかづつら ○桂がえだ ○みれのかつら ○桂のもみぢ ○ゆつかつら ○岩もごかつら
- 桂をゝる ○桂の追風 ○月のかつら ○月の中なる桂 ○もさあらの桂 ○かつらの花
- わか木のかつら ○若桂の木

万 むかつをの若かつらの木しづえとり花待今になげきつるかも
拾 久かたの月のかつらもをるばかりいへの風をもふかせてしかな
千 みづがきのかつらをうつし宿なれば月みんことを久しかるべき
いく代々のあふひかつらに千早ふる神の契とかけてたのまん
いかにせむ高間の山の雲間より月のかつらのをらぬよそめを

よみ人
しらす
菅原大直母
成 助
春 満
契 沖

○檀 かし

- 葉廣くまかし ○しらかし ○もみぢの葉 ○かし原 ○かしの葉 ○かしのみ
- かしのみのひざりぬけ出て ○岡のかし原 ○かしの木 ○かしの木むら ○ひろり
- さかゆる

万 あし引の山路もしらす白かしのえだもとをよに雪のふれよば
後 あし引の山におひたる白がしのしらすや人をくち木なりとも
水えさすこむらはあれど熊かしのしげる葉廣に猶しかすけり

よみ人
しらす
重 威
躬 恒

○榧 くぬぎ

万 わたらひの大川のへの若くぬぎ吾久にあらば妹こひむかも
新六 高瀬さすさほの川べのくぬぎ原いろつくみれば秋のくれかも
同 里人のほたさる冬のふしくぬ木大川のべのあれまくもをし
老ゆけど猶ことの葉のわかくぬ木若くはそはむふしもまたまし

よみ人
しらす
衣 笠 内
信 實
芦 庵

○楸 ひのき

- 濱ひさき ○きしのひさ木 ○波にしをれて ○楸の末葉 ○楸生る川べ ○楸ちる川
- 久木いまさく

万 こそ咲し久木今さくいたづらに土にやおちむみる人なしに
同 浪間より見ゆる小島の濱楸久しくなりぬ君にあはずて
新 君こふとなるみの浦の濱楸しをれてのみも年をふるかな
われみてもとしをつもりの濱楸生そめし世はさぞな久しき
わがよへり春の若葉のわか楸久にさかえむ千代に八千代に

よみ人
しらす
俊 頼
春 満
宣 長

○栗 くり

- みかくり ○さざくり ○わかくり ○くり柴 ○枝ぐり ○實なしぐり
- 落ぐり ○風まちて拾ふ ○はらくさ ○おつる ○うづもるよ

夫 山風に峯のさゝぐりはら／＼と庭に落くる大原のさと
同 風待てひろふとすれど袖のうへにかゝる木かげの露の落栗
ふく風に心おくれぬみかくりのつひには世にもぬけ出にけり

寂 爲 重
蓮 相 威

○桑 くは

- 桑まゆ ○新桑まゆ ○桑子 ○桑の葉 ○園生の桑
- 桑のいくもこ ○こきたれて ○八桑枝 ○いかしは桑枝 ○桑のわか葉

万 たらちねの母の園なる桑も猶ねがへば衣にきるといふ物を
後 引まゆのかくふたごもりせまほしく桑こきたれて泣をみせばや
新六 里人の今もこくてふ桑原やしげるともみぬ夏木立かな
妹がつむ新桑の葉もあらそへば國のみだれとなるてふ物を
こがひする時にけりとしづのめがくろの若桑つまぬ日もなし

ふみ人
しらす
忠 房
信 實
廣 足
積 臣

○檜 しきみ

- しきみの青葉 ○しきみが花 ○しきみつむ ○しきみ流るゝ ○みれの檜
- 山路の露 ○墨そめの袖

万 おく山の檜の花の名のごとやしく／＼君にこひわたりなん
新 檜つむ山路の露にぬれにけりあかつきおきの黒染の袖
新六 あか水に檜の青葉きりうけてさゝげもたればぬるゝ袖哉
明くれのつとめたもまぬ法の身はつみのこさめや峰の檜を

今 成
小 侍
光 俊
春 海

○榿 むろ

- 葉かへぬむろ ○根ばふむろ ○むろの木 ○むろのつま木 ○外山のむろ ○磯のむろ
- 浦のむろ ○岩根にたてる

万 しましくもひとりありうる物にあれや鳥の室の木はなれて有らむ
同 磯のうへに根ばふむろの木見し人をいかなりとゝはいかたりつげんか
同 瀬の浦のいその室の木見んごとにあひみし妹はわすら延めやも
みづえさすむろのつま木によりかけて磯山もとに浪ぞわかるゝ

○合歡木 ねむ

- ねむの木 ○ねむりの木 ○妹がゝたみ ○ひるは咲る ○よるはれむり ○ひるもれむり
- かうかの木

万 ひるは咲きよるはこひぬるねむの花我のみ見んやわけさへにみよ
同 わざもこが形見のねむは花のみにさきてけだしも實にならじかも
新六 山ふかみいつよりねむと名をかへてかうかの木には人まどふらん
いたづらにひるもねぶりの花をみよつひにみのなる時とはなし

紀 耶 女
家 持
光 俊
黄 中

○槻 つぎ

- ゆづき ○百枝つき ○五百枝つき ○つぎの木 ○つぎがえ ○つぎのかたえ
- 落ふらばへ ○ちる ○弓にきるてふ ○つぎ弓 ○いはひつき ○たかつぎ

万 天とぶやかるの社のいはひつきいく世まであらんこもりづまはも
よみ人
しらす

同

とくきてもみてましもを山しろの高槻のむらちりにけるかも
君が代は大はつせ路のもゝえ槻もゝ枝ながらもさかえますかな
やまとなるかるのやしろのいはひ槻いはひつきせぬ世にこそ有けむ

同 俊 朝
朝 頼

○柴 しば

- 山の下柴 ○庭のかき柴 ○柴の下みち ○青柴 ○そまもの眞柴 ○いつ柴
- 山人 ○たきゞこり ○柴さる ○柴おふ ○木柴のゆき ○ふし柴
- 柴のさえた ○柴車 ○み山柴 ○いち柴 ○はゝその柴 ○ゆきの下柴
- は柴 ○小柴 ○しひ柴 ○栗柴 ○ならの葉柴 ○ならの眞柴
- 麓の眞柴 ○木々の下柴 ○なら柴 ○ましばたく ○柴かる ○しづ
- 山がっ ○柴の立枝 ○椎のま柴 ○かれ柴 ○ぬれ柴 ○柴の雪折

万

大原のこのいつしばのいつしかと我もふ妹に今よひあへるかも

志貴皇子

同

みちのべのいちしば原のいつもく人のゆるさんことをしるらん

よみ人 しら

續

かきはなる山の下柴打なびき人はおとせで秋風ぞふく

内侍 季

六百

山深み椎の眞柴を折させと宿には風もたまらざりけり

重 威 子

所せきかまどのけふりたもまじきためしなりけりしけるいち柴
君が代のめぐみの露や種ならし山は木柴にさかゑたりけり

重 威 子

○柿 かき

- 山がき ○かきの葉 ○かきのもみち ○わがやどの柿 ○これり ○かきのもこ

○そのふのかき ○山里の柿

しめゆひてもる山里はよそにのみえさる心のかきみだるらん

壺麻呂

○鳥 とり

- つく ○水こひどり ○はこせり ○からせり ○まつむしり ○まなばしら
- とつぎをしへ鳥 ○ぬか ○ましご ○ひたき鳥 ○こがら ○こがらめ
- かやぐき ○庭たゞき ○みやこ鳥 ○かしも ○山がら ○みやづく
- ふくろふ ○ひえ鳥 ○さくなぎ ○ぬえ ○しこゞ ○いかるが
- 大鳥 ○小鳥 ○ひな鳥 ○むら鳥 ○ぬる鳥 ○もゝ鳥
- もゝ千鳥 ○千鳥 ○こぶ鳥 ○なく鳥 ○やごる ○ゆく鳥
- はなちさり ○れぐらさる ○入江のす鳥 ○むれぬる鳥 ○ゆく ○たつ
- さぶ ○れくらさぶ ○ふるす ○鳥のれ ○さりがれ ○鳥の聲
- さへづる ○おきつ鳥 ○はがひ ○つばさ ○はれ ○はれ試る
- 打はぶき ○ねに行さり ○羽をかばす ○天さぶ鳥 ○すむもり ○ひなすにゆく鳥
- はれきる ○菓くふ ○れぐら ○瀬にぬる鳥 ○わたる小鳥 ○鳥さへ雲にいる
- み山になく鳥 ○さわつさり ○ぬるさり ○さりのこえ ○衣もしらぬ鳥 ○花鳥
- 島つさり ○水鳥 ○山ざり ○かほざり ○さなみはる ○こがれ鳥
- 川鳥 ○池の鳥 ○汀の鳥 ○なぎさの鳥 ○なみ間の鳥 ○羽わけ鳥
- 千里をかける ○うき鳥 ○しら鳥 ○いろ鳥 ○雲鳥 ○林のさり
- もりの鳥 ○かさざり

万

島の宮まがりの池の放ち鳥人目にこひて池にかづかず

よみ人 しら

朝日さす佐太の岡へになく鳥の夜なきかはらふ此とし頃を
 明ぬとて何いそぐらむひな鳥のまだとくらなるこゑにやはあらぬ
 ひな鳥のかざざりよわみ飛ばねば巢ごもりながらねのみぞなく
 夏がりの玉江のあしにふみしだきむれぬる鳥のたつ空ぞなき
 ついらこを明てやりつるはなち鳥わがのがれしとおもはざらん
 おきつしま鹽ひのいそにゐる鳥のうとき心も世にぞつくさん
 畑打が打やすらひしひまをえてしばしとよまるさよき鳥かな
 くれもけばつひにねぬめるこの中のとりは野山や夢にみるらん
 枕かるあら山中の山松にねぶれる鳥のこゝろよげなる

同 同
 業 重 景 廣 廣 常 尊
 平 之 樹 名 海 操 晴

○鶴

つる たづ
 ○朝日さす岡べ ○朝日さす玉のみざり ○天のみそらに ○毛衣をかきれくて
 ○月おしてれり ○月を清みか ○月をさやけみ ○まなづる ○友づる
 ○ひなつる ○うら鶴 ○鶴をゆつる ○万代のこゑ ○つまよぶこゑ
 ○つるのれぶり ○月になく ○月すむ空に ○千代をゆつる ○たづの一聲
 ○たづかける ○むらだつ ○千をおもふ ○たてる川べ ○千代の友づる
 ○まつにすむ ○みざりの松 ○庭のまつ ○あしたづ ○よるのつる
 ○たづおれ ○朝雲に ○夕雲に ○澤べ ○なく
 ○友よぶ ○おもひい日る ○おりぬる鶴 ○くもぬの鶴 ○万代のこゑ
 ○千代よばふ ○つるの毛衣 ○わたる ○妻よびかはし ○みなさえ

○大江 ○淺澤 ○舞ふ鶴 ○あさりする ○澤になく
 ○汀のつる ○澤のつる ○くもに羽うつ ○くもぬにすむ ○くもぬにかける
 ○くもぬめぐらふ ○老つる ○松にすむ鶴 ○鶴むら ○たつの村鳥
 ○あしべの鶴 ○かける ○天がける ○天さぶや ○浦わの鶴
 ○なきわたる ○つばさの霜 ○入江 ○澤 ○河べ
 ○みざり ○玉のみざり ○たてる ○須崎 ○月になく
 ○なきわたる

櫻田へたづ鳴わたるあもちがた沙干にけらしたづ鳴わたる 黒 人
 わかの浦に沙みちくればかたをなみあしべをさしてたづ鳴わたる 赤 人
 近江より朝たちくればうねの野にたづぞなくなるあけぬ此夜は よみ人
 なにはがた沙みちくらしあま衣田みの鳥にたづなきわたる しらす
 大空にむれぬるたづのさしながらおもふ心のありげなるかな 伊 勢
 むれてゐるたづのけしきにしるき哉千年すむべき宿の池水 頭 季
 住の江の濱の眞砂をふむたづは久しきあとをとむるなりけり 伊 勢
 ひめ鳥や小松がうれにゐるたづは千年ふれども年老すけり 鎌倉 右
 おのが世に千世をしめたるあしたづはすがたも聲ものどけかりけり 千 陸
 あもちがた霜の花ちる朝ごちに櫻田とはくたづそなくなる 美 痴
 八千代へし雲ののつるのいたゞきに茜さしそへ朝日句へり 俊 榮

松の上にはじめてすだつひなづるの千世のこゑこそ高く聞ゆれ
 大空にはねをならべてとぶ鶴の千年のかけは君のみそみむ
 仙人の飼ふ手はなれぬ白鶴も君が御代にはむれて出らむ
 くれなるに匂へるたづのいたゞきは八千代ふりにし霜や染けむ

景 樹
 眞 淵
 有 功 痴
 同

○鶏

- にはつどり ○くだかけ ○ながなき鳥 ○ゆふ付鳥 ○白たへのゆふ付鳥
- たがみそぎゆふ付鳥 ○鳥のはつこゑ ○鳥のはつれ ○おごろかす ○しのゝめ告る
- あけぼのつぐる ○はつこゑ ○八聲 ○そらなき ○明るをつくる
- 時つぐる ○夜ふかき聲 ○あかきつぐる ○こりおれ ○しばやく
- かけるさなく ○夜をのこす ○やどの庭鳥 ○里より里に告わたる ○またれする
- れぐら

古 たがみそぎもふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく
 同 戀〜てまれにこよひぞあふ坂のふつけ鳥はながすもあらなん
 新 曉のふつけ鳥ぞあはれなる長きねぶりをおもふまくらに
 新拾 ことしげきわがならはしにおきなれてきけば夜ふかき鳥の聲哉
 新六 深き夜にまづ一しきりこゑたてよもふつけ鳥は又ねしてけり
 けふも早申のさがりになりぬらんとぐらにのぼるにはとりのこゑ
 榊葉をねぐらに神の宿直してもふつけ鳥や時まうすらん

よみ人
 しらす
 同 式子内親王
 御 製
 信 實
 景 樹
 安 守

○鳥

人はまだいそぎも出ぬきぬ〜をおのれもよほすくだかけのこゑ
 朝日かげとよさかのぼる君が代は長なき鳥のこゑのどかなる
 あかときの長鳴鳥の神代より家もさらず時もたがへず

春 夫
 春 門
 有 功 痴

- 朝がらす ○夕がらす ○夜がらす ○月夜がらす ○友がらす ○ねくらあらそふ
- み山木 ○そまものもり ○もり ○されからす ○八咫鳥 ○うかれがらす
- やもめがらす ○み山がらす ○千もちがらす ○さわぐ ○あかつき ○しのゝめ
- 夜ふかなく ○むらがらす ○れぐら ○れにゆく ○大をそ鳥 ○松林
- むれぬる ○山のべ ○有明の月に ○櫓しづげく

万 曉と夜がら。なげど此山の木末のうへはいまだしづげし
 同 朝がらすいたくなきそわがせこが朝けのすがた見ればかなしも
 金 たぐひなく世におもしろき鳥なればもかしからずとたれか思はん
 類 ひとりなほゆも有げり夕がらす同し梢のかけをへだてよ
 かげきもる夕山がらす一聲はけふの名ごりの雲になくなり
 朝づらよほの〜のこる片岡の松の葉がくれなくからすかな
 朝ぐもり日は高からし河づらにあさるからすのこゑふくる也

よみ人
 しらす
 同 少将内侍
 濟 繼
 美 隆
 尊 朝
 久 胤

○雀

- 稻すゞめ ○むらすゞめ ○すゞめのひな ○すだつ雀 ○すゞめの子 ○朝すゞめ

○すめめかたよる○こもすめめ ○れぐらあらそふ○れぐらにさわぐ○竹をれぐら

新六 人ぞうきすいめのひなの手なれつゝしばしも身をばなれざるらん

夫 いなすいめむれわたる也賤のやの門田のひたにてたまやすむる
いながらにすたくすいめは葉がくれてまれにのこる穂をや争ふ
なるこ引方はみえねどむら雀きりの内より立てきにけり
なるこ引門田のいねのほどもなく立てはかへるむらすいめかな

知家 宜旨 芦庵 常操 眞淵

○鳩 はと

○家ばこ ○山ばこ ○はさのつみ ○はさふく ○はさなきかはす○妻よぶ
○友よぶ ○雨よぶ ○こもり聲 ○木深き山 ○はさふく秋

六 われを秋とふる露みれば山ばとの鳴こそわたれ君まつのに
まぶしささつをのみにもたへかねて鳩ふく秋のこゑたてつなり
とびかける八幡の山の山ばとのなくなる聲は宮もといろに
さびしさを眞柴のいほの夕ぐれにひとり友よぶ山ばとのこゑ
とふ人もあらし吹しく山里に何しかくゝとはとのなくらむ
あはれなりかや吹影にそぼぬれて家ばとかへる雨の夕ぐれ

よみ人 季 顯 倉 右 充 香 壘 呂 春 夫

○鷺 らぶ

○青さぎ ○わたる ○れぐら ○たてる ○あさる ○しら鷺
○みこさぎ ○みのけしなるゝ○かなげ ○雨にしなるゝ ○そさのもり ○雨はるゝ

○雨のなごり ○さぎの毛衣 ○鷺のぬる井ぐひ○入江の松にゐる○淺瀬にたてる ○雪にまがふ
○心さけてれぶる○鷺のつら ○まつかげ ○木末 ○川べ ○澤へ
○田づら ○鷺のひこむら ○こぶさぎ ○ゆくさぎ ○立さわぐ ○むれぬる
○洲さき ○柳かげ ○田づらの澤 ○池のみきは ○もりの木の間 ○むれゆく
○江の鷺 ○あしのかげ ○あし間 ○浦つたひ

同 六 風

すごき哉かもの川原の朝風にみの毛みだれてさぎ立るめり
高しまやゆるぎの森の鷺すらもひとりはねじとあらそふものを
びるよりもゆるぎのもりに住む鷺の安きいもねす戀あかしつる
川上のしげみのさぎのねぐらよりやゝしらみゆく明ぼのゝそら
すみた川すさきに立るしら鷺は浪をやおのが友とみるらん
なには江やひまなきあしはうらがれてさぎのみのけに夕風ぞ吹
雨はるゝ田づらの川の古ぐひにさぎもみのげをかけてほすなり

慈 鎮 よみ人 千 隆 同 景 樹 廣 臣 枝 直

○鵲 かさよぎ

○鵲のわたせる橋 ○鵲のゆき台の橋 ○鵲のより羽 ○鵲の羽に霜ふる ○鵲の羽をならぶる
○かさよぎの橋 ○夜わたる

後 夫 六 かさよぎのみねとびこえて鳴あけば夏の夜わたる月ぞかくるゝ
鵲の羽に霜ふりて寒き夜をひとりやわがねん君まちわびて
月清み梢をめぐる鵲のよるべをしらぬ身をいかにせむ
はげしくもふりくる雨をう治川のうしとしらすやたてる鵲

よみ人 呂 人 呂 春 海

○鷓 山とり

○さほ山鳥 ○をろのはつ尾 ○ほろくさなく○しだり尾 ○をろのかつみ ○尾向ひに妻ごふ
○ひさ尾こゑ ○あし引の山鳥

万 おもへどもおもひもかねつあし引の山鳥の尾のながき此夜を
ひるは来てよるはわかるゝ山鳥のかけみる時ぞねはなけれける

六 神にこそ契はかはれひるはきて夜はわかるゝみわの山どり
さくら咲く遠山どりのをのゝえもくちぬべき程ながめのみして

○百舌鳥 もす

○もすの草ぐき ○もすの早にへ ○鷓の尾ぶり ○尾花の末になく○は下の立枝 ○片山ばやし
○ふる木の萩 ○賤が垣根 ○野づかさ ○そごものもり

万 春さればもすの草ぐき見えねどもわれはみやらん君があたりは
もすのゐるふのえの萩も霜がれてあしたの原に秋ぞくれ行

新六 ちりぬべきはしの立枝のもみち葉にもすの尾ぶりのしたりがほなる
夫 はじめみち風にみだれてちりにしを枝にかへるはもすにぞ有ける

○鷺 わし

○わしのすむあら山中○み山のわし ○うへみぬわし ○さやなるわし ○木立のおく
○かまなく鷺 ○さし羽

かた岡のそばの立木のきりはれて梢あらはにもすぞなくなる

万 つくはねにかまなくわしのねをのみかなきわたりなんあふとはなしに
新六 又はよく羽をならぶる鳥もあらし上みぬわしの空の通路

おきつ浪千度くだくる岩角におりゐるわしの聲もすさまじ
あはれ也澤山のおくにすむわしのおのが羽もてそ人に射らるゝ
ものゝふの矢にはへみればわしのはのなれるはてまでもかしかりけり

○龍 たつ おかみ

○くもぬのたつ ○たつこふ神 ○雲ぬがくれ ○雲をおこす ○雲ぬにのぼる
○日かげにのぼる ○雲さわぐ ○おかみの神 ○雲ふみあたし ○大そらに
○天がけりゆく ○天路さわたる

万 わがをかのおかみにいひてふらせたる雪のくだけしそらにちりけん
あやしくもふりくる雨か一寸ちにくもばかりこそたつとみえしか

くもぬまでのぼる硯のみづからもあやしとのみやおもひたつらん
とりの海の浪をさかまき月の山こやしき峯にたつかけるみゆ
浪をたて雲をおこしてふじのねも及ばぬ空にのぼるたつ哉
久かたの空おそろしき雲の中にくらおかみこそあらはれにけれ
ひそみてもつひにはたつの身をしれと天つ雲ゐにあらはれけにり

○虎 とら

○てがひのこら ○こらふす山 ○こらふすのべ ○こらのふしごの竹 ○こらの尾 ○こらこふ神

藤原真人 清 秀 魯 有 直 功 癩
有 功 癩 兄 庵 道 雄 陸

よみ人 光 千 弘 有
しらす 隆 調 功 癩

よみ人 衣 寂 契 枝
笠 蓮 沖 直

よみ人 契 春
しらす 沖 満

六 拾

○さらの口 ○さらの子 ○ふすさら ○もろこしの ○から國の
 ありとてもいく夜かはふるから國のとらふす野べに身をもなげてん ふみ人
 浅ぢふの小野の篠原いかなれば手がひのとらのふし所たる しらす
 あたむくふおもひはですにくらぶればとらもつたなき物とこそみれ
 から國のとらてふ神をとりえつうつはぎにせりかしはでの臣 同
 さても猶あらびやくとらへ来て櫻さく野にかひみてしかな 春
 すへらぎのたけきまもりとみうぶやにとらもつかへてうなねつくらん 千
 とらをしも手がひになしてとこしへに住人ありときくはまことか 光
 安 光
 有功 守
 痴 彪

○牛

○野うし ○野がひの牛 ○こまひうし ○うしの子 ○つくしの牛 ○牛のあゆみ
 ○水かふうし ○おも荷引 ○うしの車 ○田のあせひく ○はなちかふ ○はなぐひ
 ○はな繩 ○ゆきなやむ ○牧の小うし ○子を思ふ牛 ○田かへす ○からすき
 ○艸につく

後 六 新八

わがのりしことをうしとや消にけん草葉にかゝる露のいのちを 閑院
 あし引のやまとことゐの牛なればおもしろくこそけふは引けれ ふみ人
 稻葉わけ人の田のくろひく牛の横道もなき時代也けり しらす
 おのづから牛の心にひかるらんつなとるをのこいそがさりけり 光
 大君の御車かけてゆくをりはうしも位のありげなるかな 景樹
 游 澄
 清

○馬

夕月のかげすむ野ぢのかへるさはいそがぬ牛も心ありけり 依平
 春の野にはなてる牛のあもみにもおそき日影はおくれざりけり 景樹
 をすくにの民をたすくるからすきのもある身をうしといはめや 有功

- | | | | | | |
|--------|--------|---------|--------|---------|---------|
| ○あしげの馬 | ○黒駒 | ○赤こま | ○手馴のこま | ○春のこま | ○牧のあらこま |
| ○なぶちの駒 | ○夕かげの駒 | ○鹿毛の駒 | ○月毛の駒 | ○つるぶちの駒 | ○甲斐の黒駒 |
| ○こゝろの駒 | ○老たる駒 | ○大津駒 | ○のるこま | ○駒なべて | ○駒さめて |
| ○きほひ馬 | ○くらべ馬 | ○いぞめるこま | ○たつのうま | ○野かひの駒 | ○もこし駒 |
| ○駒のひづめ | ○駒のあし | ○駒のあがき | ○はたごの駒 | ○駒のつまづく | ○つながね駒 |
| ○駒ざくり | ○わか駒 | ○妻あらそふ | ○尾花あしけ | ○たはれ駒 | ○馬のつかさ |
| ○竹うま | ○ゆふがみ | ○草はむ | ○はなるゝ | ○きはふ | ○あしざく |
| ○月びたひ | ○駒の荷ぐら | ○いばゆる | ○參はむ | ○はらばふ | ○友よぶ |
| ○つかるゝ | ○つまづく | ○あがきを早み | ○打はやめ | ○あるゝ | ○あれまよふ |
| ○山こす | ○あしなみ | ○まよはぬ | ○あゆみ | ○たつかみ | ○むちうつ |
| ○手づな | ○あぶみ | ○さねり人 | ○いばふ | | |

万 拾 後拾 新

しはつ山打こえもけばわがのれる駒ぞつまづく家こふらしも 金村
 なにはえのあしの花毛のまじれるは津の國がひの駒にや有らむ 惠慶
 たづねつる雪のあしたのはなれ駒君ばかりこそあとをしるらめ 兼俊母
 さがの山千世のふる道あとやめて又露分るもち月のこま 定家

久かたの月毛のこまを打はやめ來ぬらんとのみ君をまつかな
敷しらの玉野の原のはなれ駒とりもつなかずをさまれる世は
うつむちの下よりはせてもくこまや人の心にのるにはあるらん
その駒の荷緒かためよあしがらの關のあなたは道もあやふし
くらもおきあふみもさしつわがひしかひの黒ごまあしとからなん

よみ人 季 干 茂 御
しらす 經 箱 雄 杖

○犬

いぬ

- 家のいぬ ○やさもる犬 ○門もるいぬ ○つなき犬 ○里のいぬ ○ささびたる犬
- 犬のこゑ ○さむむる ○ぬしをしろ ○ほゆる ○むら犬

さよふけていそぐきぬたのあたりまでうたてもさらぬ里の犬かな
山里は人の通へる路もなしやどもる犬のこゑばかりして
しづがやは犬にとのへをまもらせて事ぞともなき世にこそ有けれ
君が代の戸さぬ門の明くれに心やすくもねぶる犬かな
風ふけばなづる柳の下かげにねぶれる犬の夢やいかなる
おのづから戸さしわするゝ世にあひて門もる犬ものどけかるらん

為 定 重 公 壺 有
頼 家 義 輔 呂 功 卿

○猿

さる ましら

- 友さる ○この葉さる ○山猿 ○このぬさる ○三聲なく ○子をおもふ
- 三さけび ○さけふ ○人まねす ○木の實奪る ○木傳ふ ○月のかけさる
- 月影にいのちをかふる ○夜深き雨になく

わびしらにましらなゝきそあし引の山のかひあるけふにやはあらぬ
あし引の山のたえ間に妻こふと鹿にもまさる聲聞ゆなり
夕つく日さすやあらしの山本に物わびしらに猿さけぶなり
雲かゝる梢もすりてなく猿の聲も落葉にくもる空かな
おく山の木の實とりはむさるすらも春は花咲えだにまじれり
大かたはさかしらすなる山さるも人まねならず子やおもふらむ
子をおもふ道にまどへる山さるの人にかはらぬあはれをぞみる

よみ人 同 仲 春 魚 春 有
しらす 賢 夫 彦 門 卿 功

○狐

きつね

- 老きつね ○ふるぎつね ○のらぎつね ○きつねなく ○人まごはす ○狐のふしぎ
- 人まよふ ○穴にすむ

人も見ばあなしらくし老狐いとゞもひるのまじらひなせそ
花をみる道のほとりの古狐かりのいろにや人まよふらむ
霜まよふ枯生のきつね遠近に鳴こゑ寒しなすのしの原
きつねなくむかひの岡の夕月夜一むらすごきかれ尾花哉

信 爲 依 正
夫 顯 平 隆

○猪

ゐ

- ふすぬ ○ふすぬの床 ○ひさりふすぬ ○いかりぬ ○かるもの床
- ならびふすぬ ○やすくふすぬ ○高がやにふすぬ ○立むかふべくもなき ○うたきくる
- うたきかしこみ ○またらぬ ○たげる猪 ○ぬのこぶし

玉 夫

なげかすばねなましものをよひくやくすくふすゐの床ならずとも
秋の野のかるもの下に月さえてならびふすゐの敷もかくれず
わだの原ゆく大舟もいかり猪のならせる牙はかけとめぬべし
千萬のあたにむかひていかり猪のかへりみせぬを心ともがな
かるもかきふすゐの床の夢の間もたけき心はゆるさゝりけり

常磐入道 三河 麩呂 千隆 有功卿

○熊

くま

- あらくま ○住あらくま ○古木のうつほ ○月のわ ○心のくま ○おく山
- 岩のはさま ○谷のおざる ○うつほ ○うつほ木の中

万 新六

あら熊の住といふ名のしはせ山さめてとふともなが名はのらじ
おく山に住あら熊の月のわによめこそいとくもらざるらめ
月の輪を身の光なるけだものにくまてふ名をばたれおほせけん
てる月の我身にそへる山住も心のくましあらばかひなし

よみ人 衣笠内 清光 春満

○猫

ねこ

- からねこ ○ておひのねこ ○のらねこ ○なづけがたき

夫

しき島のやまとはあらぬから猫を君がためにともとめ出たる
里はあれて庭もまがきものらねこのかくれがとさへ成にけるかな
からねこのこゑうらがなししき島の倭にはあらぬ妻やこふらん
露の間の千代もこてふの夢なればねぶらぬ猫も心有けり

花山院 猛彦 声庵 景樹

○鼠

ねづみ よめ

- よめのこ ○よめのこの小鼠 ○これづみ ○月のねづみ ○日のねづみ
- ついでむ ○ひるもねづみ

夫

よめの子の小鼠いかになりぬらんあなうつくしとおもほゆる哉
とひよればかべにかくるゝ老ねづみなれもあるじの心なるらん
かすしらすさかゆく家の鼠の子大國主やまもりますらん

法性寺 菅彦 有功卿

○兔

う

- うさぎ ○月の光の白兔 ○しろきうさぎ ○月のうさぎ ○うのけ
- 岡へ ○いほのかき根 ○山づたひ

夫

なにとなくかよふうさぎも哀也かた岡山の庭のかき根に
草分るうさぎがともの夕あさりこれや月まつすさび成らん
つくぐとおもへば月の中にすむうさぎも世々の友にし有けり

慈鎮 完 有功卿

○象

ぞう

- ささの牙 ○竹の葉をかふ ○ささ山 ○ささ川 ○みやこにささ ○から人
- はるくささ ○速くささ ○ゆたかなる世のささし ○たがやす ○民の力をそふ

御集 同

時しあれば人の國なるけだものもけふ九重にみるがうれしさ
めづらしく都にささのからやまとすぎし野山はいく千里なる
たがやして民の力もそふべくは也たかなる世のささしとぞみる

御製 靈元帝 實隆

○鼈 公 福
おのがすむ國は千里のそなたよりはるくゞきざのこゝろをぞ思ふ
むさゞび

○梢にすまふ ○尾上になく ○曉おつる ○山のさつをにあふ ○里におちくる ○むさゞびのこゝろ

万 ますらをが高圓山をせめたれば里におちくるむさゞびぞこれ
同 坂上郎女
志貴皇子
衣笠内
新六 おく山の木末をつたふむさゞびのこゑも寒けく夜は更にけり
遊 翁
としをへてきくとはすれどもむさゞびの月になく夜はねられざりけり
久 胤
むさゞびのかくろふくまのなければや霜まよふ月の空になく也

○龜

かめ
○川がめ ○川のかめ ○池にすむ ○淵にすむ ○龜のせにおふ山
○龜のうらへ ○かめうらかた ○汀のかめ ○みざりのかめ ○波路のかめ ○たからのかめ
○うきよのかめ ○あやしき龜 ○岩やにすむかめ ○かめのさしぐし ○龜山にしなぬ藥 ○かずそふかめ
○かめのよはひ ○龜のうへなる山

六 浪間より出くる龜は萬代とわか思ふ事のしるへなりけり
しづかなる水の心にともなひて住らんかめの世こそしられね
山よりも深き淵にとすむかめは世のうきせをやのがれはつらん
萬代をひとりも龜のたもつかな岩長ひめにまひやよくせし
尊 菅 黃 貫 之
孫 彦 中 之

○貝

かひ
時をえて海に出たる川龜のあそぶやたつの都なるらん
有功 卿
○磯貝 ○かたしがひ ○しゞみさる ○櫻がひ ○小貝 ○袖がひ
○すだれかひ ○すゞめがひ ○からすがひ ○梅の花がひ ○いたや貝 ○われ貝
○ちくさの貝 ○せみ貝 ○花がひ ○ふながひ ○うら打貝 ○なでしこ貝
○いろ貝 ○紫の貝 ○うつせ貝 ○あはびの貝 ○鹽がひ ○わすれ貝
○はまぐり ○白貝 ○赤貝 ○みるがひ ○物あらかひ ○あはびの玉
○あはび白玉 ○貝ふむ ○かひのね ○牛の貝ふく ○にの貝ふく ○かひの玉
○かひなくて ○かひありて ○貝あはせ ○おがひ ○ひるふ ○かひの玉
○かひの玉
○さ干のかた ○さ干のいそ ○いそのさ干 ○おがひ ○ひるふ ○かひの玉
○さる

万 同 同 同 同 同
いせの海のおまの島津があはび玉とりて後もが戀のしげゝん
いとまあらばひろひにもかむ住の江のきしによるてふ戀わすれ貝
はちすばのうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれ
いせのおまの朝な夕なにかづくてふあはびの貝のかた思して
君が代の長井の濱によるかひはひろふほどさへ久しかりけり
よする浪打もよせん我こふる人わすれ貝おりてひろはん
おもふ事ありその海のうちせ貝あはでやみぬる名をや殘さん
きの國の吹上にひろふさくら貝これには風をいとほざりけり
あまの子は袖のものとやひろふらん鹽げにかをるうめの花貝
ふみ人
しらせ
同 同 同 同 同 同 同
兵 國 同 同 同 同 同
貫 之 衛 之 衛 之 衛 之 衛
尊 孫 頼 之 衛 之 衛 之 衛
惟 道 孫 頼 之 衛 之 衛 之 衛 之 衛

わたつみの底の岩まにありぞとはたれかしらましあまならずして
杖

○葉がくれ ○めぐる ○身をかくす ○家をうつす ○おのがありか ○ありながら

國をさげ家をもちひてゆくむしのちからまことに牛にまされり
長流
風そよぐまがきの竹のかたつぶり世はあやふしと身をかくすらん
常操
かひありとおもふもはかなかたつぶりこれは思ひの家ならぬかは
蒿蹊
さみだれのふるの山へのくぬ木原青葉におもるかたつぶり哉
春夫
わがいほにひとりこもりてかたつぶり争ふ世をばしらすかほなる
景樹

○蟹 かに

○あしがに ○あしまのかに ○横ばしる ○横にゆく ○横さらふ

すむかにの浪しづかなるあし原にうきふししらぬ世をすぐすらん
春庭
あしがにはあそぶ渚をひろしとやあそぶまにく横ばしるらん
致忠
いかにかくつくろのあしの八足のすぐなる神の道はゆかすて
聖子
横さまにもくをさがなるあしがにはあしともしらで世を過すらむ
幸子

○虫 むし

○むしのれ ○むしきく ○わくむし ○むしたかる ○玉むし
○あり ○木こりむし ○みのむし ○井もり ○かたつぶり
○みよず ○ひる ○火に入る虫 ○木をばむ虫 ○野べのむし

古

○まじらつむし ○もに住虫 ○ひまる ○てふ ○小てふ
○あはびらこ ○われから ○ひまる ○てふ ○小てふ

あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をば恨みじ
よみ人
榎の葉におもるさざりを夕ぐれの雨となしてもなくかはづ哉
しらす
夕ぐれのそらに飛かふかはほりはをりく月のくまとなりけり
千平
○繭 かひこ くはこ

○ひきまゆ ○まゆこもり ○新桑まゆ ○山まゆ ○親のかふこ
○いぶせき ○こもるおもひ ○賤のめがひく ○ひく山まゆの糸

万 たらちねの親のかふこのまもごもりいぶせくもあるか妹にあはず
よみ人
新 しらせばや新桑まものかきこもりいぶせきまでもしのぶ心を
顯しらす
伊物 中々に戀にしなすは桑子にぞなるべかりける玉のをばかり
よみ人
手末のみつぎいとなむ時きぬと妹がかふこのまもごもりせり
茂枝

○蜻蛉 秋つむし かげろふ

○軒のかげろふ ○あきつ羽 ○ありやなしや ○それがあらぬか ○夕ぐれに ○まぶ
○さなめせる ○わたる

六 あるとみてたのむぞかたきかげろふのいつとはしらぬ身とはしるく
よみ人
新六 あはれなり山おろしふく夕ぐれになき敷まさる軒のかげろふ
しらす
秋つむしいかなるさちかしき島の國に其名をおはせたりけん
千陸

○蜘蛛

くも さゝがに
○くものふるまひ ○くものやぎ ○くり出す糸 ○軒ばにかくる ○空にすがる
○かきたえ ○いさなみ ○すがく ○すがける ○衣にかゝる
○さゝがにの糸 ○くもの干 ○くものいがき ○かくる

古

新

六

今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる
さゝがにの空にすかくもおなじことまだき宿にもいく代かはへむ
常ならぬ身はさゝがにの糸なれや天津空なるたのみかくらん
さゝがにの昔の袂にふるまへどなみだならではくる人もなし
さゝがにの糸にむすべる露の世もさすかにもるかげは有けり
さゝがにのいとこのもしきもふべとてなれもえものやかけて待らん
いとまなみすさひ捨たるをとめごがたゝりにかゝるさゝがにの糸

○魚

うを いを
○うろくす ○いろくす ○魚の子 ○いさなざり ○うくふ
○いけすの魚 ○つり舟 ○つりのいご ○あみ ○はたのひろもの ○はたのさもの
○おほふ ○ひれ ○釜ふせて ○さで ○こる ○玉藻がくれに
○白き魚 ○小車のわたちの水 ○つりする ○あま人 ○浦のあま人 ○うみさち
○すなごる ○ひれふる ○瀬たえの水に住 ○わたつみ ○大海 ○ありそ海
○はえ ○いしぶし

六

わたつみの神のしまける魚もゑにこぎなつかれそあまの釣舟

天

しろき魚の御舟の中に入しこそ世を治むべきしるし也けれ
あら鹽をかくのむ魚やよりくらん風もふはぶるみ熊野の浦
まがみふる串本浦の朝ぼらけ鯨つくとや船みだれたる
大君のおものゝ濱にとるうをのよりてつかふるわたつみの神
大君の御賞のまけと魚すらも神代よりこそつかへ來にけれ
わたの原よせてはかへる浪のむたかよりかくより魚あそぶ也

○鯉

こひ

○つなぎこひ ○淀こひ ○淀のいけす ○うきてひれふる ○玉藻にふす ○玉藻がくれ
○早瀬をのほる ○ゆく水の下

同 同 六

淀川の底にすまねどこひといへばすべていをこそねられざりけれ
ゆく水の下なるこひのくるしさはあみの人目をつゝむ也けり
こひこもるはりまの池のみくりこそひかねばたれ我やはたもる
時しあればたつともなれるうろくづの網にもれぬも世中ぞかし
龍の門のぼらん末をいつしかとみ草が下にひれふらすなり
水の面にわをきるこひの末つひにたつの門をもぬかむとすらん

○鮒

ふな

○堅田のふな ○すなごるふな ○ふしつくるおごるが下 ○藻ふしつかふな ○ふしづげし ○すなごれる
沖べゆきへにもき今や妹がため我すなどれる藻ふし束鮒

高安王

六 人しれず水の下にはかよへどもあふなはとらじと思ひしものを
かよりくるよるかの池にすみなれてうつくしづまともふしつかふれ
よみ人
しらず
大平

○鮎 あゆ

○わかあゆ ○あゆ子 ○あゆこさばしる ○あゆくむ ○鮎ばしる ○のぼる小あゆ
○あゆ子くむ ○落くるあゆ ○瀬への落あゆ ○瀬にふす鮎 ○淵にふすあゆ ○やなくづれして

万 まつら川玉島川にあゆつるとたゞせる子らが家路しらすも
同 とほつ人まつらの川にわかあゆつる妹がたもとをわれこそまかめ
六 君ませば物もおもはず玉川のせにふすあゆのやなほこりして
大井川小あゆくむてふさでさしてしばし櫻の花すくはいや
同 憶 眞
よみ人
しらず
廣海

○鱸 すいぎ

○入江のすゝき ○すゝきつる ○すゝきつり舟 ○くちぶさのすゝき ○尾はたすゝき
○さわくくに ○すゝきのなます

万 あらたへの藤江の浦にすゝきつるあまとかみらん旅ゆく吾を
六 すゝきつるふけひの浦のあまにもが今だにきて家つしまみん
新六 夕浪のみなとかたわけみつしほにすゝきつる舟さしわたすみゆ
ふる里にいかてつげましすゝきつる藤江の浪をけふぞみつると
人 廣 呂
よみ人
しらず
光 俊
榮 石

○鯛 たひ

○櫻たひ ○鯛つる小舟 ○鯛ひくあみ ○あかめ ○ひくてふたひ ○うくてふたひ
○つるたひ

六 あふことをあこぎか浦にひくあみのたびかさならは人もしらなん
同 もく春の堺の浦の櫻だひあかぬかたみにけふやひくらん
さくらてふ名もなつかしきあちがたの春の海べにうく魚やこれ
よみ人
しらず
同
蕎 溪

○日調 御調 ひつき みつき

○千代のひつき ○みつきもの ○日毎のみつき ○たえずそなふる ○七の道の真物 ○たえずつかふる
○はこふほろ ○民のつかさの調物

拾 朝まだききりふの岡にたつきじは千世のひつぎの始なりけり
同 といこほる時もあらじな近江なるおものゝ濱のあまのひつぎは
金 みつきものはこぶよほろをかぞふればにまの里人かすそひにけり
勅 をさまれる民のつかさのみつきものふたゞびきくもいのち也けり
代 みかりするたかの尾山にたつきじや君が千年のひつぎなるらん
きみが代は大倉山の山のごとつみかさねたるみつきものかな
國人のみつきをさむとくらづかさいとまなきまでとめる御代哉
うら安くわが田つくりて大君にまつるみつきやとしにまさまし
元 兼 家 定 顯 尊 重 足
輔 盛 經 家 輔 孫 老 根

雑之部下

○酒 さけ きくし

- みき ○みわ ○味酒みわ ○くろき ○しろき ○うま酒
- にされる酒 ○こまなぐし ○まぐし ○一夜酒 ○かすゆさけ ○八した折の酒
- もよの酒 ○菊の酒 ○きびの酒 ○天のたむ酒 ○きひの豊酒 ○豊みき
- 大みき ○かすみなくむ ○酒ほおひ ○ひとり ○竹の葉 ○酒みらぎ
- 酒みづき ○酒ぶれ ○ひさつき ○さかつほ ○かむ ○くしの神
- のむ ○くむ ○あふ ○めぐらす ○かみ酒

記 すみりがよみしみに我るひにけりことなぐしるるに我酔にけり
 万 しるしなきものおもはずは一つきのにごれる酒をのむべかるらし
 同 あたひなき寶といふともひとつきの濁れる酒に豈しかめやも
 同 いはむすべせんすべしらにきはまりてたふときものは酒にしあるらし
 万 かたしはもかたよりさけのるひ心ゆくにまかせてあそびのみこそ
 同 しばしこそつきのかすをもかぞへつれおぼえずなりぬいくめぐりとも
 同 君が代は八百萬代といはひべにたよへしみきは神もうくらし
 同 おもふどちくろきしろきをのみかはしあかき心のほどもみえけり
 輕島宮御製
 旅 人 安 守 廣 岡 周 平 深 夫

○宴 うたげ

- うたげする ○みらぐ ○みらぎあそぶ ○けふのうたげ ○うたげたぬしも ○酒みづく
- まよのあいり ○あいにのほこ

万 とし月はあらた／＼にあひみれどあがおもふ君はあきたらぬかも
 同 にはどりの息長川はつきぬとも君にかたらんことつきめやも
 同 天地をてらす月日のきはみなくあるべきものを何かおもはん
 同 そこひなくさよとすよむる酒のみてあそぶまとむはたのしかりけり
 同 おほだからともによこれる酒をくみてにこりなき世に遊ぶ樂しさ
 村 上 馬 國 人 大 炊 王 鶴 夫 千 隆

○盃 さかづき

- 盃をかたふくる ○花のさかづき ○菊の盃 ○めくる盃 ○桃の盃
- 三角柏の盃 ○あふむのつき ○のむ盃 ○さる盃 ○盃の清き光
- 盃をめぐらす ○もつ盃 ○玉のさかづき ○玉うき ○みきの盃
- 春のさかづき ○秋のさかづき

拾 有明の心ちこそすれ盃に日かげもそひていでぬとおもへば
 後拾 もちながら千代もめぐらん盃の清きひかりはさしもみえなむ
 夫 めづらしき光さしそふさかつきはもちながらこそ千代もめぐらむ
 夫 むかしたれみつの柏のさかづきを天照神に手向そめけむ
 夫 月花をうかべてめぐる盃はたへぬ酔にもなほさよげつゝ
 能 宣 爲 賴 榮 式 部 仲 房 廣 足

盃は空ゆく月の何なれやまとるせる夜にさしめぐるらん
○薬 くすり 廣 足

- いくすり
- くすりがり
- くすりし
- しなぬ薬
- くすりのあやめ
- くすし
- 雲にさぶ薬
- よもぎが島
- くする
- 老せぬ薬
- くすりばむ
- くすりさり
- 涙の上に薬求めし
- 老すしなずの薬

万 拾 同 万
わが盛いたく、だちぬ雲にとぶくすりはむとも又をちめやも
くもととぶ薬はむよは都みばいやしきわが身またをちぬべし
龜山にいく薬のみ有ければといむる方もなきわかれかな
やみはてし此世の外にもく人をよみぢにかへすいくすり哉
いく薬ふしのけぶりにたぐへずは其代の人に今もあはまし

○茶 茶湯 茶室 このめ

- このめのかたり
- このめけふり
- 釜の湯
- まごぬ
- うつみ火のもこ
- 宇治山
- つみいる
- 春の木のめ
- わきてしづけき
- 梅が香
- 月の夜
- 雪のあした
- まつかぜの音
- 波の音
- あるとす
- わび人
- すき人
- まれ人
- たぎらす

宇治山のさとびをとめにつまればたゞ大かたの木芽ならまし
つれく人と人はぬまの松風をまどの内にもまらきよてけり
つみいる、春の木芽は月の夜も雪のあしたも香に匂ひつゝ
廣 廣 御 杖
臣 海 杖 臣

○烟草 けぶりぐさ

- くだの烟
- くゆらす
- ふく
- けぶりをすふ
- つみてくゆらす

天地をかなへにいらてもちたればせばしと家もおもはざりけり
眞清水をひさごとりとて朝よひにすます心もくみしられけり
打ふけばいぶせかりつるおもひさへそらに消ゆくけぶり草哉
ふじのねはたゝす成にし世の中にかをりみちたるけぶり草哉
けぶり草つみてくゆらすほどばかりもゆるおもひもなぐさまれつゝ
依 芳 大 信 廣 呂
平 樹 秀 友 呂

○書典 ふみ

- 鳥のあま
- かんな
- まな
- もしほ草
- こののは
- さかしらぶみ
- ひつぎのみふみ
- みかごのみふみ
- ふみゝる
- ふみのちり
- まさく
- 内外のふみ
- かしこきふみ
- みづぐき
- 玉づさ
- ふるこさぶみ
- 繩をむすぶ
- うましふみ
- ひとりふみ
- みる
- まなぶ
- ならふ
- ひらく
- くにつぶみ
- えみしのふみ
- からのふみ
- やまこぶみ
- から倭のふみごも
- はらふ
- むかふ
- 神のみふみ
- すめらみふみ
- 大御ふみ

神な月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ
きみがためいはふ心のふかければひじりの御代のあとならへとぞ
はゝそ山みねのあらしの風をいたみふることの葉をなきぞあつむる
むかしより名高きやどのことの葉はこのもとにこそ立とまるてへ
しぐれつゝふりにしやどのことの葉はかきあつむれどとまらざりけり
有 末 太政大臣 實 之 天曆御製 中 務

後拾

一卷にちいのこがねをこめたれば人こそなけれこゑはのこれり
よくよめばえみしのふみもすめ國の道をたすくる事は有けり
あふぐべき神代のあとを其まゝに今もみるべくしるすふみかな
みわたせば下つ千里のくまもなしふりぬるふみや高根なるらん
神の代の事らくつたへ來てしるせる御ふみ見れば尊とし
人ことにふみ好むてふうめの花めでまさりける御代にこそあれ

惠 俊 隆 眞 宣 方
度 明 吉 淵 長 功 卿

○言 詞

こと ことば

- ことだま
- ことたまならば
- こと玉の幸はふ國
- こと玉の助くる國
- こと玉の葉
- ことさへぐから
- ことふるこさ
- 神のふるこさ
- ふるきよの事
- 清きここの葉
- 神がたり
- 神の大御こさ
- かたりべ
- ことばの玉
- ことかたる
- こと麗しく
- ことよき

後拾

いにしへの家の風こそうれしけれかゝることの葉ちりくと思へば

越 前

玉

いはひつること玉ならばもゝ年の後もつきせぬ月をこそみめ

延喜御製

月

ひらごとに光さすめることの葉は玉の聲せしたぐひとぞみる

土佐内侍

おもふことうたへばなごぬ言靈の幸はふしるし眞幸かりけり

宣 長

あしかびのもえし神代のふることともことの葉にこそ世につたへけれ

千 隆

玉はしもさはにあれども夜光る玉にまされる玉は言靈

御 杖

ふく風の目にみぬ事を世の中の人音にもたてにけるかな

紫 樹

○書

て

さまざまに生立けりなみねの松これや詞のすがた成らむ

有功 卿

- てびく
- てし
- 手ならふ
- 濱千ざり
- もしほ草
- かきつく
- かきあつむ
- 水ぐきの跡
- しるす
- かきしるす
- かく

古

わすられむときしのべとぞ濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をといむる

よみ人

新

濱千鳥ふみおくのつものりなばかひあるうらにあはさらめやは

後白河院

六

かひなしとおもひなけきそ水ぐきの跡ぞ千年のかたみともなる

よみ人

古事をいまにつばらにつたへきてもじもみ國のひとつみたから

宣 長

心せで書ながしたる水ぐきのあとに中々ふしはありけり

永 章

○畫

ゑ

- うつしゑ
- 筆のすさび
- 墨がき
- くちきがき
- すみ繪
- ゑがく
- ゑがける
- みぬ世のかけなうつす
- みぬおもかけ
- ゑにかく瀧
- 繪にかく妹
- 繪にかく月

古

咲そめし時より後はうちはへて世は春なれや色の常なる

貫 之

同

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとはみれどおとのきこえぬ

三 條 町

千

春がすみゑ島が崎をこめつれば波のかくともみえぬけさ哉

重 綱

しのぶにもあまりかなしきうつしゑにみぬ世こちたくひとりことして

春 滿

おもふ人みるばかりなるうつしゑのことかたらぬぞ恨なりける

美 清

てふはまひ鳥は音をさへたてつべき筆の林の春ぞことなる

有功 續

○硯 すいり

- 石すり
- すりの水
- すりのいのち
- 硯の上のちり
- 筆の海
- すりの海
- すみの海

夫

いつはりの名をのみたてゝあひみぬは硯の上のちりやふきけん
 硯こそ心になへ墨の色のごくもすくもするにまかせて
 硯の海朝夕なるゝかひなくてよそのみるめもはづかしきかな
 ふる寺のかはれはかはるとしをへて硯の海となりけるかな
 ほどくにあさる硯の海よりは玉もくすもあらはれにけり

○墨 すみ

- する墨
- 松のけぶり
- うす墨
- 墨がれ

かゝけつゝふみゝるまどのともし火のけぶりの末を筆にかけゝり
 ときはなる松のけぶりの色香より世にちりうせぬ花も咲らん
 うらやまし千年の後もきえぬ名を松のけぶりにたれとゝむらん
 するまゝにこゝなるおのがいろみせて墨も學の道をしへけり

○筆 ふで

- ふみて
- 筆のあこ
- 筆の林
- 筆のすさび
- みとかき筆
- かく
- あまつくる
- 筆のつか
- まゆかく筆
- 水ぐき
- 花の木
- 筆さる

宣 芳 俊 瀨 直 景 大 春 仲 長 樹 子 緒

續

としをへて君がかきつく言の葉は玉藻をかれるこゝちこそすれ
 しなくのきはにもよらず手方もおよばぬ筆をいかにしてまし
 我ながらことに出てもいひとかぬ心のくまの筆のあとかな
 つまごひのねになく鹿のいのち毛に心のかざりいはせつるかな
 とる筆のみじかきつかをはしきりてたゞなほざりに書つくしつゝ
 打つけに心のほどもみめれば筆とるばかりやさしきはなし
 ことのみにふかき色香をかきやりて筆はこゝろのつかひ也けり

宣 永 春 仲 廣 隆 通 長 章 庭 雄 海 子 俊

○紙 かみ

- かみや紙
- みちのく紙
- みちのくのまゆみの紙
- ふさこる紙
- しら紙
- そめがみ
- すく
- すきかへす

こと國にたぐひやはある國つ紙神の御國のいちじるきかな
 かみや川清き真砂ぢなかりせば何に昔のあととみるべき
 とりのあとをとむむる紙やことの葉の千里にかよふ翅なるらん
 水上のあれはぞ深き水ぐきもながれての世にあとはのこれる

宣 夏 夏 敏 長 隆 直 夏

○玉 たま

- にほひ
- うるばし
- 清らなる
- さやけき
- あきらけき
- よるひか玉
- みがける玉
- かざしの玉
- まが玉
- 八坂の玉
- あかる玉
- みづのえ玉
- 玉たすき
- ひかる
- かゞやく
- 豊八坂瓊
- みづの八坂瓊
- いほつゝごひの玉

- みすまるの玉
- 草玉
- 手玉もゆらに
- 漉のしら玉
- 玉のみぎり
- 玉のこゑ
- 玉しき
- たきつしら玉
- あら玉
- 玉つげき
- ぬける玉
- 八十玉ぐし
- まかりの玉
- 七わたの玉
- ぬなまもゆらに
- しら玉
- 玉のみすまる
- 玉しく
- 玉ひろふ
- 浦の玉
- 玉くしけ
- 玉木
- 玉はげき
- おもひの玉
- 淵にしづめる玉
- あはび玉
- 玉たれ
- あか玉
- みすまる瓊
- 玉川
- ぬげ玉
- 衣のうらの玉
- 玉手箱
- 玉粹
- 玉のみぎり
- 玉しく
- あはび白玉
- 玉矛
- 青玉
- むらさきぬの玉
- 玉江
- 玉かつら
- 玉の井
- 玉なす露
- しほみつ玉
- 玉のみゆか
- 玉まきの緒
- 眞玉
- 玉の緒
- 玉みつ
- 玉はやす
- 玉ゆら
- 玉ざゝ
- くす玉
- 玉柳
- 玉まつ
- しほひる玉
- しやくしら玉
- から玉
- 眞玉つく
- 波のしら玉
- 露のしら玉
- 玉しきの露
- ゆらぐ玉のを
- 玉むし
- さ月の玉
- なみだの玉
- 玉おしほ
- 石なごの玉
- 玉くし

記 万 同 同 同 同

あら玉は緒さへ光れど白玉の君がよそひし尊くありけり
をちこちの磯の中なるしら玉を人にしらすみんよしもがも
わたの底しづく白玉風吹てうみはあるともとらずはやまじ
わたつみのわたる白玉みまくほり千度ぞのりしかづきするあま
大海の水底てらししづく玉いはひてとらん風なふきそね
明そむる春のあしたの朝目よく見らくうれしきみづのはゝ玉
あかしの海神のこはしく白玉はあまのをさしぞかづき出ぬる

豊玉昆賣命
よみ人
しらす
同
同
同
同
廣
足

○金

うるはしきものゝたとひに玉といへば玉には又も何をたとへむ
海遠き都ながらも白玉は日なみ月なみよせ來るらむ

大 平
有 功 卿

- こがね
- あらがね
- ちよのこがね
- きたふ
- しろがね
- ゆりがね
- こがねのいろ
- 赤がね
- 青がね
- やきがね
- 眞がね
- なすのゆりがね
- むれのかね
- まがねふく
- こがね花さく
- こがねほる
- くろがね
- かたす

○寶

すめろきの御代さかえんとあつまなるみちのく山にこかね花咲
眞がねふく吉備の中山帯にせるほそ谷川のおとのさやけさ
ときはなるこかねの花も家のかせのとけき方をもとめてやさく
あたひなきこかねの花の光こそなかく人の目をもかすむれ
なりはひにさとき心を根さしにてこかねの花はさけるなりけり

家 持
よみ人
しらす
源 子
雅 足
尊 晴

- そこたから
- 天つたから
- まかややく寶
- いはふ寶
- みたからぬし
- たからのふみ
- 玉つたから
- うましたから
- たからの國
- たからの鏡
- おほみたから
- たからの銀
- うづたから
- たからの鯛
- おほみたから
- たからの銀
- みくさの寶
- 目のかゝやく
- たからの玉

夫 同

倭にはまかりの玉と草なぎのつるきはくにの寶なりけり
神代より三種の寶つたはりて豊あし原のしるしとぞなる

師 光
教 良

鏡

田がへすと日々に用ふる鋤鍬は大御寶のたから也けり
わりなくもなにもとむべき心しる友こそ人のたから也けれ
ふじのねは三國をふめるあしかなへうごかぬ世々の寶なりけり

重胤 千功 有

- 玉くしげなる鏡
- こほりの鏡
- 眞すみの鏡
- むかふ
- 丸かゞみ
- うつる
- 月のかゞみ
- みがきなす
- てらす
- 山鳥のをろの鏡
- まそひの鏡
- 手にさる
- ひもかゞみ
- かゞよふ
- 池のかゞみ
- さぎなす
- かくる
- 妹が鏡
- ますかゞみ
- 影やぎす
- 古かゞみ
- 花のかゞみ
- 榊葉にかけし鏡
- ちりぬくもれり
- みかく
- やたの鏡
- くもる
- まそかゞみ
- 野守の鏡
- 水のかゞみ
- ひめかゞみ
- みむろの鏡
- のこふ
- やたかゞみ
- さやけき
- 朝かゞみ
- うら
- 友かゞみ
- 久かたの鏡
- もちひの鏡

眞す鏡見ませわがせこ吾形見もてらむ時にあはずあらめや
はふりらがいふみむろのまそかゞみかけてぞしぬぶあふ人ことに
身をわくることのかたさにます鏡かげばかりをぞ君にそへつる
千年をも何かいのらむうらにすむたづのうへをぞみるべかりける
いかばかりやさしからましますかゞみ人の心のうつらましかば
ますかゞみうつるかたちにくらぶればみえぬ心の耻かしきかな
我がげのとるたひごととにやつるゝは老をますみのかゞみなるらん

よみ人 伊勢 有よし 公輔 春夫 伴鹿

大刀 劔 刀

たち つるぎ かなな

- 天のむら雲のたち
- 玉まきのたち
- みたち
- さびもちの神
- 秋のしも
- み
- 組の緒
- こがれづくりのたち
- 天の土握の劔
- ひしかたな
- 草なぎのたち
- つるぎたち
- たからのつるぎ
- からひさ
- こゝろさずか
- つか
- たちのやきは
- しろかれのめぬき
- くぶづゝの劔
- つむかりのたち
- つるぎのたち
- やきたち
- をろちのあらまき
- めぬきのたち
- さや
- ほりづくり
- つみ羽
- こまつるき
- 十つかつるぎ
- 玉つるき
- 小がたな
- こしたな
- おくたち
- はまき
- 大身
- つば
- わざ身
- 八つかつるぎ
- ほそだち
- ひもがたな
- もろはのつるぎ
- 塚の上にかけたるたち
- しこめ
- くろかれのたち
- 取しぱり
- わざもの

をとめの床のべにわきおきしつるぎのたちそのたちはや
つるぎたちもろ又のときを足にふみ死もしになん君によりてば
つるぎだち身にはきそふるますらをや戀ちふものを忍びかねてん
つるぎだちもろ又のうへにゆきふれてしにかもしなん戀つゝあらずは
しろかねの目ぬきのたちをさげはきてならの都をねるやたがこぞ
いそのかみふるやをとめのたちもがな組の緒しでゝ宮路かよはむ
萬代を君がまもりと祈つゝたちづくりえのしるしとも見よ
逢事をかたなさしたるなゝつごのさやかに人のこひらるゝかな

倭建命 よみ人 入道前大政 よみ人 しらす

記 万 同 同 拾 同 後 拾 六

つるぎたちはくものふは心にも身にもかどやはなくて有べき。
 女なすえみの中にもかくしもつゝるきはことにかしこかりけり
 いなむらのみ崎の海にしづめてし大刀は汐ひる玉やまきけん
 焼太刀はさやにをさめてますらをの心ますくとぐべかりけり

清島 清季 光秋 有功

○弓 もみ

- つらはぐ ○小弓 ○うせ竹 ○なるはつ ○ゆはづの貫 ○まゆみ
- あらしの眞弓 ○しら眞弓 ○楓弓 ○つよき ○心づよき ○かへる
- ゆるふかたなし ○ゆはづ ○梓弓 ○梓のまゆみ ○手東弓 ○さつ弓
- 天のかせ弓 ○はなつ ○御さらし ○御さらしの梓の弓 ○いはなつ ○はる
- ゆづる ○ゆはらふりたて ○かちゆみ ○小弓 ○おふきし ○眞弓つき弓
- ひく ○ひく手 ○いる ○さる弓 ○桃の弓 ○おふきし ○本末
- 手になる ○おしがへし ○つるはけて ○なはぐる ○ゆづかまく ○天のはし弓
- はし弓 ○十津川眞弓 ○信濃の眞弓 ○あだちの眞ゆみ ○あづまの眞弓 ○真城のそつ彦ま弓
- あたたちまゆみ

陸奥のあだち眞弓つらはげてひければる人のわをことなさん
 梓弓さこそはそりのたかゝらめひくほどもなくかへるべしやは
 みちのくのあだちの眞弓たむれども心ごはさはやますざりける
 はなつやのさかしまごとは身にかへるためしにひかん天のかご弓
 ものふの引もたもまでとる弓にむかふあだなき君が御代かな

よみ人 時房 守良 清風

○箭 矢 や

手ならしゝ弓も袋にをさまりてかよきためしのみひける御代哉

- つるや ○淡路の矢 ○まかこや ○まご ○まごをばなれぬ ○天のはしや
- 天のかせや ○もろ矢 ○ごもや ○やさき ○やの ○たむる ○矢すぢ
- はなつ ○長矢 ○矢おこ ○矢すぢたおぼぬ ○矢置つくろふ ○いたづき
- はなつ矢 ○あらしをのかる矢 ○手ばさむ ○矢をはやみ ○さしの矢 ○寛矢
- のをにむる ○いたやぐし ○かぶらや ○やつめかぶら ○なりかぶら ○れらふ
- ますらを ○ものゝ婦 ○むなしき ○いはなつ ○しの矢 ○すぐなる
- いる矢 ○ひく ○矢はさみ

ますらをのさつ矢手ばさみ射つる矢を後みむ人はかたりつぐがね
 木の國の昔弓雄のかぶらもてしゝとりなびく坂のへにぞある
 八島がた征矢のひいさもまつかせの千年のこゑにかわる御代かな
 鏡も岩もとほすと一すぢにおもひいる矢のむなしからめや

よみ人 金村 秀雄 俊明

○杖 つる

- はごのつゝ ○竹の杖 ○杖にきる ○者をたすくる ○杖つくよはひ ○卯杖
- つく杖 ○つく ○杖にかゝりて ○杖にすがりて ○たらちれのいさめし杖
- つら杖 ○千させの坂 ○老の坂 ○いはひこめつゝ ○家に杖つく ○いはひの杖
- 鳩のぬる杖

千早ぶる神のさりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり

通昭

ひとふしに千代をこめたるつゑなればつとくともつきじ君がよはひは
あふ坂をけさこえくれば山人の千年つけとてきれる杖なり
月花の世にたゝすめる身のほどをおもへば杖ぞうれしかりける
なよ竹の世をさてのみとおもふ間に杖につくべく老にけるかな
山人のもゝのしもの手束杖君こそつかめもゝといふ世も

頼基
よみ人
春門
真方

○篋 みの

- あま衣 ○わかみの ○かくれみの ○さゝめのみ ○雨により
- しぐれ ○露しぐれ ○むら雨 ○さみだれ ○露のみけ ○みのしろ衣
- 田みの ○ふるみの ○菅の小みの ○夕立 ○はる雨 ○しらゆき
- あわゆき

久かたの雨のふる日をわが門にみの笠きすてくる人やたれ
雨により田みのゝ島をけふもけど名にはかくれぬものにぞ有ける
あま衣みのきて家にいる事は神やらひよりいむといふなり
雨おもるさゝめのみのに風たちて夕ぐれいそぐ野路の旅人
おろかなるみのさがよくすみのもがな人にしられて世を過してむ
きるべくもあらぬみのかさしひてきる椎根津彦や天の道しる

よみ人
しらす
貫朝
公臣
利和
春滿

○笠 かさ

- 大がさ ○竹笠 ○柴がさ ○さす ○さしてくる ○みかさ
- おほひがさ ○かさねひ ○さねがさ ○菅笠 ○槍がさ ○打がぶく

○三島菅笠 ○眞菅の小笠 ○菅のあみ笠 ○菅の小笠 ○かくれ笠 ○袖がさ

○松菅 ○梅の花菅 ○夕立 ○さみだれ ○春雨 ○ふる雪

○大雪 ○笠やどり ○やぶれ笠 ○市女笠 ○小笠 ○笠さり山

○大君のみかさの山 ○雨ふれど ○むら雨 ○雨をしのぐ ○白菅の小笠

○みしま笠 ○難波がさ ○しがらき ○から笠

おしてるや難波菅笠おきふるし後はたかきん笠ならなくに
みさぶらひみ笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり
名のみして山はみかさもなかりけり朝日夕日のさすをいふかも
なへなりし昔こひしくおもふらんがめにきたす三島菅がさ
神風やまづわたるらんいせちゆく人のとりきしなには菅笠
わづらはしいざ世中にかくれ笠きつゝやへなん雨ふらすとも
天の下あふぐめぐみも大君の御笠の山のかげにかくれむ

よみ人
しらす
貫之
大茂
雅嘉
景樹
春滿

○衣 ころも きぬ そ

- みけし ○黒きみけし ○青きみけ し○宮人のみけし ○みそ ○紫の衣
- あけの衣 ○緑の衣 ○小忌衣 ○山あいの衣 ○山藍にすれる衣 ○から衣
- 清衣 ○狩衣 ○初かり衣 ○さむろも ○麻のさ衣 ○花衣
- あやの衣 ○にしきの衣 ○花いろ衣 ○初花染の衣 ○紫の根ずりの衣 ○紅の一しほ衣
- うす染衣 ○紅のこぞめの衣 ○紅のやしほの衣 ○紅の千しほの衣 ○すて衣 ○行ずりの衣
- やしほの衣 ○一しほ衣 ○花ずり衣 ○忍ぶの衣 ○しのぶの摺衣 ○月草の花ずり衣

- 月草にすれる岩 ○下ごろも
- 山分衣 ○露分衣
- 涙かけ衣 ○浦わけ衣
- うづら衣 ○やぶれ衣
- しづはた衣 ○露の衣
- ぬれ衣 ○旅ごろも
- 紫ずり衣 ○天の羽衣
- 新桑まゆの衣 ○衣かへしきぬ
- 鹽やきぬ ○つくしきる
- つるばみのきぬ ○みそで
- 眞袖 ○行ずりの袖
- 氷の袖 ○かすみの袖
- 眞袖かたしく ○たをやめの袖
- 草のたもこ ○こけのたもこ
- あはる ○まがふ
- たつ ○ぬふ
- 夜はのころも ○なれ衣
- 草分衣 ○あま衣
- かたしき ○秋の羽衣
- こけ衣 ○法の衣
- 皮ごろも ○毛衣
- 古衣 ○戀衣
- すまかけ衣 ○にぎたの衣
- 衣のうら ○うへのきぬ
- かさりのきぬ ○ゆはだのきぬ
- 花のま袖 ○花すりの袖
- 袖たれて ○ひれふる袖
- 墨染の袖 ○白たへの袖
- 袖ぬるゝ ○袖ひるがへす
- かさぬる ○ひさへ
- ひれ ○さる
- まつふ ○まごふ
- うらなく ○うらなく
- きならし衣 ○五百はた衣
- 鹽馴衣 ○鹽やき衣
- うすき衣 ○せみの羽衣
- ふち衣 ○落葉衣
- つるの毛衣 ○をしの毛衣
- 秋さり衣 ○夏衣
- 袖つけ衣 ○すみ染衣
- ぬのきぬ ○ぬのかたぎぬ
- あさぎぬ ○さきぎぬ
- あさぎぬ ○さきぎぬ
- 天の羽袖 ○花染の袖
- 手枕の袖 ○袖まくら
- 山あぬの袖 ○をばなが袖
- 雲の羽袖 ○花のたもこ
- いくへ ○あふ
- はる ○なるゝ

後 同 万 同 同 後 同 同 万 同 同 後

ことしゆく新さきもりが麻衣かたのまよひはたれかとり見む
 風の音の遠きわぎもがきせしきぬたもとのくだりまよ引にけり
 みや人の袖つけ衣秋萩に匂ひよろしきたかまどのみや
 岩の上に旅ねをすればいと寒しこけの衣をわれにかさなむ

よみ人 しらす
 家 持
 小 町

拾 後拾 千

さいばりに衣はすらむ雨ふれどうつろひがたし深く染ては
 神代よりすれる衣といひながら又かさねてもめづらしきかな
 うれしさをよその袖までつゝむかな立かへりぬるあまの羽ごろも
 めもあやにもはだのきぬを立ぬひて神のみけしと奉るなり
 雲鳥のあやおりなせる袖よりも小忌の衣こそ昔おぼれ
 天にますたなばたつめのおらしけむみけしのみそをくるよしもかな
 あふひてふあやの御衣をも氏人のかづかむものと神やしりけむ

よみ人 しらす
 選子内親王
 季 經
 春 門
 廣 足
 鷗 夫
 眞 淵

裳 も

○赤裳 ○玉 も ○紅の赤裳の裾 ○赤もたるゝ 赤もすそ引 ○も引のすがた
 ○下も ○紅の玉も

万 同 万 同

立ておもひゐてもぞおもふ紅の赤もすそ引にしすがたを
 いかならん日の時にかもわぎもこがも引の姿朝にけにみむ
 いせの海うたふもまふもとめ子が清き玉裳はみるかひぞある

よみ人 しらす
 同 春 満

絹

○あぶさぎぬ ○あぢぎぬ ○ぬのきぬ ○さきぎぬ ○つくしぎぬ ○あらたへの布
 ○ゆはだのきぬ ○にきたへのきぬ ○新桑ぎぬ ○かさりの絹 ○夏ぎぬ ○冬ぎぬ

きみがためゆはだのきぬをとりしでゝ神にぞまつる萬代までに

夏 季

夫

夏くればしつが麻衣ときわくるかたわ中こそ心やすけれ
よきぬを着たる人こそ中々におるいたつきもしらぬ也けれ

仲正
芳秀

○布ぬの

- あさぬの ○かたびら布 ○おく布 ○けふの細布 ○ほそ布 ○たづくり
- かちぬの ○けふのさぬの ○きその麻布 ○わのかたびら ○たづくり ○しづはた
- あらたへの布 ○てこ布 ○長布 ○網代の布 ○布さらす

萬

古

拾

玉川にさらすたづくりさらく何ぞこの子のこゝら戀しき
立ぬはぬきぬきし人もなきものを何山姫の布さらすらん
玉川にさらす調布さらく昔の人の戀しきやなぞ
いにしへにその名きこえしづはたやなるはたものゝはしめなるらん
玉川に玉ちるばかりたつ浪を妹がたづくりさらすとぞ見る

よみ人
伊勢
よみ人
千原
魚彦

○錦にしき

- から錦 ○高麗錦 ○夜のにしき ○小車のにしき ○さくらがた錦 ○春の錦
 - 秋の錦 ○木々の錦 ○花のにしき ○萩のにしき ○もみぢの錦 ○さばりの錦
 - 千重の錦 ○錦おりかく ○紅のやしほの錦 ○ぬれにしき ○さごにしき ○古郷にかへる錦
- 山のべの五十師の原はおのづからなれる錦をはれる山かも
霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のをればかつちる
みる人もなくてちりぬるおく山のみちは夜の錦也けり
- 同 古 万 賞 隠 之

○綾あや

から詞やまことばをたてぬきにおらばうへなき錦ならまし
からをとめ舟こぎよせし住の江のきしかたよりもおるにしきかな

尊澄
千隆

後

○くれはざりあや ○雲鳥のあや ○おりに出るあや ○水のあや ○あやのみけし ○あやのみそ
おもへどもあやなしとのみいはるればよるの錦のこゝちこそすれ
世にはかく立もまじらでてふ鳥のあやに昔の春をみるかな
くも鳥のあやをさながらあらはすやはたがはたにおればなるらん

よみ人
しらす
廣海
春海

○褌たすき

- 玉だすき ○ゆふだすき ○かけぬ時なく ○かくる ○かけまくほしき ○かひなにかけて
- たすきにたすく

万

玉だすきかけねばくるしかけたればつぎてみまくのほしき君かも
玉だすき心にかけてしのぶには神代のあとぞうれしかりける

よみ人
光憲

○帯おび

- 玉の帯 ○石の帯 ○ゆはだの帯 ○かけ帯 ○井田の下帯 ○紫のこそめの帯
 - 紅の、染の帯 ○かはの帯 ○布帯 ○こ染の帯 ○花田の帯 ○下の帯
 - 三重の帯 ○ゆひたれ ○ゆふ ○ゆひまばす ○露の下帯 ○氷の帯
 - ひだち帯 ○しつはた帯 ○めぐりあふ ○むすぶ ○さくる
- いにしへのしづはた帯をむすびたれ誰ちふ人も君にはまさじ

よみ人
しらす

新 古

下の帯のみちはかたぐわかるとも行めぐりても逢んとぞおもふ
あしのやのしづはたおびのかたむすび心やすくも打とくる哉
むかしより名だかき帯のうしろ手のさしもすがたのよそほしき哉
人ごとはかしまの帯のうらおもて見わぬばかりむすばれつ

友 則
後 頼
定 貞
声 庵

○紐 ひも

- いれひも
- 花のまひも
- ひもさす
- むすぶ
- さくる
- 下ゆふひも
- 赤ひも
- しらひも
- ゆふ
- さぢめ
- 小車の錦の紐
- ひものさぢめ
- 下ひも
- むすばられ
- にしきの紐
- さくらがた錦の紐
- かたひも
- 片結びなる紐
- ながき
- もひかゞみ
- 雲の下ひも
- ゆはだの紐
- 中のひも
- さく

古 万 紀

さくらがたにしきの紐をとささけてあまたはいねすたゞ一夜のみ
つくしなる匂ふ子もゑにみちのくのかとりをとめのゆひしひもとく
よそにしてこふればくるし入紐のおなじこゝろにいさむすひてむ
かすめるもえならぬ花のひも鏡のどかの山の春のけしき

尤 恭 天 墨
よ み 人
し ら ず
同
春 満

○緒 を

- 玉の緒
- 琴のを
- 中のほそを
- むすぶ
- あわを
- すゞのを
- はてのを
- さくる
- つがれを
- いきのを
- みつのを
- 四のを
- あさを
- 胸のたれを
- うみを
- なだまき
- うちを
- 胸のたなを
- しつがうみを
- ゆふ
- なだまき
- 末のを
- 心のをろ
- 長き

夫 古 万

玉のをゝあわをによりてむすへればたえて後にもあはんとぞ思ふ
かた糸をこなたかなたによりかけてあはずは何をたまのをにせん
さし高み駒のたなをの打はへて長き日あかすくるゝそらかな
ぬれきぬをぬひにのみぬふいつはりにはこゝろの緒をぞすげゝる

紀 女 耶
よ み 人
し ら ず
知 家
長 流

○糸 いと

- からいと
- 手引の糸
- むすぶ
- 願の糸
- ひく
- さくらがにの糸
- あふ
- 糸くづ
- かたいと
- 手染の糸
- みだるゝ
- ふしいと
- ゆる
- つりのいと
- ながき
- まきの新糸
- 桑十のいと
- 花田の糸
- 夏引の糸
- 麻引糸
- よりあふ
- しげ糸
- くる
- 柳の糸
- みどかき
- 水引のあはせの糸
- 花田の糸
- 麻のうみ糸
- たゆる
- しづはた糸
- ぬり糸
- 瀧の糸
- 打はへ
- 夏引の糸
- わくての糸
- あわ糸
- すぢ
- 河内女の手染の糸
- からあわの千入の糸

後 古 万

河内女が手染の糸をくりかへしかた糸にあれどたえんとおもへや
夏引の手引の糸をくりかへしことしげくともたえんとおもふな
へつるよりうとくなりにし夏引の糸はたえてもかひやなからん
ひと心みなしら糸のいろくそめてみだるゝはてぞしられぬ
打みだる糸よりもなほとけがたみむすばれたる人の心は

よ み 人
し ら ず
同
同
忠 岑
春 満

○綿 わた

○つくしのわた ○桑子の新わた ○一重わた ○わたのたね ○から人の植てしわた
○衣のつまわた ○雪のふどわた ○菊のきせわた

新六

白ぬひのつくしのわたは身につけていまだはきねどあたゝかにみゆ
駿河なるふじの桑子の新わたは高根の雪の色に似るらし
わたさはにみつぐにしるし白ぬひのつくしも年は也たかなりけり
秋風にゑめる新わたとりつみて雪山つくる畠中のさと

蒲 爲 弘 春
誓 家 訓 門

○髪 かみ

○朝れがみ ○ねぐたれ髪 ○朝髪 ○れみだれ髪 ○白かみ ○くろかみ
○ひたひがみ ○ふり分がみ ○打たれ髪 ○みざりの髪 ○よもぎのかみ ○つくもがみ
○やなぎのかみ ○おちがみ ○みるふさ ○おごろのかみ ○眞白髪 ○しらかみまでに
○おつる ○かさやる ○けづる ○むすばれ ○すぢ ○みだれ

万 拾 掘

朝ねがみわれはげづらじうつくしき人の手枕ふれてしものを
わぎもこがねぐたれがみをさる澤の池の玉藻とみるぞかなしき
けふみればしとろにみゆる山かけのおどろのかみも葵つれたり
けちかぬるかしらの霜やうき筋のかさなるたびにおきそはりけん

よみ人 くら
しらす 呂 ず
人 麻 呂
俊 頼
寛 光

○髪 かづら

○まつら ○花のかづら ○初花かづら ○花かづら ○柳のかづら ○あふひかづら

万

○もろかづら ○日影のかづら ○わさ穂のかづら
わぎもこがわざとつくれる秋の田のわさ穂のかづらみれどあかぬかも
ますらをのふしむ歎てつくりたるしだり柳のかづらせわぎも
うなる子がすさびにかくる稻かづらおち穂拾ひしかへさなるらん
未遠き世の神わざにうつもふの正木のかづらかけはじめけむ

家 持
よみ人
しらす
濱 臣
春 満

○挿頭 かざし

○かざしの玉 ○玉のかざし ○かざしの花 ○千年のかざし ○君がよざし ○櫻かざして
○わたつみのかざし ○おなドかざし ○かざしなる ○うすにさす

万 同 六 同

いにしへに有けん人もわがごとやみわのひばらにかさしをりけん
もよしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝにつどへり
わたつみのかざしにさしていはふもよ君がためにはをしまざりけり
千代祈る君がよさしにもとむればかねの枝より花ぞ咲ける
わたつみの浪もてもへるはし立のまつをかざしに手折つるかな
神さぶるみわの檜原に立まじりかざし折けむ昔とはいや

よみ人
しらす
同 同 同
眞 淵
春 慈

○櫛 くし

○眞髪ふるくし ○なぐし ○玉のをぐし ○つげのをぐし ○つげぐし ○さしぐみ
○筑紫ぐし ○わかれのくし ○ゆつゝまぐし ○くしげの小櫛 ○まぐし ○けづる
○さす ○龜のさしぐし ○さしぐしのあがつき ○つげのさしぐし ○玉ぐし ○くろぐし
朝づくるむかふつげぐしふりぬれど何しか君がみれどあかれぬ

よみ人
しらす

後六

なにはがた何にもあらぬみをつくしふかき心のしるしばかりぞ
あしのやのなだの鹽やきいとまなみつげの小櫛もさよきにけり
さしぐしやさしも久しき例とていつきの宮にけふたまふなり

玉潤女
よみ人
春 浪

○櫛笥

くしげ

○玉くしげ ○花くしげ ○あくろ ○ふた ○み ○明てだに ○ひろく

万

わがおもひを人にしらすや玉くしげ開あけつと夢にしみゆる
をとめ子が玉くしげなる玉ぐしのめづらしけんも妹にあはずあれば

笠次郎
藤原太夫

同六

君にとしおもひかくれば鶯の花のくしげもをしまざりけり
君久しそのかみこそはしのばるれ手馴のくしの明ぬくれぬと

伊勢
清 風

○枕

まくら

○こも枕	○敷たへの枕	○手枕	○新枕	○袖まくら
○ぼつほの枕	○朝ねがみふれし枕	○石まくら	○いはまくら	○岩根のまくら
○小夜枕	○初穂の枕	○玉縁の枕	○岩がれ枕	○笹まくら
○花のたまくら	○月のまくら	○枕から山	○むすふ	○ゆふ
○あやめの枕	○菅枕	○小菅の枕	○かや枕	○草枕
○籠の枕	○まくらの夢	○つち枕	○旅枕	○松がれ枕
○瀧枕	○うき枕	○かち枕	○あらしの枕	○あれまくら
○あしまくら	○かやまくら	○いなまくら	○枕のちり	○枕ゆ
○枕づく	○枕まく	○枕ならぶ	○あさでの枕	○つままくら

万同同拾千

うつくしき人のまきてし敷たへのわが手枕をまく人あらぬや
いもをこひわがなくなみだ敷たへの枕とほりて袖さへぬれぬ
むすぶひもとかん日遠み敷たへのわがこ枕に苔おひにけり
たまくらすすき間のかせも寒かりき身はならはしの物にぞ有ける
手早ふるいつきの宮のたびねにはあふひぞ草のまくらなりける
うぐひすのすのなくねもしらす朝いと人になつげそ春のこまくら
茜さすひるはいかいはすが枕よるさへとらぬ人もありけり

よみ人
しらざ
同 同 同
同 同 同
實 雄 軒
茂 雄 軒
黙

○蕤

むしろ

○いなむしろ	○こけむしろ	○菅のむしろ	○かやむしろ	○花のむしろ	○月のむしろ
○たかむしろ	○かさねる	○ひさへ	○かやのさむしろ	○あやむしろ	○さよむしろ
○たかむしろ	○むしろうら	○しく	○ちりはらふ	○ちりつもる	○玉のむしろ
○みなむしろ	○草むしろ	○草のむしろ	○床のさむしろ	○霜のさむしろ	○さむしろ
○なむしろ	○うらむしろ				

万

みよし野の青根かみねの苔むしろたれかおりけんたてぬきなしに

よみ人
しらざ

玉はこの道ゆきつかれいなむしろしきても君をみんよしも哉
わすれずはなれし袖もやこほるらんねぬ夜の床の霜のさ庭
かりそめのしつがさよやのさよむしろおきふしつらきすまひのみして
此とのよつばねならびのたれむしろたれともなしになつかしきかな

同 定 家
春 滿 樹

○床

- 一夜のまこ
- むなしき床
- なが床
- 竹の夜床
- うきれの床
- まごこ
- しきたへ
- 玉の床
- 玉床
- 朝床
- 夜床
- 床なるよ
- れざめの床
- 床のさむしろ
- ゆか
- まゆか
- 玉ゆか
- もくづの床
- 氷のまこ
- はにふの床
- 夜床れ
- 又れのまこ
- すがきの床
- 床中
- あら床

古 六

わたつことあれにし床を今さらにはらは袖やあわとつきなん
けさの床敷置ながらかなしきはあかぬ夢ぢをこふる也けり
おもひつゝ打ぬる夜はの床の上に夢も正しくあらはれにけり

伊 勢 之 政
貫 基

○簾

- すすだれ
- 玉だれのをす
- 玉だれ
- たれす
- なすのすげき
- いよすだれ
- あしだれ
- しのすだれ
- 伏やのすだれ
- 糸のたえま
- なはすだれ
- すこし
- なすこし
- ゆらぐ
- をしのまごぼり
- すく
- かよふ
- あみめ
- 玉だれのを
- 青葉のすだれ
- こもすだれ

額 田 王

同

玉だれのをすのたれすを行がてにいをはねども君はかよはず
月にまき雪にかよげん玉たれのをすのひまあるわが身ともがな
かよげてし雪のあしたの玉すだれ心高さのほどもみえけり

よみ人 しらず
真 臣
周 平

○箒

- かたみ
- かたみ
- かたみ
- 花がたみ
- まつま
- まなしかつま
- かたま
- みがたま
- かたみ
- 花がたみ
- 人のかたみ
- 妹がたま
- め
- めならぶ
- めをあなみ

古 金 同

花がたみめならふ人のあまたあればわすられぬらん数ならぬ身は
うれしけに君がたのめることの葉はかたみにくめる水にぞ有ける
あふことの今はかたみの目をあらみもりて流ん名こそをしけれ
むらさきの根ばふ横野の初わか菜かたみにつむも也かりならずや

よみ人 しらず
同 同
千 陸

○樋

- われひ
- もる
- おつる
- 竹のかけひ
- 山田のかけひ
- 下ひ
- うちひ
- かけひのくちめ

水鳥のかものすむ池の下樋なみおほしき君を今日見つるかも
むさし野のひろきめぐみに引わけし下樋の水は千代もかれせじ
おく山の苔のしづくもつもりては軒のかけひの音にこそたて

よみ人 しらず
游 清 能
尙 能

○火取

- ひとり
- 木の下ひこり
- この下げぶり
- そらたき
- ふすぶる
- 灰
- おき

六 おき火 ○ふせい ○たきもの
たきものゝかばかりおもふこの頃のひとりはいかで君にしらせん
わがためはねぶたきものをひとりしておきあかさじとおもほゆる哉
かはかりにめでたきものをあたらしくひとり衣にしめて何せん
すむ月にねやのひとりのふせごよりのぼるけふりやくまとなるらん
同 完 千 隆

蹴鞠 まり

庭まり ○まり垣 ○まりの音 ○四本の楯 ○まりの庭
○こましくしるき ○垣の柳 ○かぞふる ○なつまね程に ○柳櫻
人はみなたちつるものを庭まりのかゝる方なき身をいかにせむ
山里の木の下の草のしげらぬは春くる人のまりばなりけり
おろかなる心やしなふ庭まりをおもひあぐると人やみるらむ
青柳のえだもうごかぬ夕ぐれにかすそふまりのおともものどけし
千 盛 爲 親 隆 章 經 隆

碁 ごと

みだれで ○濱のまさこ ○波の音も打たぬ ○みだれいし ○けちさす
○かちまけ ○斧の柄くちし ○うつ
ふるさとはみしこともあらずをのゝえのくちし所ぞ戀しかりける
をのゝえのくちんもしらす君か代のつきんかぎりはうちこゝろみよ
しら波の打やかへすと見るほどに濱の眞砂のかすぞまされる
御 清 友 則 製 子 則

琴 和琴 箏 こと

おもしろき手には心のつながれてわするゝごなきすさび也けり
あくごなく打くらせとや一年の日敷を石のかすになしけむ
おもしろき手にもまけしの争ひに何ごゝちをも打わするらん
末つひに十はた三十とよむ石のかすよりしげき思をやつむ
大 重 千 依 隆 雅 平 老 隆

やまごご ○あづまごご ○つまごご ○たがつまごご ○やごのつまごご ○玉ごご
手なれのこご ○玉の緒琴 ○琴の下び ○中の緒 ○末の緒 ○はての緒
こごぢ ○こごぢたつる ○こごぢあぐ ○すがゞき ○枯野の琴 ○朽にし身の琴
うひごごならふ ○ゆの手 ○しらべ ○ゆきのしらべ ○神よりいた ○風のしらべ
松のしらべ ○水のしらべ ○涙のしらべ ○月にしらぶる ○こごぢの緒あはせ ○むつのを
中のほそ緒 ○琴のれのこごぢにむせぶ ○春のしらべ ○秋のしらべ ○琴の緒たちし
緒すけぬ琴 ○こごぢにむせぶ ○月にすむ ○いはこす ○緒をすぐる ○みつごも
ひざにふす ○天のぬこご ○こご板 ○子をおもふ鶴 ○聲きく ○ひく
かづらを ○心ひかるゝ ○かきならす ○かきあはす ○かきなす ○ならす
かきひ ○さびのを琴 ○あそぶ ○あそび ○しらぶ

ことゝはぬ木にはあれどもうるはしき君が手馴の琴にし有べし
わひ人の住べきやどゝみるなべに歎くはゝることのねぞする
あし引の山水はゆきかよひことのねにさへながるへらなり
あふ阪の關のあなたもまだみねはあづまのこともしられざりけり
大 伴 宗 貫 匡 衛 貞 之 衛 衛

後拾 古 万